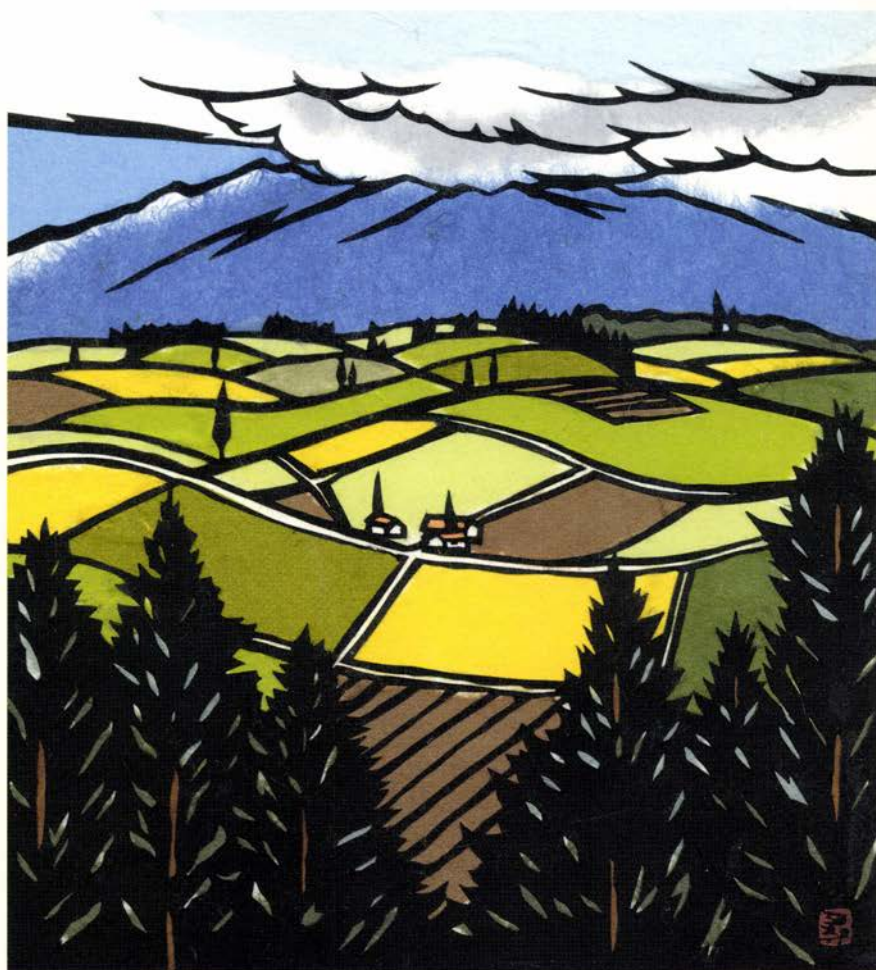


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九七五号



日川協加盟

No. 975

八月号

第14回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 20年10月5日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3階 生駒の間
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成19年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成20年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「薫風さんさん」 栗原道夫氏
兼 題 「奏でる」 (大阪) 鴨谷瑠美子 選
「天狗」 (兵庫) 北野哲男 選
「従う」 (神奈川) 小野句多留 選
「プラス」 (島根) 三島淞丘 選
「ぎりぎり」 (青森) 相馬銀波 選
「憧れ」(事前投句・9月5日締切) 河内天笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)

会 費 2,000円 当日いただきます。
(記念品:改訂増補『橘高薫風川柳句集』全句索引・他 呈)

《懇親宴》

と き 同 日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3階 葛城の間
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付き)

- ◇事前投句および懇親宴・宿泊のお申込は本誌同封のハガキに明記の上、9月5日(金)までに本社事務所宛お願いします。
- ◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の払込用紙でお願い致します。
- ◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

幽 霊

河 内 天 笑

梅雨明けていざゆうれいに出番来る 天 笑

天神祭の次の日七月二十六日は「幽霊の日」だ。これは歌舞伎脚本作家・鶴屋南北が文政八年（一八二五年）に江戸の中村座で「東海道四谷怪談」を初演した七月二十六日を記念する為に「幽霊の日」とされたのだ。

広辞苑には「死んだ人の魂」とあり「死者が成仏し得ないでこの世に姿を現したものだ」とされているが、その存在が科学的に確認された例はなく、江戸時代以前から怪談という形で流布し現在も諸々のフィクションの世界に登場している。

外国の幽霊は足のあるものが多いらしいが一六七三年に描かれた「花山院きさきあらそひ」という浄瑠璃本の挿絵に足のない幽霊が描かれており、これが現存する最古のものといわれている。この時代にはすでに「幽霊イコール足が無い」という概念があった様だ。応挙の幽霊画は江戸時代から有名でその後多くの画家に影響を与えたと言われている。

幽霊会社、幽霊部員など実態のないものを例える接頭辞に使われるのはご承知の通りだが選挙時の「幽霊人口」は川柳のネタにもされている。ところでゆうれいシーズンに先駆けて或るカルチャー教室で「幽霊」を作句して頂いた中のいくつかを列挙しよう。

お化けでも逢いたい人よ盆灯籠 正 雄

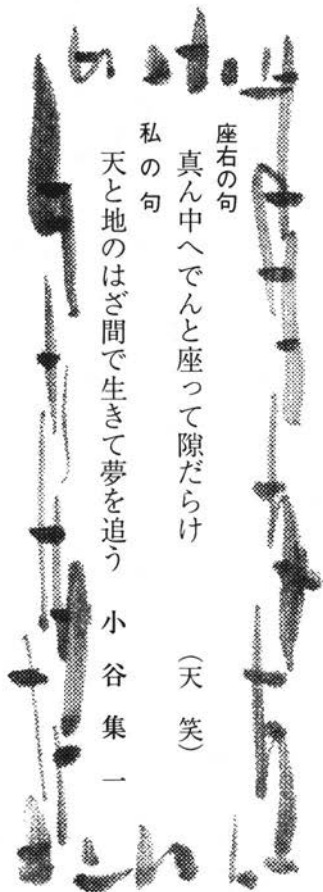
夢枕生前よりも若返り
命日に幽霊を呼び酌み交す
幽霊が側で見ている墓地でお茶
眠らない都心幽霊出にくなり
幽霊で出たことがある夏祭
聞いたことある幽霊の河内弁
ひと仕事終えて幽霊たばこ吸う
幽霊が出るのとちやうか安すぎる
ほんとうに怖い幽霊足があり
北の宿座敷わらしは家神なり
ゆうれいが出囃子待っている真夏
母に会いたし幽霊よりも夢の中
怪事件つづき幽霊出そびれる
お化け屋敷の幽霊にくる出前
幽霊も真つ暗闇に馴れてない
幽霊のメーキャップなら地でいける
知合いはみな霊界へ行っちゃまい
幽霊が選挙になると増えてくる
怖いけど読む小泉八雲集

自選句

酒の腕上げたお化けと酌み交し
幽霊もみなケータイを持っており
怖がりを選つて幽霊襲うなり
幽霊に人まちがいをされました
ムウムウを着た幽霊が出るハワイ

天 笑

加 朋 千 兵 忠 則 千 耕 美 不 克 清 見 瑠 靖 千 幸 松 里
お 枝 月 子 吾 央 彦 代 津 動 治 清 美 鬼 代 代 煙 江



座右の句

真ん中へでんと座って隙だらけ

(天笑)

私の句

天と地のはざ間で生きて夢を追う

小谷集一

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「美瑛」

■巻頭言 幽 霊

昭和の日

河内 天笑 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

仁部 四郎 …… (2)

温故知新

河内 天笑 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (44)

木津川 計 …… (47)

自選集

西出 楓楽 …… (52)

水煙抄

新家 完司 …… (78)

麻生路郎句抄

新家 完司 …… (78)

愛染帖

新家 完司 …… (78)

俳風柳多留 一篇研究 37

新家 完司 …… (78)

檸檬抄「粒」

鈴木公弘・西口いわゑ共選 …… (84)

昭和の日

仁部 四郎

「昭和の日」が祝日になったのは平成十九年で、「みどりの日」が五月四日に移った。この移動について不平や不満があるわけではないが、俳句の季語・季題になったらしいと五月某日のNHKテレビの俳句投稿番組を見て知り、ウームと思ったり、ナルホドと考えたりした。

私は昭和七年の生まれで、昭和二十年に国民学校から旧制の中学校へ進み、昭和三十一年に新制の大学を出た。軍国主義教育も戦後民主主義教育も受けた覚えがたしかにある。さきの大戦の名称については、「大東亜戦争」に三分、「太平洋戦争」について七分というのが私の評価である。

ここ数年來、いわば「昭和ブーム」で、映画もあるし、町興しのキーワードに「昭和」がなったりしている。昭和二十年八月で大きく二分されるというのが通説だが、平成も二十年で明らかになってきつつある史実も更にふえて、「大正天皇」や「昭和天皇」という存在の歴史的意味についても多様な論考が、例えば、「畏るべき昭和天皇」(松本健一著毎日新聞社)や「昭和天皇」(原武史著岩波新

「カラフル」…………… 斉藤 嘉選 …… (86)

一路集「折る」…………… 竹治かし選 …… (86)

「場所」…………… 松本よしえ選 …… (87)

初步教室「眼鏡」…………… 三宅 保州 …… (88)

秀句鑑賞「同人吟」…………… 波多野五楽庵 …… (90)

「水煙抄」…………… 宮崎シマ子 …… (92)

■句集紹介『たまゆら』三宅保州著…………… 新家 完司 …… (93)

■エッセー 大衆を見捨ててよいか…………… 早川 清生 …… (94)

七月本社句会…………… (96)

各地柳壇（佳句地十選／持田多輝子）…………… (100)

川柳塔すみよし発足記念句会の一頁…………… (114)

柳界展望…………… (117)

八月各地句会案内…………… (118)

各賞選考規定…………… (120)

■編集後記（ひとこと／井上桂作）…………… 希久子・恵子 …… (122)

座右の句

えらい子は居ぬがどの子も親思い

私の句

とびつきの笑顔で明日また会おう

黒田 茂代

（紫苑荘）

書）のように広く紹介されて興味深い。
今年の十一月で七十六歳になるのだが、数
え年では「喜寿」で、所属する某団体から五
月上旬の某日の総会で祝金をいただいた。そ
の頃にできた川柳がある。

自分史も少し自慢の昭和の日

この句は、佐賀新聞の読者文芸欄に菖蒲正
明氏の選で載ったが、「少し」を具体的に説
明するのはさすがに面映い。同世代の人には
わかってもらえる句ではあろう。

佐賀新聞には、短歌も活字になった。

連休の中に屹立「昭和の日」

貴方はあの日何処で何を

園田節子と塘健両氏の共選
「あの日」は、私としては八月十五日のつ
もりだが、戦後生まれの人に問いかけるわけ
にはいかない。だが、しかし、「屹立」の意
味については問いかけたと思う。

私の知識なり体験なりの「昭和」は、民族
の、国民の歴史としての「昭和」のなかでは
ジグソーパズルの一片の、万分の一にもなり
にくいだろうが、ゼロではない。

それにしても、とにかく、「昭和の日」は
インタレストである。

遠足や手旗手なりし昭和の日

鯨肉のライスカレーや昭和の日

恋愛を手にとってみし昭和の日

憲法をみんなが読める昭和の日



河内天笑選

大阪市 板東倫子

薫風やお地藏さまも衣更え

亡き母の見様見真似で山椒煮る

人生のこやしのような友が居る

星出さんと言う名も嬉し宇宙旅

暗い話曳きずつたまま梅雨に入る

紫の満ちる小部屋の花菖蒲

堺市 柿花和夫

国境を輕輕越えた救助犬

古代史のロマンこじ開けないロマン

チャックした口で本音がもがいてる

まだ母に僕を育てた乳房あり

スキンヘッド話せば並の人だった

悪友の開放弦が心地好く

吹田市 山本希久子

春の約束果たせぬままの蟬時雨

八月十五日昭和を思い出す目眩い

安全圏を一步も出ない酷暑

炎天歩く自分への罰ゲーム

コンビニの敬語と日本語の行方

いたずらのとつても好きな紫外線

鳥取市 徳田ひろこ

魂に三時のお茶を淹れている

突風に押され走つてばかりいる

ほんとうは翔べない鳥で籠の中

減入る日は極彩色で消すワタシ

風船の軽さで描く夢の数

百の窓百のかたちの家族絵図

京都市 高島啓子

銅像の頭に鳩が止まっている

握りつぶしは覚悟している紙コップ

棘のある言葉に鉤がついている

アンパンのゴマ権力に縁がない

大人になるためのシャドーボクシング

景徳鎮に旅行者は騙される

吹田市 穴 吹 尚 士

癖のある手書きが温い見舞い状

はすかいに世の中渡るサン格拉斯

煩惱がまだ抜けきらぬ顔の艶

拳骨で選挙待つてる高齢者

チベットを盗んで地図を書き換える

ガソリンにされてがっかりした小麦

米子市 政 岡 日 枝 子

空気を読んで人の後ろに座ってる

鍋料理うるさい奉行ばかり寄る

悪役になって下さい仏さま

私の心がたまに敵となる

砂は冗舌人の心に入り込む

あと何度梅干す籠が繕える

堺市 加 島 由 一

甲斐性のないやさしさは遺伝する

朝顔に水やる暑い日になるぞ

戯れに薔薇を贈ろうハプニング

朝風呂の妻にオレンジジュースです

日曜日のど自慢見て競馬見て

ひまわりも萎れる中を救急車

松山市 古 手 川 光

新緑にもらう明日へのエネルギー

値上げせん代りに量が減っていた

天変地異ヒトの驕りを戒める

信号の青を信用してしまふ

偏差値は低いが生きる強かさ

過去最悪の偽装は大本営だろう

砂川市 大 橋 政 良

まだ夢のつづきは捨てておりません

矢印は地獄の方を指している

線引きはどこです末期高齢者

つまずくと逃げる算段ばかりする

うつぶんの溜った足で蹴る小石

水垢で汚れたうろこ洗う旅

東かがわ市 神 保 坊 太 郎

三本の矢が一束にまとまらぬ

院号はいらぬぞ俺は偉くない

イトコ会耳の形が皆いいぞ

としよりが輝いているここに住む

飯の世は曲りくねった修羅の道

はじまりは恋人今は頼る杖

松山市 宮 尾 みのり

無手勝のあなたの優しさに負ける

老木の新芽に貰うエネルギー

ペット可のマンション孤独寄ってくる

人間を選別しそうデジタル化

相性は吉喧嘩せず進歩せず

陽炎に吸い込まれそうマイペース

弘前市 高橋 岳水

マイペース最後に笑う亀目指す
生きている限り悩みと不自由と
人間を裁く氷河が崩れ出す
花と目が合うと和んでくる心
ケータイの下僕にされて落ちつかず
見解の相違でしほれない答え

大阪市 神夏磯 典子

いちにちを咲く朝顔に教えられ
足腰が痛く苦しい分喋る
トンネルを抜けたら歌いたくなった
分かったふりする人が来て糸縫れ
蘭鑄はゆったり事件眺めてる
フセインが死んでも戦さ続いてる

宇部市 平田 実男

天下り先で談合しています
口だけは齢を取らないので困る
ないほうが良い時もある血の絆
本当の美人は出ないコンテスト
ついて来るかいと言ってるのはおんな
飛車角を集めて勝てぬジャイアンツ

河内長野市 山岡 富美子

碑に風化はさせぬ八・一五
自立する老いへ甘えと距離を置く
弁解をしては傷口広げてる

平穩を嫌う若さの乱反射

解説者言うてることが大層

街に溶け暮らしに溶けた屋台の灯

富山市 島

ひかる

絵ローソクちりちり燃える仏の忌

忘却の彼方八月十五日

ぼつねんと立つ故郷の無人駅

自画像を吹き抜けてゆく風の私語

引くことも覚えやさしい風という

みずすましの様にゆかぬがまだ泳ぐ

西宮市 片山

忠

定年を手ぐすね引いて待つシユーズ

激安ツアー買って来るぞと勇ましく

やっかいな好奇心なら僕もある

敵にまでいい子でいたい習性

忘却の彼方に去りしキスの味

ガソリンに翻弄されている家計

鳥取市 加藤 茶人

道端で拾う四季の香四季の花

不幸にもセレブ秋刀魚の良さ知らず

回復をしたな葉をつい忘れ

もう一度資源見直す物価高

いつか来るマネーゲームの罪と罰

心よと言うが美人には勝てぬ

柏市 永峰 宣子

出来るだけ使いたくない総入歯
デング熱千葉にまで来る百年後
万歩計買つて増えてるウォーキング
家電品何故か一緒にダウンする
薄型のテレビお客のように来る

さいたま市 八田 敏

無理過ぎてドクターストップ菊作り
亡き戦友を語り更けゆく同期会
妻の忌を迎うあの日の暑さかな
五百年老樹目指してミニ盆栽
老いなりにグランドゴルフ闘志秘め

さいたま市 星野 育子

万緑のクライマックスベダル漕ぐ
夏が来ようと朝寝坊止まらない
あの笑顔近く選挙があるらしい
舵取りは政治家なのか官僚か
自給率よりも低いぞ総理の支持

東京都 岸野 あやめ

相続は放棄募参りも放棄
お決めの握手しました若かった
メタボにもまたそれなりのランク付け
ひと言も喋らず過ぎた九二日
バス停でメールの母とゲームの子

東京都 清原 悦子

夏草が揺れて涼しい風が吹く
背もたれがこんな心地良い疲れ
風邪引いて小さな音が耳に入る
読み返す手紙嬉しい雨続き
十指みな役割をもつ有り難さ

武蔵野市 亀井 円女

満一歳の曾孫立派にVサイン
昔聞いたよおとんにおかんええ言葉
ボサノバをベッドの中で雨にまぜ
米寿だが心はいつも二十歳代
ジェロなら聴こうあの哀愁はたまらない

横浜市 菊地 政勝

のんびり屋と見られメタボにある悩み
許さねば娘の婚期逃げてゆく
振舞った酒で言いたいこと言われ
マザコンのままで羽化にはほど遠い
嘘少し混せて祝辞を組み立てる

横浜市 小野 句多留

品格を問われる力士一人増え
理事長の影消えかかる相撲部屋
免許返上運転手付きにする
ゴッタ煮のアフリカ見せる展示場
吉兆の謝罪マニユアル泪付き

可児市 板山 まみ子

睡魔来て思考回路がつながらぬ

水溜りわざわざ入る通学路

省エネに努め野菜は生にする

考えて見ても解らぬ省略語

洗い物干すのも怖い紫外線

可児市 鶴留 百合

再検の通知またもとふさぎ込み

出張の夫忘れて潮干狩

花曇りなのにヒリヒリ痛む肌

リハビリを面白がつて見てる孫

右腕の負担を故障してわかり

静岡県 蘭田 猿沓

地下足袋と軍手で老いを寄せつけず

野も山も緑胸にもみどり羽根

字が書けて初めて背伸びするポスト

時々私を癒す無駄遣い

満点の日だね妻にも歌が出る

犬山市 吉田 幸子

あみだくじ線はお義理に引いておく

旨いもん制限されているメタボ

ヤセ地だがブライド誇る大豆の芽

イエス・ノー数字はつきり物を言う

ハンデイを乗り越えて得た太っ腹

尾張旭市 三浦 きぬ

額縁の黒いハガキが戦地から

私には戦後は来ないむなしさよ

青春を昭和に捧げ消える我れ

あの世では青春しよう楽しもう

世界遺産今に世界を埋め尽す

愛知県 早川 遯行

何にでも効く現金という薬

車止め越えて不幸はやってくる

雑踏のなかの携帯みな孤独

早う寝てほしい早う起きてほしい

火も水も狂うと人の手に負えぬ

京都市 坪井 孝一

すり切れた辞典はボクのアカサタナ

のど飴がボクの心を叩いてる

花言葉でこれだと決めて束で買う

アート展無理な顔して見てしまう

自由吟みんなの個性味を出す

京都市 榎本 宏子

いい顔の悪人がいるから困る

人間を料理するって楽しいな

一日も旅かもしれない陽は沈む

踊る字へ味があるねとほめられる

脱いだ服行列してる子供部屋

京都市 三宅満子

生きるとや明日もさらの朝が来る

平服での招待状に服を買う

さめざめと泣くような雨降り止まず

夏大根ピリツと効いて生きている

法事やのにハイ・チーズでもなかりうに

亀岡市 井上森生

吐き出しも悲しくはない鶴はやる気(岐阜の旅 2句)

鶴飼流メタボ防止の食餌法

白山道賑わうウオーク魅せる滝

源平の紅白競つて咲く小菊(デンベイコギク)

過去未来すべて素直に受けて見る

長岡京市 山田葉子

久しぶり変わらないねと言ひ交す

MRI脳の皺まで数え出す

不透明に政治決着図られる

川上に仙人峡があるらしい

小川からメダカの歌がきこえない

大阪市 鶴田遠野

鼻の差で人生にある浮き沈み

父の日に気怠るさ隠す母子家庭

薬飲み目安にとつている食事

血圧を上げるニュースがまた流れ

老いてまだ振つてる子への応援旗

大阪市 森田明子

外出着着せると母の背が伸びる

回転のスビード上げてきた地球

たしなみというには少し濃い化粧

流れには乗らぬメダカの心意気

ミスキャストそれなりに母演じ終え

大阪市 谷口義

夏の雲おばあさんにも声変り

体力を日割り計算して暮らす

行き当りばつたりのようにも見える

おさらいをする気まったくないこの世

置手紙今夜は月がきれいです

大阪市 井丸昌紀

間髪を入れずうなずく飲む誘ひ

無我の境地それでも飯は食っている

風船が割れて悪事が弾け出す

ゴミの日に浮世の垢をそつと出し

見詰めるとがんこに見える頑固の字

大阪市 岩崎公誠

産みたてのたまごぬくぬくめしの上

べい独楽もはたるも知らぬ都会の子

勝ち組の自慢はなしは聞き飽きた

よめはんの操る糸で踊る日々

脳味噌が干涸びるので水を飲む

大阪市 池上清治

朝食に秘伝のジュース一気飲み
毎朝のテレビ体操元氣くれ
声だけで幽霊作る講談師
四川地震断層地図を見直させ
寝る前に大事な事を思い出し

大阪市 榎本日の出

タイガース勝ち進んでるのも不思議
お散歩中大きな月が顔を見せ
バリ島の夕陽が恐いほど真っ赤
新緑が待ってくれてる万歩計
許されて愛の深さがよく判り

大阪市 升成好

艶聞のそれから先をせかす酒
窓越しに見てならぬもの見てしまい
見栄を張る男の好きな腕まくり
のみ込んだ妥協の悔いが胃に溜り
図書館のベストセラーはいつも留守

大阪市 中村れんげ

老いの地図とどこどこに渦が巻く
立てば腰座ればひざでやはり齢
胸をさす言葉の陰にある慈愛
軽い言葉も時に刃物になる怖さ
感動の出来る限りは生さられる

大阪市 熊代菜月

長生きの出来た私はおかめです
一人寝の夜の長さをもてあまし
古希すぎて八方美人の顔になり
連休を後期高齢もてあまし
梅雨寒に着たり脱いだり更衣

大阪市 中井萌

澄んだ水今の自分が見え過ぎる
ダンディズム紫煙も肩身せまくなり
光り物似合わぬ指をいとおしむ
何かある今日の母さん丁寧語
薬味だけ変えて今夜も冷や奴

大阪市 榎本舞夢

帰るまで食事待ってるお父さん
遅いなあ入口出たり入ったり
雲一つない大空に深呼吸
雲行きが怪しくなつて先に寝る
雲つかむような気持で狙ってる

大阪市 伏見雅明

おれのシャツせめて干場で胸を張り
晩学の意欲ささえる好奇心
スーパで買うスーパのマイバッグ
サングラス欲に眩んだ目を隠し
社の秘密コピー機だけが知っている

大阪市 古今堂 蕉子

オンオフの切替え早い夫と居る

胡蝶蘭枯れた頃から店が閑

朝五時にコトンと朝刊が入る

僕の趣味妻の目には好き勝手

完璧な妻に捨てられそうな僕

大阪市 西川 更紗

許されぬ恋と知りつつ無我夢中

二の腕がちりめん皺で老いを知る

電車降りいつもの位置にエレベータ

いい汗をかいて一日締め括り

悔しいが嫁の笑顔に負けている

大阪市 松尾 柳右子

お出掛けの時間がかかる服選び

友の家訪問すませホツとする

公園にゲートボールの声さかん

ストレスの解消餅を焼いている

あの丘の向こう知りたく道急ぐ

大阪市 津村 志華子

悩みごと一つを抱いて雨期に入る

八月の空悲しくて重たくて

六帖の城で気ままな二十四時

サラサラと茶漬で済ますひとり膳

終章に片付け物がたとある

大阪市 平嶋 美智子

短く成った4Bにキスしてあげる

書いて消すノートの汚れ気にかかる

熟睡の出来た心身走り出す

踏まれても漫画に夢中通勤車

ぎっくり腰テレビを友に寝てすごす

大阪市 小谷 集一

スイッチはオンときめきを待っている

雑巾で役目が終るバスタオル

最高のマナー笑顔が美しい

苦吟しているのに妻がよく喋る

浮き沈みあつて明日が面白い

大阪市 津守 なぎさ

入道雲ビーチに活気溢れだす

ニガウリが毎日採れて満ち足りる

名シエフの味に近づくレシピメモ

速球にいとむ努力のホームラン

ウエーブが起こる外野の旗の下

大阪市 渡部 さと美

じいばあの似顔うれしいクレヨン画

眼鏡替えても白内障らしき字面

薬箱どれも元気で期限切れ

女性との話必ず洩れている

音風景いままも鐘撞く彦根城

大阪市 小糸 昭子

しゃあないな男は直ぐにすんまへん

吉兆の鮎尻尾まで食べてもた

人生を夢中で生きた短かいな

おしゃべりをしながら大工口から釘

一輪が咲いたお前を信じよう

大阪市 小泉 ひさ乃

脇役が控え目に咲く美しさ

小言聞く前にさっさと寝てしま

点滴と雨だれリズム合っている

耳栓も一向効果ないいびき

なつかしいページにもほろ苦い個所

大阪市 福岡 末吉

いやしくも明日を期待し顔を立て

見られてる背は小さく丸くなり

人類のエゴに地球の嘆き節

身の丈に合わぬ願望山と積む

食べ残し我が家自慢のごちゃ混ぜ煮

大阪市 岩崎 玲子

見学のあれもこれもとてんこ盛り

歩いても食べてる時も喋りづめ

熟女たち家庭忘れる旅の顔

景色よりみやげみやげと賑やか

元気でと再会誓いまた喋る

大阪市 川原 章久

闇の中エンジン全開猫の恋

高齢者時代の波にもまれてる

手をつなぐ事にも馴れた認知妻

薬抜け抗癌剤は何時になる

馬鹿になれ馬鹿になったらモメはせぬ

大阪市 岡本 久峰

幸運にも生きて感謝の作業服

一枚の辞令で死地に飛ばされる

ホトトギス鳴く古里をなつかしむ

足踏みは千回散歩一万歩

百歳現役口で言うほど易くない

大阪市 奥村 五月

妻の言う悪友俺は離されぬ

内証です炊事洗濯ボクの役

苦しんだ昨日忘れる陽が昇る

接待も終り屋台で旨い酒

苦勞して息をつづけて生きている

大阪市 近藤 正

仲人が別れ話にやってきた

しくじったしぐさお客に受けている

衛星がきぼうののれん掛けている

百日紅背に凜と立つ彬の碑

壊滅の危機をはらんだ青い星

大阪市 川 端 一 歩

和泉市 横 山 捷 也

心では謝して言葉に出ぬごめん

暑さには負けない恋をしてやろう

炎天の碑を前にして誓うこと

充電の酒に溺れて胃の検査

古希近い妻の乳房は豊かなり

大阪市 大 川 桃 花

どしゃ降りへ何だか全部許せそう

疑問のままお金払って走る道

男の子泣かせて帰る孫娘

きっかけはただお早うと言っただけ

言い付けを守って見舞誰も来ず

池田市 栗 田 久 子

爆笑を誘う失敗してしまう

いじわるをされた好かれているらしい

つぶやきがやがて本音となる怒り

不便さも快感にしてエコライフ

反戦歌つい口をつく原爆忌

和泉市 西 岡 洛 醉

年金の暮らしに今日も四季巡る

四帖半其処が俺様指定席

ライバルを一人作って妻の乱

野の花で机上飾ってマイペース

傘寿坂孫の便りが嬉しくて

まだ若いつもりで少し跳ねすぎた

切り札を持っていそうな妻の笑み

同じ趣味持たない事にする老後

冗談で好きだと書いてみたくなる

下座から正論万座に釘をさす

泉佐野市 山 本 蛙 城

通り魔の世に日々の無事ありがとう

裏に句の名刺いただきありがとう

オレオレに無縁で今日もありがとう

初対面川柳ネタで打解ける

セールスも大阪弁のやわらかさ

茨木市 藤 井 正 雄

草に寝てでかい地球の私語を聞く

軽快に家事はかどらせ午後映画

世話になる嫁には低い腰の祖父

いい出会い同じ訛りの屋台酒

紅一点はずし割り勘集められ

大阪狭山市 矢 野 梓

いいニュース見たくてテレビ拭いてみる

小刻みの晴れ間小さな旅に出る

瀬戸の橋渡れば温い里の風

好きな服また眠らせる衣替え

あれもしよこれもしようと誕生日

交野市 山川 日出子

母の日に母のお琴を孫が弾く
草取りの父の軍手が納屋にあり
石臼が母の亡き後庭の石
大輪の花にも見える行司さん
注射器の使い回しは不気味だな

交野市 森 本 弘 風

山の宿山菜料理のおもてなし
吊り橋で妻の悲鳴はお父ちゃん
おだてられいそいそ妻のお手伝い
分かっている感謝はしてるお前には
梅雨半ばゆっくり休む万歩計

河内長野市 坂 上 淳 司

日本の夏風鈴に金魚鉢
諍いを黙って見てる金魚鉢
金魚など鼻にもかけぬセレブ猫
女房も金魚すくい得手に入れた
水草の蔭で恋している金魚

河内長野市 水 谷 正 子

宮城の広場に座り泣いた夏
語りつく戦争語る人も老い
薔薇園で真赤なりりーマルレーン
青い薔薇名はナボレオンなるほどね
紫陽花を誉める若者ほとする

河内長野市 植 村 喜 代

五月晴れ坂を登れば汗も出る
鷺に背中押されて軽くなる
生きるのにこんな苦勞もあったとは
明治の親余程のことでも子は捨てぬ
決めたことに迷いを持って狂い出す

河内長野市 村 上 直 樹

リベンジの意地なみなみとご返盃
札束を積んで閻魔の手を握る
七人の敵と車座回顧談
冷戦のドアこじ開けた孫の声
シャクの種どんどん育つ物価高

河内長野市 井 上 喜 醉

真夜中も優しいリズム古時計
少ない毛いじり床屋は腕を見せ
鉄人が人生かける甲子園
ガラクタが鑑定団で甦る
生きるため診察券は宝物

岸和田市 原 さよ子

約束のあした今日から気が弾む
久し振り矢張り無口で物足らず
春風に下着のおしゃれ覗かれる
録音にわが口ぐせのあからさま
教養の程度クイズに見破られ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

戦ゼロ九条渾身の祈り

許しなさい僕の度量が問われてる

自給率ギョウザ教えてくれている

二大党改憲だけは変わらない

ごめんねとあつさり言うて身構える

岸和田市 井 伊 東 吉

長雨に下着買い足す独り者

部屋一つ干し物吊し占拠する

雑草と闘う日々が始まった

新じゃがと新玉葱の匂貰う

人の血が通わぬ施策みな頓挫

岸和田市 森 元 ふみよ

天災は忘れなくてもすぐそこに

たくさんさんの痛みを耐える庶民です

有難とうひとことあつて心晴れ

繰り言を静かに聞ける歳となり

納豆と豆腐で我が家支えてる

岸和田市 雪 本 珠 子

真実と夢の狭間で揺れている

食器棚ベアのカップが淋しそう

ファイト湧く魔法の言葉ありがとう

カフェテラス行き交う人をウォッチング

悲しみを笑顔に変えて生きている

岸和田市 土 橋 房 枝

新しい柳友出来た嬉しい日

あちこちへメモして置いた句を探す

長寿国誇れぬようになった国

明日は我が身かも知れないと奉仕する

メールならありがとごめん言う夫

岸和田市 堤 植 代

転んだら顔が気になるまだ女

年金の元をとるまで生きますよ

亡き母の歳まで私がんばるわ

携帯を持たされました八十路

ねじ少しゆるんで来たか蹴つまずき

堺市 村 上 玄 也

お茶濁す対処は長けている官吏

酔うほどにやたら握手をする御仁

探し物今日もしてはるお父さん

肩叩きされそう僕の免許証

生真面目の仮面剥がした無礼講

堺市 河 内 月 子

梅雨最中雨が止んだら草を抜く

二つ三つすること溜まりやる気出す

フラガール誕生弟子が出来ました

孫の守りしながら声も憶えさす

車中ではきよろきよる眠つてもおれず

堺市山本半銭

部屋の間違った長靴雨を待つ
止むことを忘れたように長い雨
雨予報二十パーなら無視をする
梅雨明けに花火大会待っている
水茄子を送る今年も無事に夏

堺市志田千代

老人の健康自慢聞き流す
殿方の群れも結構姦しい
お天気の話だけで済ます人
早よ去のう煙たがられているようだ
婆ちゃんがスポーツ新聞買っている

堺市西村りつえ

土日の疲れが出ます月曜日
介護保険世話になるより損でよい
昔舶来今国産がもっている
小心もほら吹き出したビヤホール
秒競いやがて消される新記録

堺市奥時雄

得意先作り笑いでドア開ける
悔しいと言ってコップをドンと置く
守護神が打たれてみんな黙りこむ
カリスマの弱点妻は知り尽くし
新妻の珍奇な料理食べつくす

堺市矢倉五月

休肝日井物ですむ夕餉
案じてるから怒鳴りたくなるのです
握力も体力も今妻に負け
冷蔵庫整理が進む物価高
雑草と追いかけてこの梅雨期間

堺市宮本かりん

口下手な夫庇って口ごもる
指切りをしたのに二人共忘れ
明るい声に淀んだ空気ほぐれだす
かまきりが僕に挑んでくる構え
人生の幕間で吐息する二人

堺市源田八千代

呼名から宝エンヌとなる雅号
主役の座奪うピンクの霞草
声掛けて助け合える隣組
これがもう最後となるか握手する
資源なき日本列島火の車

堺市石堂潤子

運氣などどうあれ神の鈴を振る
あつどももぶつつけられたのは私
赤い糸結んでからの運不運
揉めるほど有れば揉めるだろう遺産
声大き友と茶房に落ち付けず

堺市 齋藤 さくら

小さいけどわが家のビワを誉めてくれ
お婆ちゃんと呼ばれこだわりなくはーい
初孫にへそくりしてたお父さん
知り合いは友達でない言い切った
ラッシュ時は肩の間に顔を出し

四條畷市 吉岡 修

干上つてみれば不気味な池の底
八つ目の癖はよくよく惚れること
お荷物は君だと言われないように
アンテナを張つてりゃなんかひつかかる
子の肩に賭けるほかない親の夢

吹田市 須磨活恵

窓開けて待つ極楽の余り風
米を研ぐ手触りが好き音が好き
お出かけは白のブラウス桐の花
翔んでいるようでも所詮主婦の幅
遠い日の思想が疼く掌よ

吹田市 大谷 篤子

がんこ者気取つて石に蹴躓き
少年の孤独へさつと腕を貸す
尽くすだけ尽くしあちこち傷だらけ
食べて寝て笑つて胸は澄んでいる
空気澄み少し寒い日元気です

吹田市 木下 敏子

結婚の知らせいい風吹いてくる
受話器から時間泥棒やつてくる
声だけは元気電話に花が咲く
アンケート齡控えめに書いておく
からっぽになるまで言うている女

吹田市 野下之男

以前ほど嬉しくないが年金日
米寿でも美人の横が良いらしい
焦らせては泣かせ上手な金メダル
緊張の糸が切れたぞホームラン
噴水のコイン涼しい眠りです

吹田市 瀬戸 まさよ

母の日を祝う子どもも高齢者
昭和なら八十三年同い年
支持率は二割内閣のうのうと
当然のことの品格大流行り
居酒屋で補つてます焼き魚

吹田市 太田 昭

明日生きる米一合を研いでおく
暇だから万歳三唱でもするか
今日の仲間明日はたぶん敵だろう
補聴器が今日も芸能記者になり
紫陽花を手折ってくれる垣根ごし

高石市 浅野 房子

ユニセフへ小銭寄付して旅終る

ああしんどああしんどいが出かけよう

約束にしばられるのはもう辛い

もういいわどうでも成れと思う日も

健康食品毒にも薬にもならず

高槻市 指宿 千枝子

柳友と無我で楽しむハーブ園

天道虫の好きなハーブの名を忘れ

誘惑に負けラズベリーつまみ食い

ローズマリー一枝そつと持ち帰る

目を閉じて身を任せてる快速車

高槻市 執行 稲子

ひ孫増え朝の会話の清々し

チエック柄素敵を連れて春の風

身を躲す事がうまくて難逃れ

お掃除ロボ天井裏が解るかな

歯車が狂ったような物価高

高槻市 峯村 勲弘

幼い日覚えた歌は忘れない

四畳半液晶テレビ広くする

濃い味を血圧計に咎められ

病得て本気で拝む医師の背な

老いの坂転げんように気をつけや

高槻市 生田 義一

老いてなお夢追っかける戦中派

八十路坂転ばぬ先の句読点

大比叡眺め傘寿のクラス会

府知事さん聞きしに優るやんちゃくれ

国技だよ注意だけでは生温い

高槻市 井上 照子

堪忍の緒を切れるなとする同居

後期高齢者聞こえの悪い呼ばれ方

同窓会年毎減つて病む話

あの人に逢える願いの回り道

天変地異人類のエゴ神怒る

高槻市 佐甲 昭二

目を交すだけで納得する仲間

結着をつける盃寄つて来る

友の計をまず聞かされるクラス会

追伸の小さな文字に胸騒ぎ

評論家の喋り責任問われない

高槻市 左右田 泰雄

朝寝ぼう出かけるまでが騒がしい

うまいこと本音引き出す聞き上手

相の手が入ると弾む祭り笛

店先に季節の消えた生野菜

ぶっかきを入れると汗をかくコップ

高槻市 西谷 治三郎

犬連れて散歩しないと怪しまれ

国のためよく働いた丸い背な

今日もまた使い回しの食事する

年金の全部を天引きする家内

全員がメタボの検査お相撲さん

高槻市 傍島 克治

よそ行きの顔を續けて疲れてる

来年こそ忘れないでよ父の日を

この程度なら叱られまいとする悪さ

すっぱんが人目欺くいい手です

平服に戻り大阪弁丸出し

高槻市 富田 美義

躓きが加齢の脚につきまとう

天敵が神経なでる歯の痛み

助手席もサングラスかけ指示をする

隠れ家のバーで葬儀の打ち合わせ

ご近所の寿司屋に決まるクラス会

高槻市 乙倉 武史

天地変手抜き工事の罪深き

オリンピック記録一役買う水着

勝ち馬に乗って天狗のタイガース

パチンコも不況かチャシ減っている

長生きが逆縁に遇うふしあわせ

高槻市 杉本 義昭

塗ってない貴女の素顔にほれました

野の地蔵人の温みのよだれ掛け

沢庵を噛む幸せや朝の膳

よく噛んで亡母のことばが懐かしい

欲捨てた私を明日が待っている

豊中市 吉田 あずき

エコロジーケチな心が役に立つ

人間の知恵人間が首締める

ライバルは昇進自分は宝くじ

新しい空気を吸いにバスに乗る

卵割り黄味の丸さに癒される

豊中市 安藤 寿美子

描いた下絵は皆に無視される

私よりみんな賢く生きている

また何を考えてるのやら無口

ばけられぬ年金権利書預金帳

わかつてるのに書けない字ばかりなり

豊中市 水野 黒兎

虹になお夢見てやがて古希となる

町内のどぶ掃除には溝奉行

ヒト以外地球を壊す者は無い

砂時計過去と未来を入れ替える

奥方は箒に乗れぬけれど魔女

豊中市 檜谷郁子

渡り鳥何の因果か毒運ぶ

四川地震他人事でない身ぶるいだ

ガソリン代攻めて来ました頼む脚

早やともう忌はめぐる亡夫十三回忌

父の日もまだ咲きはこるカーネーション

豊中市 藤井則彦

配当で行く鈍行のフルムーン

聞いたことある幽霊の河内弁

丸刈りと裸足で育つ図太い子

優先席でいつも眠っている狸

鉄則はきちんと守る名選手

豊中市 山門タミ

梅雨が来た歓喜のアジサイ競い咲き

大阪の水になじんだ唐津ン魚

チリ籠ヘストライクは一度だけ

自然より何より怖い鬼畜人

捨てたはずまた住みついた欲の皮

豊中市 江見見清

とりあえず退院という仮免許

見舞客に病気の怖さ説く患者

重い荷は妻が持つてる退院日

ありがとうこれからまたありがとう

親子孫集い喜ぶことも減り

豊中市 坂上高栄

パンダ外交即答番で一億円

ピンボンの笑顔に嘘のない抱擁

胡錦濤笑顔のふんどし締め直す

国賓の無事を見送る五月雨

ないはずと思つて尽くす此の命

富田林市 大橋鐘造

無い袖を振る覚悟です初デート

乗り替えの出来ぬ地球で何騒ぐ

二の足を踏んでチャンスを取り逃す

一言の情けが生んだ血の絆

マジックのように出てくる試着室

富田林市 片岡智恵子

逆巻く波地が揺れアジア哀しかり

まだ元氣かと後期高齢証書くる

答まだ得られぬままに季は巡る

さみまろの毒舌当たるから愉快

携帯電話老いふたり持つ迷子札

富田林市 稲川恵勇

カラーゲン塗りたくつてるのはヒミツ

艶っぱいうなじに惚れたのが不覚

通夜の席故人を偲ぶ艶ばなし

ブライドを捨てると人が寄ってくる

どの顔もいい顔で来るクラス会

富田林市 中井アキ

あくびする顔も見せ合い夫婦です
恵まれた暮らしの中で心病む

しなやかに別れ女は明日へ向く

B面の無口に熱いものがある

熱帯びた過去がひよっこ顔を出す

寝屋川市 籠島恵子

出はいろは忍び足にはならぬよう

疑問符でメール打つてる淋しがり

大人向きの童話を語るネムの花

三日月に思い違いを告げておく

B面のネジがゆるんでばかりいる

寝屋川市 森茜

たしなみのワイン憂きこと語らせる

席あいて不意におばさん横すべり

合鴨はちよこちよこ田圃のお百姓

花びらをほどく静かな息づかい

夕焼にとけてしまった蟠り

寝屋川市 太田とし子

黄昏の命に響く音がない

寿の合わす両手が震えだし

少年のポケット大きいから恐い

自由な世に絆が切れぬもどかしさ

あの世など知らぬ坊さん丸儲け

寝屋川市 平松かすみ

立つだけでかしまし娘芸になり

後期高齢僕にラベルを張ってくれ

優遇もされずに後期高齢者

仕方なくピンピンコリだけ願い

知らぬ間に私もCO2を出している

寝屋川市 富山ルイ子

あの人なら大丈夫だと声をかけ

あの人とは断られそう声かけぬ

人それぞれ人を見る目の不確かさ

友からの優しさ返礼胸に秘め

定年に嘱託派遣どうしよう

羽曳野市 吉川寿美

あじさいの濃むらさきよ智子の忌

時の記念日なんと律儀な言葉だろ

まだ回る気であるこまの芯の闇

鈍刀にならぬ位置づけどうあると

生きているうちにとすることがある

羽曳野市 徳山みつこ

金づちの私も泳げそう宇宙

実山椒青い気炎を吐いている

おそろしやエンゲル係数だけ伸びる

歩行者天国は防護服で行く

地球にも欲しいきぼうの大のれん

羽曳野市 三好專平

リサイクルばれて吉兆倒産し
善意にも訴訟の弾が飛んでくる
聖地まで火薬庫となるパレスチナ
天国が地獄になった秋葉原
ノンバンク三十兆を弄び

羽曳野市 安芸田 泰子

あじさいは空の青から始まれり
他愛ない話で埋める待ち時間
繰り返す夫婦の話題摺り切れる
バラの棘男を刺して若返る
言い訳が通り自責が深くなる

羽曳野市 永田 章司

欲の皮年期重ねて丈夫です
こけるなよ背中で跳ねるランドセル
痛ましい現場にもある運不運
老妓だが踊る手付きで艶をだし
もったいないいい言葉だが利用され

羽曳野市 酒井 一 壺

楽しみがたくさんあった無駄な道
満点の妻で心が休まらぬ
たくさんさんの式を済ましてあと一つ
たつぷりと食べて喋って友帰る
時間だけたつぷりあつて金がない

羽曳野市 吉村 久仁雄

父の愛母の背中に育てられ
嘘をつく力が萎えて好々爺
真つ直ぐに生きてる人と目が合わず
友という財産だけは譲らない
懺悔してすつきり虹を呼ぶ豪雨

東大阪市 笠井 欣子

全自動私肥えさす甘やかす
失敗もいいワいいワで日が暮れる
増えるのは年と引かれる保険料
可愛らしい曾祖母さんになる積り
老いて知るこんな自由もあつたのか

東大阪市 安永 春

浪花にも橋下竜馬風起す
ユーラシアを縦断したい竹トンボ
七色の風に吹かれてランデブー
うぬぼれてみても上には上が居る
鏡よ鏡なんてうぬぼれすぎた魔女

東大阪市 北村 賢子

お国のために尽くした名前兄も居る
かたくなに悔しいだけで捺さぬ印
父母や姉泣かせた悔いが一つある
たのもしく縋った腕も共に老い
抱きしめたら折れそうなのがいいなんて

東大阪市 久米 奈良子

貼るカイロ貼らないカイロ選ぶ春
4Lを着てますわたし肥えてます
封緘に日本の文化残すメ

片付けの限度を咳に教えられ
ホイホイとお世辞にのった筆の跡

東大阪市 米田 水昇

使いまわしもつたないが命取り
高齢者の財布だんだん軽くなる

脳活性めざして通う歌の塾
タクシーでセレブ気分の医者通い

孫が押す小さい車に乗る至福

東大阪市 佐々木 満作

一石を投じた波紋国動く

ざんげして老舗の暖簾幕閉じる

改革に必死で挑む大阪府

中国の大地揺るがすテロリスト

催眠が掛かったままでほっとかれ

枚方市 丹後屋 肇

手の甲に走り書きしてナース聞く

エベレスト老人力にシャッポ脱ぐ

新生児乳首求める慌て振り

梅雨前線手招きをするアジサイ寺

あじさいの雫が垂れる石畳

枚方市 伊達 郁夫

消しゴムで消せないものが多すぎる

料理名などは知らない母の味

自分だけ知ってる記念バラを買う

花時計何組ほどの恋ドラマ

疑えば風の音まで気にかかる

枚方市 二宮 山久

緑なす桜並木のペアルック

釣り糸をたれて釣人何思う

梅雨晴れ間布団たたきをする団地

体調がこんなに良いと万歩計

ガク紫陽花色あざやかな梅雨晴れ間

枚方市 寺川 弘一

歌わないのにカラオケについて行く

孫が来て休みの日には休めない

反応が無いのに神にまた祈る

月給だけで妻の人生買い占めた

マンションにいろんな愛が住んで居る

枚方市 海老池 洋

突然にわたしも後期高齢者

茄子の艶に磨きをかける紫外線

爽やかな口調できついことを言う

ひと言が刺さって食が通らない

同じ人生くよくよするものほほんも

枚方市 安達 忠 央

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

乳房から芽生えはじめている娘

経あげて心のゆとり追いかける

恋人の気持晴れたり曇ったり

皿洗いシエフへの道と弛み無し

さらり嘘言うていつものしたり顔

枚方市 森 本 節 子

几帳面な亡夫に感謝年金記録

琵琶湖畔水を湛えた美術館(佐川美術館)

ひ孫からおばあちゃんとは我が娘

送り出し着メロあってはつとする

六月の庭の主役はがく紫陽花

藤井寺市 高 田 美代子

不協和音の中で耳鳴りが続く

フライパンの底に焦げつくジェラシーよ

人の世や負けるが勝ちもあるらしい

いいなりにならぬ女と見る花火

強情なわたしに効かぬ痛み止め

藤井寺市 太 田 扶美代

花束に所詮不向きな花である

励ましてくれた特上のステーキ

労ってくれる無骨なマグカップ

和解とは先にはえむ事だろう

多忙とは結構楽しいものである

手のひらに仏のような沙羅の花

雨の紫陽花あなただけの便り待っている

信号を走り抜けよう梅雨の入り

コンビニでハガキを買った午後十時

一番弱いところを妻は知っている

藤井寺市 鈴 木 いさお

黙祷で始まる古希のクラス会

ゴキブリを涼しい顔でつぶす妻

腹が立つ内はまだまだ大丈夫

年寄りの割によく食べよく眠る

前頭葉も右脳左脳も黄昏れる

藤井寺市 若 松 雅 枝

境遇が似て仲良しの夏帽子

夕立が来そうで止めた立ち話

水蓮に誘われ池を一巡り

母の形見仕立て直せばニューモード

白寿まで生きる心算で浴衣縫う

箕面市 広 島 巴 子

飛魚をコーチに励むバタフライ

水平線立てば天国のぞけそう

絵日記の泡ふくカニとにらめっこ

年齢にブレーキかけてフラメンコ

誕生日なぜかお墓の勧誘が

守口市 井上桂作

八尾市 村上ミツ子

気がつけば後退できぬ齡なり

自信過剰己を知らぬ愚か者

平凡という贅沢をお大事に

一言が多くて会話寒くなり

自己嫌惡欲の出しすぎ仇になり

八尾市 宮崎シマ子

うっかりとしている間にも母は老い

泳ぎきりついたら後期高齢者

相手は病人よくして上げて当り前

梅雨最中田圃の景色精氣満ち

うっかりと口がすべった金が出る

八尾市 高杉千歩

男は人が大人しい老人会

後期から長寿生きるのも氣兼ね

お世辞だと解つていても声弾む

紫陽花の吐息が洩れる梅雨最中

することが一杯あつて不眠症

八尾市 吉村一風

人のぬく味暑い夏でもいいもんだ

予備はないのち大事に朝を出す

急ぐ時こそもう一度確かめる

あなたなら出来るおだてに直ぐに乗る

忘れたい過去ほどこびりついてくる

大阪維新出血は止まるのか

転院へ姑の病室遠くなる

にこにこと生きていきたい命がけ

神はいつでもかなしみと共に来る

食卓をかざるペランダ産レタス

八尾市 生嶋ますみ

主婦だつて炊事をしたくない時も

自転車のマナーの悪さどきつとす

喧嘩する相棒いないけど元氣

梅ラッキョ漬けるのはもう止めにした

悪友が揃う喫茶の指定席

大阪府 林力子

肩叩きした孫と飲む旨いお茶

終章は春の日差しを望んでる

収穫が終れば村に祭り笛

晩酌もギャグを肴に大家族

バーゲンでパツタリ会つた憎い奴

大阪府 桑田ゆきの

飢餓の国話し飯粒拾わせる

梅雨湿り心に鬱が伸し掛かる

一と粒の真珠で虚榮膨れさす

喪の家をちよいと覗いて黒揚羽

新水着記録ラッシュの波立たす

大阪府 澤田和重

お札などすると言ううから当てにされ

バネつきの人間になる阿波踊り

盛装をすると笑いもおちよぽ口

鈍行でいいから運を連れて来て

知られたら困るへソクリ底をつく

大阪府 米澤俣子

卯の花の白さが初夏を連れて来る

信号のなかった頃の青い空

勞られ急に淋しくなってきた

ど忘れに誰でも会釈しておこう

言い返す言葉が急に浮かばない

大阪府 粗山隆盛

ポリポリと囁んだあの音戻らない

お宝と思ひ合ってる共白髪

国宝の語りに人形よよと泣く

生きてゆくいのちの水を濁してる

オカリナの響き大地の鼓動打つ

神戸市 山口光久

いざと言う時はやつぱり両隣

胸底に気ままにさせぬ鬼がいる

突っ走っているから今は幸せさ

感情に走って墓穴掘る破目に

残り時間悔いを残さぬ処方箋

神戸市 山口美穂

鏡の中にわたし私の中に亡母

約束はしたけど明日が分かりかね

旨い話は泥舟乗ってはなりません

のらりくらりで梅雨晴れ一日暮れてゆく

雨のせいにして対峙する今朝の鬱

神戸市 田中章子

前期高齢者になった誕生日

許せないひと言わたしまだ青い

相槌を打てないわたし変り者

収穫に蛇を恐れていられない

生かされているんだ日々を楽しまん

神戸市 伊勢田 毅

花植えて予報の雨を待つ夫婦

妻の愚痴振り切り雨の外に出る

立呑みの正論友にいなされる

妻にしかホラが吹けない無位無冠

古希過ぎて二兎追うメガネ買っている

神戸市 山田 婦美子

若い日の想い出束ねている輪ゴム

歳月の重みに耐えている背骨

脱皮してだんだん丸くなる頭

人事と思えぬニュースまた増える

女の香持つて女孫が傍に来る

神戸市 河川無限

悪口を言われないよう握手する

真心を捨てると何も残らない

友達になってはくれぬ青い鳥

焦るのはやめよう敵がでかくなる

風紋にすっかり残す風の私語

相生市 中塚礎石

法事の座みんな序列をわきまえる

生真面目に背を丸くして生きて来た

白寿まで生きると決めている八十路

年輪を見れば数えてみたくなり

ほけに効く薬がほしい忘れ物

芦屋市 黒田能子

円満に生きてきたのか笑い皺

信じてる先頭さんについていく

カタ仮名の名前に変えて運が向く

完走が目標だから急がない

ルンルンの気分髪型変えてから

尼崎市 春城 武庫坊

執念で蹴ったボールはゴール向く

折り鶴は吊ると幸ある未来見え

びっしょりと汗かき男の顔になる

妻唄う歌に昭和が甦る

星のない都会の夜空夢見えす

尼崎市 春城年代

いくしま句会さらば愛しい二十余年（尼崎いくしま句会閉会す）

たいせつな思い出今はむなしくて

訣れ来て彷彿とあり良き仲間

追憶は恩師友どちみちづれに

現実にかえる時計を振り返えり

尼崎市 長浜美籠

枇杷リング熟れて無慈悲に時はすぎ

コンクリートジャングルに草根をおろす

帳尻がピツタリ合つてよく眠る

まだ明日があるわと水を一気飲み

売物件めだつ地方もドーナツ化

尼崎市 山田耕治

また遅刻すみませーんですまされる

同じこと聞いたか妻が返事せず

幽霊と住み果たせるか時効まで

お朔日から歯刷牙子新にする

有難や夕刊まだか飯まだか

尼崎市 軸丸勝巳

品格に土俵の神が泣いている

ちやぶ台が消えて家訓が伝わらぬ

千年紀光源氏に逢う講座

石山寺の窓に紫式部訪う

休耕田待っていましたおらが春

伊丹市 山崎 君子

宇宙にも日本の家が日の丸が
いとこ会逢えぬ淋しさ星一つ
星一つ今夜は何を語ろうか
梅雨晴れに目にしみてくる花の色
アルバムに若くなりたひひとり言

川西市 西内 朋月

居酒屋へ駆けこんでいる通り雨
一雨ごとくぐん伸びる庭の草
いらんこと喋って悔いがまた増える
未だ若いもりの歩幅溝に落ち
病院の消灯時間早すぎる

川西市 米原 雪子

誰だっけ会釈はしたが首ひねる
やんちゃ坊主次第に親が鍛えられ
独り居も梅雨の晴れ間は見逃がさず
晴舞台終えて裏方報われる
サボテンよ留守の間に咲かないで

三田市 北野 哲男

まだ喜寿と閑人でない歩きぶり
大器晩成もう七十をはるか越え
口封じ飲ませた酒がよく喋る
ダイエット形状記憶した体
ご先祖へ訳を知らないお経あげ

三田市 堀 正和

札束という麻酔には弱いボク
取替えのきかない部品から傷む
補聴器をつけて便利な耳となる
欠席の病名を聞く同期会
下戸なのに山頭火へと憧れる

三田市 久保田 千代

そよ風が胸をくすぐる恋心
シヨッキングなニュースに慣れていく恐さ
今日も無事越せて明日への水を飲む
丸く住む夫婦の保つ車間距離
見るよりは見せるダイヤの腕時計

三田市 白井 二英

トゲのない桜バラ科と知らなんだ
ポイ捨ては男がやると思ってた
誕生日きてもなんにも感じない
懸命に否定するからなお怪し
マゴノテがなくてもドアで用足りる

三田市 石原 歳子

矢印を頼り気ままなひとり旅
この歳でやっと二度目の母狩
どんどんと伸びる竹の子羨まし
定刻に仕事の終るよい会社
補聴器のままで大きな軒かき

三田市 上垣 キヨミ

法よりも涙を武器に遺産分け
繋がつた血が何事も味方する
父母の苦勞の上に生きている
正直な鏡でキツネになり切れず
義理欠いて薄い中身のし袋

西宮市 西口 いわゑ

いいことがあつたらしくて美しい
コーヒーと雨の話を聞いている
楽しく生きる約束のない命
自転車少女を包む青い風
見まわせば木に囲まれて生きています

西宮市 山本 義子

暑うても寒うても人愚痴るなり
負け組は昨今後期とも申す
八月の雲 古傷たんと持ったまま
同居人無いから出来るほっちっち
自画像はまだしなやかに生きるなり

西宮市 牧 渕 富喜子

篤姫が話題にのぼるクラス会
わたし流それで迷惑かけている
びいっと剥がすと六月になる朝
久々の豪雨に穢れ洗われる
暗くなるニュースが続く雨の音

西宮市 緒方 美津子

七十五日そうやすやすと消えぬ罪
若者の髭はやっぱり生臭い
兄ちゃんが兄ちゃんになる肝試し
蟹させる私のもとと無口です
虫に食われてウールやと知りました

西宮市 菊池 トミエ

一呼吸置いて治める腹の虫
有難く深呼吸して終る日々
損得を離れて息の合う仲間
今日こそは整理しようと思う日日
連休も旅番組で終るなり

西宮市 秋元 てる

木を植える卒寿記念と意気軒昂
ジグソーのピース一個の達成感
こだわらず気分任せで生きる快
転んだが骨折なしと高笑い
おめおめと生きているよで気が引ける

西宮市 井上 松煙

不安げに水道水を飲んで
ありのままの暮らしを明かすごみの朝
アルバムに髪の毛の少ないのは遺伝
末席で風向きよんでいる余裕
腰痛で土用も締めるコルセット

西宮市 亀岡 哲子

大丈夫まだまだ若いと鳴るピアス
ほどほどがまだ身につかぬまま後期
ポケットの小銭にピンチ救われる
女一匹終の住栖に梅植える
そつと踏む苔の下から地の香り

西脇市 七反田 順子

留守十日トラの行方が気にかかる
雨三日猫も欠伸で憂さ晴らし
ブーメラン恋の噂を乗せて行く
新婚さん旅の仲間を和ませる
縁帽子被る群なら日本人

姫路市 古川 奮水

気取らないメニユーいろいろ安い店
うまい店知っているから途中下車
丹田にたっぷり力溜めておく
生臭いものは坊主も旨いらし
口止め料好きなきんつば買うて行く

奈良市 天正 千梢

泣き声を聞きわけられてこそその母
裏方の目で語るから受けられる
つぶやきを五七五にまとめ上げ
口出しをしたら結局金がいり
自問自答で甘い点つけている

奈良市 米田 恭昌

的を射た毒舌胸に突きささる
故人しか知らぬおひとのご焼香
天女さみし老いて羽衣脱ぐと言う
藤川につなぎすたこら逃げる虎
選挙まだかと床を這い出た要介護

生駒市 飛永 ふりこ

夢の中むちゃ好きやねんやつと言え
やんわりと自信の程が顔に出る
バラソルがくるくる恋も空回り
花しょうぶしやきつとさせる品があり
オムレツにかんしゃく玉を掻き混ぜる

香芝市 大内 朝子

物差しの違う談義がすぐしほむ
御洒落して出かけるとこのある弾み
くだおれ太郎健気に笑ってる
お蔭さま器用貧乏ボケ知らず
ケチケチはやめる余命を知る財布

橿原市 居谷 真理子

逢いに行く小さな蛇に身を変えて
美しく生まれ芝居のように生き
君の瞳にジェームス・ディーンひとかけら
下積みの父厳めしい名前持つ
実力はあるが気儘という病

檀原市 安土理恵

音のない世界に手話のよく弾む
褒められてアゴの辺りがこそばゆい
のだから手見えないように聞く話
肝心なところとばした斜め読み
縊り直す骨と骨とをつなぐ糸

大和郡山市 坊農柳弘

逆らえぬ位置で腕組みしたまんま
少しずつ自我を削って生き延びる
ひまわりのポリシータ焼けを掬う
温暖化洞爺湖サミットどないする
靖国の踏み絵に残る終戦日

奈良県 渡辺富子

蛭舞う宿で逢おうというメール
銀河へと向かう列車を待つふたり
無差別の殺人続く寒い夏
国を支えた後期高齢ゴミにする
愛情を注いだ息子行ったきり

和歌山市 木本朱夏

紫陽花に似ている君の浮気性
美しく食べてもらった魚の骨
パンの耳奪い合う日はきつと来る
風吹けばなびく程度の主義主張
心電図の谷間にひそむ不発弾

和歌山市 松原寿子

逆風へテネシーワルツ聴いて満つ
残り火を重ねてしまう夏銀河
宿命を受け止め耐える花言葉
風向きにときめきがあり蒼く炎え
鍵盤の上を想いが走り去る

和歌山市 玉置当代

食べて寝てこの腰痛を何とせん
腰痛を支えてくれている夫
夫には感謝しながら愚痴も出る
山谷も手を取り合ってきた絆
夫婦喧嘩猫ふらふらと行ったきり

和歌山市 喜田准一

感情をベースに理くつ組み立てる
ここだけの話にしてはしようもない
土壇場でぎらぎら欲を出して来る
言い訳もちよつぱり混ぜっているお詫び
眼は開けているが上手に寝ています

和歌山市 宮本三喜夫

バス燃えて気転でみんな無事でした
国政の混乱審議せぬ野党
役所では娯楽用品公金で
国民はおとなしそうで野次飛ばす
国政を放棄の議員直ぐ辞めて

和歌山市 堀畑靖子

和歌山市 古久保和子

第三のビールを飲んでいる事情
血圧のあがる話を聞かされる
この家も雨水ためている暮し
本物のリーダー欲しいなと市井
納税を果して胸にある不信

和歌山市 福本英子

ひらがなで付合い出来る友がいる
エコバッグ貰った義理で買いに行く
温暖化遠くに聞いている不覚
忘れない中に地震も事故も起き
満願に遠い遍路へ走り梅雨

和歌山市 松尾和香

泣く事も忘れて生きる心意気
優勝の瞬間見せた男泣き
食欲を満たすお膳に旬の味
そろそろと私の出番茶を入れる
初夏の風水田に蛙鳴く暮し

和歌山市 田中みね

反論をするには相手偉すぎる
腰痛の友を気遣う首の凝り
お人好しすぎると影が嘲笑う
先走り物言う口が疎ましい
あきらかに嘘と思える話きく

新しうが薄紅色に染めて初夏
切り売りの西瓜で夏を出迎える
試着室鏡の前のシンデレラ
居酒屋の隅で男が壊れてる
ベタベタと素足の夏を楽しまん

和歌山市 武本碧

プラチナ世代なんと響きの良い言葉
フジコ・ヘミングのピアノが歌う舞う
攻める気はないが少うし愚痴を言う
十中八九駄目でも亀の底力
一眠りしたら浮かんだ善後策

海南市 三宅保州

鉄びんが南部訛で沸いている
濡れ衣はすっきり乾くことがない
本日休診奥から笑い声がする
喫茶店で一杯やろう下戸の会
鯖読んできて享年にバレーている

海南市 堂上泰女

三猿を捨てて陽気な猿で生き
写メールで来る釣書の美女の艶
お喋りな雀が変えた風の向き
おしくらまんじゅうしても落ちぬ燕の子
鶯も成長したな初夏の風

鳥取市 夏目一粹

一度だけ啖呵を切つてみたいもの
傷つけていけないと思う浅ましき
上向きの運を罷かと躊躇する
振り出しに何度もどり思案する
身のほどを知ると無口になつてくる

鳥取市 有沢せつ子

孫十四五少し敬語を使いだす
十二歳買物の供しなくなり
ソックスもエプロンもする衣替え
穫れたての苺下さるいい仲間
こつそりといつも傘持つ雨女

鳥取市 奥谷彩子

美しく歳とりたくて本を積む
介護の話笑い混じえて聞く説法
サバイバルゲーム人生第二幕
森林浴俗世の疲れ置いて出る
ライバルと腹さぐり合うにがい酒

鳥取市 岸本孝子

共白髪これから先は儲けもの
身のほどを忘れて愚痴が多くなり
古稀の坂越えて人生味を増す
出し惜しみする歳でない知恵袋
今風に生きてる嫁に見習おう

鳥取市 岸本宏章

美しい町並み女も美しい
線ひとつ入れる人生あみだくじ
欲張りがあるから詐欺のネタ尽きぬ
胸に棲む鬼が主に指図する
裁判員当たらぬように神頼み

鳥取市 土橋睦子

まだ欲があるからじつとしておれぬ
雑学の花を咲かせる喫茶店
化けの皮はがす科白に慣れた妻
スタミナは鰯でとつたねばり腰
ポーナスに縁はなくても生きて来た

鳥取市 土橋はるお

棚田にも亀そっくりの石がある
そっくりの人を危める慌て者
ちよい悪が頭を下げて行つたよな
嫁さんも天気と読んでお洗濯
財布にも乾燥剤を入れたときな

鳥取市 植田一京

三歳の孫にはタジタジのばあや
行くところも無くてデパート二回り
時々華やかな夢見ておこう
ずばり言う君が隣に居てくれる
焦るまいそのうち出口見つかるさ

菊園でラジオ体操一二三

鳥取市 武田 帆 雀

雨天順延苗物にうれしい雨

解つては困る話を聞きたがる

名を覇して陶工の髭箔がつく

あれ以来恋しくなったギョウザ店

鳥取市 倉 益 一 瑤

ポストまで淡い想いを抱いてゆく

風上の噂に雑魚が右ひだり

都合の悪い話耳栓しておこう

悪口を言えば話がよく弾む

落ちそうなブライド銭の音を聞く

鳥取市 中宇地 秀 四

人畜無害枯れた体で侘びと寂

自分から人のためとは偽善の偽

姥捨ての政治子供も作れない

子が親を見ない政治を押しつける

近代人見ても聞いても知らんぶり

鳥取市 春 木 圭一郎

手始めに理想の人の真似をする

間違いを素直に認め長続き

失敗や悩みに度量でかくなる

一局に一手を学び強くなる

打ち込める何かを見つけ強くなる

破れ障子猫が覗き見して逃げる

ほんとうの戸主はこの頃妻である

散財のあとの財布は無口なり

二日ほど病んでグッバイ言うつもり

土壇場の逆転負けも運のうち

鳥取市 平 尾 菜 美

勇気いる素通り神の居ぬうちに

習慣の乱れ直そう風邪をひく

吐き出せば楽よ天から声がする

矢表に立つ白百合の希少価値

的にする大樹まぶたに焼きつける

鳥取市 田 村 邦 昭

やっぱりか神は努力を見逃がさず

仮面なら脱ぎたかつた最後の日

進まぬと夢が自分についてこぬ

古里の自慢はやはりいい空気

つんとした美人が今日は笑ってる

鳥取市 岩 崎 みさ江

かさぶたの剥がれぬままに一周忌

後悔を裏返しては反芻し

溜め息を吐いては補給する酸素

微笑みの仮面の下の泣き黒子

手造りの地蔵に夫の幼な顔

鳥取市 宮 脇 道 子

上昇で地球揺さ振る温暖化

老姉妹肩を並べて夕日見る

年ごとに細る年金我が命

戦中派あつさり命捨てさせた

鳥取砂丘美術の丘に夕陽映え

鳥取市 福 永 ひかり

国民の味方に見えていた仮面

どんぶりで計算しては無駄遣い

血税の使われかたに異議がある

少子化に産科小児科消えていく

食べるのがたった一つの欲になる

鳥取市 横 田 春 名

老醜の滲んだ赤い服通る

花つけた雑草残し庭を掃く

美しい河辺水害恐れ住む

墓前では迷惑かけた詫びばかり

食器へのこだわり薄れ独り住む

鳥取市 西 川 和 子

メタボが何さ食べたいから食べている

嫌われても本望いやな事も言う

齢かいな脳くたくたとして困る

封印をしても火種は消えきらぬ

愛情をかけた青い実反抗期

鳥取市 吉 田 弘 子

眠れぬ夜川柳塔詰わが友に

四川省聖火の騒ぎ消していた

雑魚なりのプライド持つて貧に生き

一割は痛みを知れと後期医療

阪神の貯金羨やむ投資ファンド

鳥取市 山 宮 愛 恵

試算する未来やつぱりピンクだな

スケジュール満杯にしてテイータイム

子曰く老人のパワーには負ける

よく笑う母方の血で癖がない

そうですかO型ですかわたくしも

鳥取市 太 田 幸 枝

くたくたにすれた野良着が捨てきれず

傘寿まですこやかに生き本望だ

青い実も今は立派な二児のパパ

地震予知蛙は早く逃げ出した

生きてきた節目節目の応援歌

鳥取市 永 原 昌 鼓

人間の英知が産んだ幸不幸

遠浅の海も時には吠えたぎる

喪の明けた女が辿る幸不幸

助っ人の出来が決め手のプロ野球

風邪あくび移し移され夫婦する

鳥取市 中村金祥

倉吉市 牧野芳光

一度だけ居酒屋タクシー乗ってみたい
大地揺れ神も仏もタジタジだ
墓の前に来たら身なりが気にかかる
そばにいる八方美人うとましい
粉塵を収める雨のやさしさよ

鳥取市 福田登美

下手なりに自我を溶かした絵の具皿
どん底にそれなりの夢ひそと抱く
変り映えせぬ人生を諦めず
シナリオを書き直しつつ行く余生
亡母の歳越えておんなじ顔になる

鳥取市 池原天馬

シートベルト陛下も後部たすぎがけ
サマータイム昔の悪夢よみがえる
煙草には購入手形必要だ

水もれで便座変えたらまどうこと
過疎の村けいたい塔どんと立つ

倉吉市 最上和枝

モンゴルに土俵取られて砂まみれ
家計簿の危険水位に手が届く
線香に火をつけ朝の経上げる
只今と言う人待って魚焼く
おもむろに封を開ければ請求書

心経と変わらぬ草取りの心
恥しいことをするから寺参り
堤防の端で草河豚釣っている
浅知恵のある人間は恐しい
階段を登る姿はぶざまなり

倉吉市 猪川由美子

頻繁に医者へ行くなと老母叱る
老総理なのに老人踏みにじる
使い回しへうかうか外で食せない
殺人がまるでゲームだ変流行り
敬老の日など名前ばかりのえせ物だ

倉吉市 山中康子

出来事をのんで夕陽がさりげない
手伝えぬ介護疲れを案じてる
看護師の機嫌うかがう重たい日
ねぎらいの言葉がほしい介護の身
死ぬまでに山ほど長所ほめたげる

倉吉市 松本よしえ

運の無い実は青いまま間引かれる
耕地整理まだ賦課金が追って来る
飛行場時差五時間を巻き戻す
陽炎の向こうに何か有りそうだ
お出掛けに少し濃い目のお茶点でる

倉吉市 山本 玲子

快方期わくわく朝の粥を待つ
手塩にかけたキャベツに悪い虫がつく
悪でさえ探せばきつといいところ
くたくたの破れジーパン恐れ入る
不況風口とがらせた秋刀魚買う

米子市 青戸 田鶴

日野川のめぐみ若鮎いだいて
梅漬けも終えてゆつくり友と逢う
梅雨空にフルートの音が溶けてゆく
後部座席でシートベルトの練習を
いつもそこで守ってくれる大山さん

米子市 野坂 なみ

歳時記が生む花便り美しい
手伝いのつもり嫁御の気に入らぬ
友達のつもり偉くて近寄れぬ
枯れてゆく花心づもりは凜として
心経を唱える声が好きな耳

米子市 白根 ふみ

大根が辛い初夏の味になる
花菖蒲濡れて生めき人を恋う
境港マグロが揚がり生きかえる
閑古鳥生簀の蟹も老いてゆく
茄子トマト植えて夕涼みの準備

米子市 門脇 晶子

ひとり見る月は他人と思われず
老いの身を誰に語ろう友探す
七十点は油断のならぬ数である
油断したわけではないが足の怪我
他人からもらったことば壺にため

米子市 光井 玲子

油断すればわたしは呆けになりそうだ
娘のピアノ部屋の飾りになっている
クラリネットに青春かけた子が一人
孫たちの選んだ道に口出せぬ
励ましてくれる友ありがとう

鳥取県 石谷 美恵子

薬屋根はいまも太郎を待っている
ふる里のところに触れてくる魚臭
チャンネルはどこも食べてる日本の絵
拉致を見た砂に問いたい娘の行方
草むしり草の恨みが腰にくる

鳥取県 佐伯 やえ

大山に夏山頂祭に花添える(大山山開き 2句)
たいまつ炎へ安全祈願する
部落史の大役果たし安堵する
脳の活性時たまピアノ弾いてみる
花と川柳生きるわたしの潤滑油

鳥取県 下田 茂登子

悠悠自適とてもこの世で果せない

競売の家に見知らぬ人が寄る

学歴はないが優しさ負けてない

京大を目指していると鼻にかけ

念仏を唱える口が悪も吐く

鳥取県 深田 俱久

誤字までがそっくり似てるお二人さん

行間を読めば真意が垣間見え

子の嫉先ず感謝から叩き込む

霞ヶ関泡飲み泡食い騒がしい

早苗田へ豊年の風吹き渡れ

鳥取県 細田 裕花

雨続く傘からはみ出てる弱者

迷い道雨はいつまで降り続く

長い雨筋書までも消えていく

屋根瓦静かに洗う絹の雨

一時の激しい雨に打たれてる

鳥取県 竹信 照彦

えんどう豆ワツと実って蔓たぐる

しゃがんだら草抜く姿勢そのまんま

芋苗を植える畑も鋤一本

害虫も新鮮野菜食べに寄る

防虫剤強いと人が食べられぬ

鳥取県 北村 稔

電気ガス止れば何も出来ません

出番待つ心臓おどる楽屋裏

田植すみ蛙の合唱こちよし

無人駅遊ぶ子いないさびしいね

病院の減塩料理なれません

鳥取県 山下 節子

援軍の中にいつでも母の顔

欠席に丸印付け心病む

やつぎ早やの質問攻めにタジタジだ

おもちゃ箱遊び疲れて空のまま

裏木戸は秘密の出入り口らしい

鳥取県 盛田 夢路

CTに五臓のすべて暴かれる

人事でないから医療気にかかる

正論を吐くと首筋凝ってくる

病床の白い窓から朝が来た

国政が屋台骨まで脅かす

鳥取県 松川 行男

指揮者なくても蛙の交響曲

ピアノ来るそれから不眠つづいてる

葬儀屋が葬儀の予約取りに来た

法話聞き嫁に伝える事ばかり

月末のざんげで悩み解消す

松江市 三島 松丘

振り向けば無駄でなかった回り道

安全と時間秤にかけてみる

五欲まだあつて人間止められぬ

人情にとつても脆い頑固爺

生かされて生きて楽しい古稀の日々

松江市 小川 注湖

道の駅地産の顔を売っている

廃校の歌響く里卒業式

電話持ち頭下げてる声に見え

表彰台汗と涙の笑顔見せ

新聞を隅々読んでまた嘆く

松江市 津川 紫晃

生きるには歩けあるけとカルテ言う

絵手紙が着いて季節の風が吹き

腹のすく時腹のすくありがたさ

落ち込んでばかりはおれぬ若葉風

につこりが堪忍袋ゆるませる

松江市 銭山 昌枝

コレステロール必要悪を手懐ける

夫より五年長生きすればいい

年金の半分ずつで繋ぐ愛

夫の傘を汽車に忘れてまだバレぬ

お茶はこぼすし食器は割るしこれが喜寿

松江市 松本 知恵子

空豆を食べると初夏の風が吹く

ねぎ坊主白く咲いても嫌われる

ダム下流地震の度に自覚する

読みなおす源氏の深さ千年紀

蛍見た記憶は今も点滅す

松江市 川本 畔

生ゴミを両手に急ぎ足になる

梅雨近しヤモリに追われ悲鳴あげ

紫陽花は群青色の笑い顔

青二才の菜莢は元気にぶら下がる

午後三時紅茶は二年前のもの

松江市 安食 友子

造花でもわたしの小部屋新ムード

週末はチビモンズンでたまらんワ

本心を知っているのは虚像です

嫁ごの情浅草寺札戴いた

しばまない幸せ捜す根無し草

出雲市 竹治 ちかし

今日は今日明日は明日という悟り

それなりの幸をなくしてから気付く

携帯を手にして生きているしぐさ

責任がないから軽い他人の口

里捨てた人にも温い夏祭り

出雲市 佐藤 治代

夕べ見た夢が気になり電話する
脱線を重ねて夫婦らしくなる
てこずった悪太郎にも嫁がくる
懐妊の子に期待する桃太郎
よぼよぼの太郎を今も愛してる

出雲市 吉岡 きみえ

しつとりと降るもまたよし傘の中
塩ぬきの梅を煮てます午後の刻
仮面脱ぎ親父の顔になる夕餉
オーイオーイ山の向こうで呼んでいる
はめられて白髪に自信つきました

出雲市 小白金 房子

古きもの使う器の温かさ
塗り替えたベンチしつとり露やどる
一生を感謝私の白い数珠
水槽の真鯛かなしい目が刺さる
母さんの粽手馴れた味を練る

出雲市 多久和 敬子

疲れてる私の脳に風を入れ
すれすれの所で妥協する二人
肩書きが消えてバランス崩れ出す
はらはらと散らねばならぬ花の私語
私を替える心の窓を開け

出雲市 石倉 美佐子

貴方の胸でひそと咲きたい白い花
唯一度人を愛した線香花火
こつこつと病める私にノックして
ああ何時か寄り添いながら夏祭り
刺を持つ花とは知れど鬼薊

出雲市 伊藤 玲子

いい法話でした眠たい眼がほめる
愚かさに気づかぬ金魚また回る
吾れに似て擬餌鉤のんだ魚放つ
池の月割った蛙よ詫びたかい
深呼吸溜ったものを入れ替える

出雲市 森 茂美

ふるさとは山彦帰る場所がある
山道をばちばち歩き従いてゆく
目が覚めてさっきの夢を食べている
海猫に最敬礼をするいのち
妻逝って待つ人もない戸を開ける

出雲市 富田 蘭水

法まげず紅葉のマーク生甲斐に
直線は私の性に合ってない
哲学の愛は凡夫に嫌われる
八十歳威張れぬ長寿社会なり
生きている限りお金がものを言う

出雲市 小豆澤 歌子

島根県 伊藤 寿美

寝ほすけの蛙が鉤に起こされる
太陽が沈む私の指の先

飛び込んで湖の深さを知る蛙
はらはらが私の胸を離れない
塗り替えて笑い声待つ滑り台

出雲市 岸 桂子

生き甲斐がずらり暦の行事メモ
散る花も咲く花もあり季は巡る
言い訳はしないでおこう負けになる
紫陽花と雲の狭間にいるわたし
雑草が命の限り暴れだす

出雲市 持田 多輝子

リストラにダブルパンチを食うデフレ
長らえて出雲神話の里に住む
砂金掘る石見銀山蟬しぐれ
くり返しトップが頭下げるミス
政界は笑顔で腹のさぐりあい

雲南市 毛利 幸

鯉のぼり腹に一杯風を食う
ほかほかの鍋物湯気が食誘う
はんやりとしていて割によく動く
せんべいを食べて幼時を想い出す
解散を迫る民主の空回り

再読の蟹工船と梅雨最中

心臓の回りに植えたさくらの木
強情も涙もろさも蛙の子
少子高齢歪になった円グラフ
架け替えた橋に昔の名を残す

倉敷市 撰 喜子

空腹の一時しのぎに酒をのむ
虫の息銭の話に耳びくり
放し飼いの牛乳の濃さ野の香り
積ん読の山崩れ落ちごみに出す
進学の三者懇談希望失せ

美作市 大石 あすなろ

てのひらに夢のひとつも乗せてみる
点景となるまで老母は手を振りぬ
スキップで軽い噂が飛んで来る
グループの中に雀が一羽いる
足止めてしばらく夕陽見送ろう

美作市 山本 玉恵

御好意に甘えてばかり忘れ傘
そこだけは開かずの部屋よ恋挽歌
生きて来た道へ遺した一行詩
あきらめの術を覚えた衣紋かけ
罪ひとつ仏に詫げる灯をとます

美作市 福原悦子

竹原市 時広一路

原風景亡母は手櫛と水鏡

結び目がやつと解けてるいい午後だ

車間距離おいて平和な夫婦です

年金の城だ味噌汁温かい

紫陽花の心変わりかも妥協癖

真庭市 福嶋智恵子

暁の新緑あびて歩がはずむ

葉桜の心地よい風ありがとう

おなじみの顔が出揃う土手の道

百薬と理屈を言うて呑むお酒

コップ酒オットットーと口尖がる

真庭市 国米きくゑ

いつの間に後期高齢とのカード

病院のソファ順番待ちあふれ

うつかりもちやつかりもして笑ってる

気を付けているつもりでもよく転ぶ

ありがとう素直に言える年齢になり

竹原市 岩本笑子

知ってもわかつていても影探す

通院へ時々バスを乗り換える

伸びてちぢんでそれは私の影だろう

誰を待つ灯りか温い彩をもつ

欲ですか生きたいのですか葉飲む

再会をした風鈴へ風そよぐ

仲良くはしたくないけど点滴よ

薬まで歳に比例をしてきます

休ませて貰えず国道灯の流れ

自転する地球に私立ってます

美祿市 安平次弘道

しがらみを抜けると女強くなり

赤面をするから仮面すぐにばれ

ダイエット草臥れましたとも言えず

反旗振っていたのは闇が深いから

風に乗って飛んで来たのは懺悔録

東かがわ市 川崎ひかり

薬師さま少しメタボでいらつしやる

忙しいふりで劣勢立て直す

堅い意志無ければ出来ぬダイエット

百万円出せば美人に早変わり

補聴器も拡大鏡もお友達

東かがわ市 清川玲子

仏さまにすがり新薬にもすがり

レシビには無いけど母の水加減

ケーキ皿前に反抗期も素直

宿代に眺めのよさも含まれて

どんな出逢いあるのか朝の靴磨く

東かがわ市 原 賢

凜と咲く花と生命の話する

山里の瓦崩れていく弧愁

自己主張出来ずにそっと吐く紫煙

老いてなとおときめく心持ちつづけ

仏壇を開けると亡母の顔がみえ

東かがわ市 伊 勢 八重子

湯煙に至福の首が浮いている

頂上の眺め三百六十度

術も無く仏の慈悲にすがりつく

夢がある人生幕がおきるまで

肝心な表面よりも裏の顔

松山市 高 橋 宏 臣

野火ゆらり男晒している余生

封筒にだいたいな影が入れてある

疲れたと言わぬ歪な走り方

行く先があるようでない散歩道

何時見ても何か足りない玩具箱

大洲市 中 居 善 信

口先の巧いカラスに騙された

過疎だからすんなりダムを受け入れる

ご先祖の汗をお金に替えるダム

ダム底にご先祖の骨置いてきた

役人の頭は空っぽかも知れん

西予市 黒 田 茂 代

葉に縁ない糸を母よありがとう

自由自在に舞う煩惱を持たぬ蝶

シャイなとこ忘れられないひとに似て

恋歌百首詠む目標は捨ててない

着物美人言われて顔が拗ねている

高知県 小 川 てるみ

紫陽花の心変りは淋しがり

見てみない振りをするのも愛の内

名所に胡座をかいていた暖簾

華やかさないが暖簾の味守る

安心へ自家菜園が受けている

高知県 小 澤 幸 泉

裏通りだけで事足る映画村

宴会の席妻の顔ふとよぎり

戦いの合図が響く朝の床

人生に負けて自惚れだけ残り

中継所設けわが家へ重い足

唐津市 山 口 高 明

半分はお化け養う助成金

相談をしても遺影は笑うのみ

退任の署長焼いてる証拠品

定年になればトンガへ移住する

農家には嫁かぬ言うてる農家の娘

唐津市 井上勝視

熊本県 高野宵草

八月の黙祷だけは欠かせない
家計簿を睨む女房にや切り出せぬ
ムダ遣い聞くとび騒ぐ一揆の血
共白髪長旅の脚温め合う
年金が義理欠くほどに痩せ細る

唐津市 丸晴翠

むしろ旗掲げ守った田が荒れる
泳ぎより水着メダルの色を変え
老いた手も繋げば絆温まる
あれそれで済まなくなつた老いの耳
次の世も一緒になんてもうごめん

唐津市 樋口輝夫

見え透いた嘘も嬉しい歳になり
病欠が赤提灯でくだを巻き
要望書ちゃんと上司に渡します
責任の無い手が挙げる多数決
採決のときだけ数に入れられる

唐津市 坂本蜂朗

才能を出し切ったから貝になる
子の才を箱に合わせて切った罪
部下の才摘んでポストにしがみつく
ライバルの背がほえんでいる不安
チャンネルを回せばどこも馬鹿騒ぎ

よく食べて老いに刃向う歯科の椅子
うっかりを笑えるうちはまだ達者
年金はもう取り戻しまだ死ぬぞ
曲り角まつすぐ行けば知らぬ町
補聴器を外し温泉孤に浸る

熊本県 岩切康子

暇あれば筋トレをすることにした
ゆつくりと考え喉で止めておく
内緒の手術只無事を祈るのみ
ふと出した訛りで睦む初対面
一言が胸に刺さつて眠れない

シドニー 坂上の子

大国の驕り揺がす大自然
軍事政權どうやら正義恐れてる
歩き疲れ銀行へ息入れに行く
原爆禁止となえる国がウラン売る
苦を知らぬ猫のいびきを聞く深夜

黒石市 相馬一花

恋文にわざと涙の染みをつけ
調査書に離婚歴まで書かされる
習うより盗めと言つた実力派
アニメから正義を学ぶ児童たち
くよくよは止めて今からケセラセラ

黒石市 佐藤 古拙

神妙な表情になる通夜の席
反転のつばめに見とれ草むしる
見舞客ほめて帰った千羽鶴
ジョギングの会釈になれた軽い足
むずかしい話はあとに酒を酌む

十和田市 阿部 進

スタミナをつけて北帰をする白鳥
不器用な老父の手です傷だらけ
足腰をきたえて旅を考える
奥の手を使い果たした古希夫婦
真心のこもったものに愛がある

平川市 小寺 花峯

風を切る口笛が知る当たりくじ
年金の旅では土産瘦せ細る
上段のイチゴの箱は売れ残り
一輪の花が萎れて昼下がり
ひっそりと散った野花にある未練

弘前市 福士 慕情

仏壇の父母をしみじみ憶う朝
裸電球父の帰りを待っている
眠いのを我慢している土産寿司
夕焼け小焼け母の職場へ貰い風呂
内職を八人家族でする夜なべ

弘前市 高瀬 霜石

ポイントが溜まるそわそわしはじめ
自立願望まずは仕事をしてくれや
にっこりと会釈だれだかわからない
片道切符有効期限ありません
いい男でしたと妻に言われた

弘前市 今 愁女

月見草津軽富士にもよく似合う
梅雨晴れにはころびそめる月見草
散る風情もなく夕べの待宵草
湯の宿の梁に今年も巢の燕
巣立つ子の勇氣見届く親燕

弘前市 須郷 井蛙

再検の通知家族をヒヤリさせ
現代版仲人抜きで式を終え
白鳥が猛獣よりも怖くなり
お供物墓のガラスが待っている
カラオケで国語学習しています

弘前市 櫻庭 順風

モンブランスキー滑降する白寿
エベレストスキー滑降する無謀
エベレスト七十代で二度登る
うれしいと声にならない声絞る
鍾ないような生活に熔けている

川柳塔のぞみ 8 月 句 会

日時 8月26日(火) 13時
場所 銀座区民会館(地下鉄東銀座3番出口)
宿題 「目立つ」 渋谷溪舟選 「菓子」 選者未定
「楽 楽」 播本充子選 各2句
「自由吟」 1句
欠席投句 8月23日必着 播本充子宛
〒193 0832 八王子市散田町2-31-3

六月つて好き青葉若葉が呼びに来る
雨止んで本気で納戸片付ける
深刻な話題さらりときいておく
生涯女彩とりどりを着まわして
電も降る雷も鳴るいち日終る
加齢ゆえ箸はゆっくり心得る
この先の計算無理な自給率
和食とて輸入主体のみそとうふ
採血の結果が怖くなるメタボ
残高は減り続けてる介護です
ジャンプ台夏草刈られ冬へ夢
大事とりメタボに対峙万歩計
町内の子どもに夢のネプタ出す
残り火の煩惱煽る風があり
僕の影藤に惚れこみ帰らない

弘前市 宮崎 ヒサ子
弘前市 相馬 銀波
弘前市 岡本 花匠

温故知新

相談に来て結論を云う若さ
病院長夫人は家で灸をすえ
生き字引英語違ったままおぼえ

他人にはまさかと思うほどやさし
雑巾はひからび主婦は今日も留守
はいったら困るが試験受けさせる

独り者茶漬けの音もわびしそう
ネクタイをゆるめて酒へ腰を据え
停年へ勤勉でしただけのこと

掻き分けて降りれば一つ前の駅
貯めている課長将棋も知らぬなり
養生をさせない電話またかかり

北川 春巢

木村 千容

菊田 いさむ

黒川 紫香

合同句集「私達」より
昭和三二年発行 選者麻生路郎

川柳塔の

川柳讃歌

(44)

木津川 計

旗色をはつきりさせて風の

高島 啓子

西南戦争の最中、連隊旗を奪われた乃木希典連隊長は天皇に申し訳が立たない、で切腹しようとするが、若き明治大帝は「その儀に及ばず」。感涙にむせんだ乃木は明治大帝国葬の日、自邸で切腹、殉じて忠節を尽した。旗はかくほども大切なシンボルである。だから「あの旗を撃て」は花森安治の作とも否とも言われるが、いつだって風の中の旗は国家や天皇の象徴であった。

個人の態度もまた風の中の旗のように。

仲人の居ない式ほどあたたかい

柿花和夫

ついに仲人の居る式は一割を切ったといわれる。挙式スタイルがガラガラと崩れるだけではない。葬儀の風景も激変である。家族葬、友人葬、香典無用、葬式返上、永代供養、戒名不用、海や山への散骨、遺骨の一部でベン

ダントやネックレスをつくる……。檀家の数も減る一方だから、「葬式仏教」のお寺さんは色青さめるばかりだ。

そう言えば、花嫁道具を紅白幕で飾ったトラックも絶えた。虚礼への反逆が広がる。

捨てるのはいつでも出来るから仕舞う

岸野 あやめ

僕の存じ上げる一人暮らしのお婆さんは、いつでも捨てられるから仕舞う。何もかも仕舞い、2DKの二部屋はあらゆる物で満杯、足の踏み場がない。風呂場も家具で埋まり、お婆さんは銭湯へ通う。夜は立錐の余地もないDKの隅のソファで丸まって寝る。

もったいならざる無造作な廃棄も問題だが、ゴミ屋敷に似たガラクタ山も論外だ。あやめさんはそうではあるまい。とりあえず仕舞っても適宜処分されている筈だ。

ヒトはロボット化ロボットはヒト化

古手川 光

無人の町工場を休日、社長が監視カメラでぞくぞくもロボットが働いているからだ。遠隔操作して新たな指示を伝える。ヒト化するのはロボットである。歩行ロボット・アシモはいまどこかのレストランでウェイターとして働いている。言いなりになるロボットのようにヒトも恐怖だが、やがて価値判断するようになるヒト化したロボットは二一世紀がある日、

驚愕の事態を引き起こそうか。ロボットによる人間への宣戦布告がなされたのだ！

国産というコンニャクも自負がある

小林 妻子

いま聞いたニュースに、国内産のウナギの筈が中国産だったとは。その数二〇五万匹、二五六トン。以前読んで震えた報道があった。ある国の養鰻池には死体を入れた隙間のある棺桶を沈める。すべり込むウナギに腐乱死体を食わせて肥え太らせ、日本へ輸出する。

つくづく国産の有難味である。その国産でも産地偽装がはびこる。何を信じていいかわからない不信の時代だ。妻子さんの保証するコンニャクを僕も食べるしかない。

医療費へまた年金が削られる

矢野 梓

生きてきて後期高齢者と束ねられ

山田 婦美子

長生き税だろう医療費また上げる

岸本 宏章

戦わせ、働かせ、挙句「長生き税」を徴収する。右の句も含め今号十一人が怒りの句を。一人当り老人医療費の高い県は福岡、北海道、高知の順だ。北海道は分かるとして、あと二県は病院が多いから。同輩に告ぐ、これからは病院の数も削られますぞ。覚悟を。

〔土方甚能〕誌発行人

自選集

津 守 柳 伸

遠 山 可 住

都 倉 求 芽

一本氣風雨に耐える蜘蛛の糸
紫陽花に貰う元気の七変化
二匹目の泥鰌はいない黄西瓜
消し忘れたかが電気と言う勿れ
リゾートへ水着出番が増えてくる
持つべきは友なり余生道一歩
こうのとりの二羽がかえっている平和
天変地変地球の自転変らない
草花展こんな草ならうちに咲く
八十の恋とやアンチエージング
無鉄砲に運命あとからついてゆく
傷口を黙っていても気づく母
梅雨空に行き場を探す夏至の風
妖怪が力をためる夏の闇
夏の夢しっかり汗に見せてやる

土 橋 螢

中 原 諷 人

西 出 楓 楽

仁 部 四 郎

宵闇にまぎれて卵産む蛙
欲捨てたひとから仏さまになる
六人家族が食うほどは稲を植え
鯨鯨が捌ける女になりました
年金をもらい過ぎてはいませんか
マイカーと別れて車庫に花あるじ
ふたたびも踏ん張るものと療法師
葉月くる介護入浴受けながら
帰省して墓掃除にも盂蘭盆会
棚経の僧おはなしに仏の座
想像力が豊かですぐに身構える
咲いて散る覚悟は花に負けている
泣き上戸も笑い上戸も寂しがり
みえみえのお世辞喜ぶふりをする
千の風にならず私は墓で寝る
米粒を透かしてみたい陽が昇る
おクスリはきちんと呑めと陽が昇る
CMのハガキが二枚陽は真上
新聞に赤チンを塗り日が暮れる
私より時代の責めで陽が沈む

波多野 五楽庵

無言電話別れ話が出てこない
涙涸れてパントマイムが上手くなる
ノーネクタイ同じ格差の輪の中に
美しい波が神話をくり返す
痛ましや台風崩れの花畑

林 瑞枝

毒舌ほんとと本心意外とお優しい
花束にぼとり才女の嬉し泣き
豪邸に世間と断絶されて住む
茶に誘う優しい鬼を待っている
童謡を歌えば青春よみがえる

早川 清生

どこの子か泣いてる昼のめし屋よし
大阪をかさかさにする財政難
テーマは貧だろう幼い日の写真
横綱の回顧に眠れない幾夜
天と地の間に弥勒と鬼がいる

前 たもつ

喜寿一行能登をめざせば梅雨も晴れ
仮設住宅元氣出させる朝の市
絶景を守り続ける千枚田
アイヌ語の残る半島北へ伸び
極楽は朝日仰いで湯に浸る

宮口 笛生

食べ放題の蟹へ女の欲があり
耳遠くなつていい事悪いこと
鮎瀬上水のきれいな川がある
解禁の鮎がぼちぼち釣れている
筍が屋根まで伸びてもう終り

宮西 弥生

最短距離同士会うてる久し振り
逃げて来た甘さに悔いのページ数
見なかったことにしておくのも他人
障害者にやさしすぎているトイレ
梅雨晴れ間コインランドリーから明ける

森下 愛論

百歳へまだ十年は酒が飲め
老いらくの恋の鼓動も超特急
老いらくのたわむれに似た恋もして
生活のゆとりでんねん昼の酒
観念しエコー検査の経つ時間

八十田 洞庵

棒グラフ背にして歩く炎天下
占いへ妥協をしない逃避行
正直な天は二物をあたえない
門閥も学閥も無くお人柄
実力は時に汚職の落し穴

両川 洋々

軸足がブレると夢が宙に浮く
ネオン街鬼の棲み家はこころしい
ポケットに火ダネともなる愛一つ
自爆テロ命そんなに軽いのか
ふる里の土に余生は預けよう

阿 萬 萬 的

重ね塗りその真実がばやけてる
背伸びしたばかりに溜まって来る不安
オッチョコチヨイそれなり骨のある男
温く味ある言葉だんだん死語になる
休み休みにしたらと妻の目が笑う

板 尾 岳 人

大好きと言われたことがある馬酔木
もう少し待ってきれいな花を観に
美人画と同棲するよになりました
あの時の馬酔木の毒はまだつぼみ
金持ちのような顔して回り寿司

奥 田 みつ子

懸命に生きた褒美かまるい風
浮世とや時に思わぬ風あたり
また今日も笑って躲す向かい風
楷書から草書に変えてまるく生き
木洩れ陽にかくれんぼした日がよぎる

河 井 庸 佑

慎重に構えていたに虚を衝かれ
主役立て脇に徹する渋い芸
読み浅い石できつちり覚られる
核心に触れると話はぐらかす
一石を投げて波紋を明日の糧

木 村 あきら

日の丸の旗持つてゆくキノコ雲
戦勝を信じて散った若桜
玉音を涙で聞いた日を想う（南洋群島）
武蔵 大和 魚の棲家になって幕
南海の孤島に参年今に生き（93歳）

小 島 蘭 幸

ワタゴンという怪獣になる孫だ
積木も絵本もまだ早いですおじいちゃん
賢くなると曾じいちゃんが予言した
おばさん二人豹柄と花柄と
おじさんになった真つ赤な旗である

小 西 雄 々

シナリオを変える男を待つ茶房
石地蔵魔女の願いは聞き流す
波静か明日を信じて鬱消える
焦点の合う友を待つ縄のれん
血液も沸点になる暑に耐える

齊藤 嘉

したたかに生きよう草の根を張って
雑草でないよわたしは野菊です

白魚に国境はない透明感

二人三脚呼吸が合っているいい走り

大輪を咲かせてくれたのは根っこ

塩満 敏

少子化でメダカの学校つぶれそう

今度こそボクの選んだ市長さん

大阪城彬の句碑が有名に

アサガオがおはようさんと今朝も咲く

はやばやと糸瓜の花が咲きました

新家 完司

久し振りの山に衰え知らされる

このように生き生きせよと柿若葉

しっかりと役目果たしている葉っぱ

ケシの花は悪いことなどしていいない

食べ過ぎて胃薬 飲み過ぎてウコン

川上 大輪

手帳開くと兵隊さんが動き出す

肩書きは偉いあなたは偉くない

ドレミファソまでは狂っていないかった

あんパンにあんが入っている癒し

財産も地位も名誉もない誇り

玉置 重人

背伸びしたツケが重たくのしかかる
くよくよとしてると明日が逃げて行く

断ち切れぬ絆が重い泣き笑い

前後ろ右も左も念を入れ

血の検査またべからずがふえてくる

恒松 町紅

人間は劣ると庭の花ざかり

周到に運転席の横は傘

折角の意見が宙に浮いている

老体にはやはり応える空模様

世相とは裏腹花も実も稔り

しまね文芸フェスタ2008 島根県川柳大会

会場 江津市総合市民センター(江津市)
日程 9月21日(日) 13時～16時30分

締切 13時30分

開会 14時15分

昼食弁当(500円) 受付順50個

参加費 1000円

欠席投句料 1000円(切手不可)

投句先 〒695-0102 浜田市宇野町245

佐々木裕 宛

締切 8月30日必着

兼題と選者 各題2句

「着 く」

政岡日枝子

「卵 」

金築 雨学

「護 」

三澤 放舟

「健やか」

川本 畔

「寝 る」

三島 崋丘

「間 」

高橋久美子

「試 す」

竹治ちかし



西 出 楓 楽 選

奈良市 矢野 良一

お出掛けの好きな財布を持っている

選挙前砂糖ハチミツ配られて
生き方を参考にする母がいて

泉佐野市 備後 三代子

今日もまた食品偽装ワイドショー

耕す後にちやつかりカラスついてくる

歳相応嘘を吐かない影法師

藤井寺市 増井 ヨシ枝

平和呆け蟹工船を読んでいる

クラス会会うたび千の風が吹く

これという取得はないが笑顔よし

無洗米老母のリズムが聞こえない

バラの花弁浮ベリツチな仕舞風呂

来てうれし帰ってうれしGW

横浜市 巖田 かず枝

消しゴムで消したい事の五つ六つ

素人が裁く事など出来ません

人間も犬もシニアで医者通い

引際のお見事亡夫に最敬礼
梅雨晴間大甕にある忘れ傘
マネキンの一步踏み出たニユールツク
訪れる人とてもなくひと日暮れ
靴下の片方探す梅雨じめり
衰えた足を煽って一歩二歩

高知市 松尾 憲子

通り過ぎた人みな今は白い風

息合わぬ二人羽織のもどかしさ

人類の別名ヒト科ナマケモノ

脳ミソをつねりたくなる物忘れ

玄米は噛めば噛むほど眠くなる

女は灰になるまでなんて嘘ですヨ

大阪府 坂 裕之

辛い日は大きな声でご挨拶
休肝日なんと時間の長いこと

待つほうが待たせるよりは気が楽だ

おいしいね白いご飯とおみそ汁

丁寧な言葉が俺を萎縮さす

ずっと居てありがたささえ忘れかけ

岸和田市 中岡香代

終戦のどん底を知る夏の雲

我が家ではとりわけ犬が威張ってる

オレオレと納税実は同種類

天才と変人同居紙一重

一発の演歌ヒットでタレントに

ジーパンのやぶれに母はアップリケ

枚方市 小川良吉

連れ合いは心美人で恙なし

美女に逢い犬も尾を振る朝散歩

万緑や仏に逢いに湖北みち

吾亦紅を歌うと妻は部屋を出る

難聴の妻はくの小言は素通りす

犯罪も世界レベルの秋葉原

大阪府 神野千恵子

味付けがおおらか母の目分量

男らしさ女らしさが不透明

一品にサブリメントのあるメニュー

ガンダロにぎよつとしてゐる紫外線

結び目をほどこ心に風を入れ

片意地を張って寂しい日が暮れる

寝屋川市 森田麗

里の秋訪ねてごらん千の風

レディーファーストいつも頭にある野心

揺れたなら愛犬抱いて避難する

がらくたが過去は捨てよと背を押す

逃げ道を開けそれなりの理由を聞く

バカンスでちよつと宇宙を飛んだ夢

富田林市 古田千華

はめられて足の裏まで熱くなり

梅雨滂沱口紅の色とびつきり

大欠伸何故か大事が洩れそうで

花吹雪次に舞うのは私です

はめられて耳がホクホク熱くなる

笑うたび本音の在り処惑わせる

唐津市 吉富節子

嫁いでも母の日に来るプレゼント

豊かさが義理人情を切り捨てる

現実がテレビと同じサスペンス

行き過ぎてバックして知る人の道

自分への投資老大門たたく

いんちきにすってんてんの欲の皮

和歌山市 坂部 かずみ

原油高シートベルトを締め直す

生きている証夜中にメールくる

雨蛙同じ敷地の家族です

雨蛙去年と同じ場所で鳴く

野仏に祈る世界の安泰を

和歌山市 田中 すず

無計画二転三転する話

夾竹桃生きよ生きよと咲いている

創作へ命をむく音がする

森の一番深いところに父の墓

信号の青が続いて恐くなる

和歌山市 土屋 起世子

青春の断片あつめ万華鏡

上を向いてゆくと閃き多くなり

自信過剰転んでやっとローヒール

茶粥炊き夫がくれた星三ツ

急ぐことない日信号青ばかり

和歌山市 根田 よしこ

高齢化きょうび八十まだ若い

わいわいと家族で田植え小百姓

損しても田んぼをつくる欲がある

休耕田やっぱり売れぬ切なくて

老母と娘であの世のはなし笑い合う

和歌山市 福井 菜摘

ひと呼吸おいて答えを丸くする

和を保つ陰に日向に母おわす

ハードルを下げて名案ふつとわき

一本の楔が風の向きを変え

百の窓百の明かりが点く平和

和歌山市 堀 富美子

早朝へ井戸端会議する燕

人生のトライ挫折がつきまとう

天災へ明日は我が身に置き替える

定年へゆっくり脱いでゆく仮面

プライドを刺す一言に湧くフアイト

岩出市 村中 悦男

世間体つい生き方を迷わせる

明日あると老いて妻から諭される

子の自慢する顔誰も隙だらけ

妻八十タンスの奥に寝る晴着

難聴で笑いの渦の外に居る

海南市 小谷 小雪

誕生の記念樹軒を越えている

耳うちのおいしい波に乗ってみる

ドクダミの花は天指し自己主張

六月四日歯を丁寧にていねいに

ジーパンのほころび今はよくもてる

紀の川市 宇野 幹子

紀の川市 吉村 幸

森羅万象皆友として父の鍬
熱湯に洗脳されたカップ麺
正絹に包み正論そつと出す
妻の釘骨髓までも突いてくる
足の裏から今日という日がすり抜ける

紀の川市 北山 絹子

田辺市 大峠 可動

妻不在そんな夫のロスタイム
ホタル飛ぶ川に思い出詰つて
口数が少ないだけに温かい
惜別へ父のブランコ揺れている
外来語増えて頭痛の種となる

紀の川市 木村 徑子

和歌山県 森下 よりこ

美しいもの分けてもらっている画廊
煩惱をオフにし大の字で眠る
秘めごとは洩らしていない小ひきだし
文芸へおそい発芽をしています
女ひとりの城で気ままのありつたけ

紀の川市 辻内 次根

鳥取市 大前 安子

爪の割れじつと見ている高齢者
病院の数多の中のその一人
注意して見れば雫の中の色
嗅覚が鋭くなってきた野性
一日が終わる仏様の前

底抜けの笑顔が好きなカメラアイ
ほどほどの暮しに馴染むカレー皿
なるほどと貰った知恵を娘に譲る
我が娘だね私好みのシャツ届く
あの頃の若さに挑むフラフープ

境涯を超えて後期の石だたみ
過去形のくぼみに溜まる浮き沈み
煩惱の重さを書いた蟻の遺書
いのち残照この世は生も死もドラマ
九条の途命を紙に書いてみる

どくだみの花びら白き自己主張
ひとり寝にあくび出るまで本を読む
農に生き梅雨期の仕事無限大
あじさいの花に降る雨嬉しそう
見ず知らずの他人にいたわられる歳に

悪いとこ誰に似たのか私の子
口を出た言葉還るか歯を磨く
今日もまた安請合いにドタドタだ
いつ見ても笑顔いっぱい売るお店
溜め息をビールの泡へ入れて飲む

鳥取市 近藤 秋星

紫陽花も年頃赤く化粧する

衣替え女子高生が眩しかり

ご時世は三下り半を妻が書く

君逝つて巨人のファン一人減り(悼む寛昭君)

食糧危機必ず来るぞ日本にも

鳥取市 坂本 智子

いただいた恩賜のことば忘れない

カモ親子ぬるむ川面に戯れる

あざみ咲く荒地の恋に近寄れぬ

ハーブ園一面あふれほのかな香

恋をして見上げる月の美しさ

鳥取市 松岡 照美

寝転んで輪切りにされる撮影だ

一服のグリーンシャワー点眼す

いけるならダイヤ婚まで目指したい

目を覚ます萌え木グングン緑増す

もう少し地に足着かせ頑張ろう

鳥取市 山口 千代子

愚痴は言うまい三度の食事戴ける

言つてはならぬ我慢がまんと貝になる

念仏をとなくて心なごませる

はかなさよ昨日話した人が逝き

泥水を飲んでこそ咲く蓮の花

倉吉市 酒井 美美子

皿割れる音でうつぶん晴れてくる

偽ブランド持って上品ぶっている

戦争のない日本は有難い

湯治場で心の憂さが晴れてくる

描いても描ききれない余生です

倉吉市 福光 京子

子供会芋苗挿して梅雨を待つ

夕日浴びる我が町並みのシルエット

小麦粉の値上がり憂ううどん好き

深爪を固い結び目無視される

川柳の深さを知つて四苦八苦

倉吉市 藤井 美津恵

計る度身長縮み背伸びする

かじか鳴き遠い昔の川思う

若鮎のすばやい動き驚見つめ

親と子の競技に親がいきり立ち

紫陽花をほめて一枝いただいた

倉吉市 前田 喜美子

蟬時雨畑の草は伸び盛り

ゴム長の新品履けば雨楽し

学歴の外で楽しむ川柳会

守る人あるから棚田生きている

高学歴家庭を持たぬ女性ふえ

米子市 猪 森 スミエ

ぬるぬるとすべる鰻の護身術

養殖の鰻過保護の肥満体

励まされ取越苦勞捨てました

スーパ―がおふくろの味遠ざける

旅の宿一風呂浴びた下駄の音

米子市 吉 田 陽 子

子育ての基本が日本から消えた

散り際を思いわずらう二輪草

日めくりに似るパソコンを今朝も開け

大敵は砂糖戸棚に閉じ込める

萎れない女はおしゃべり大好きだ

鳥取県 岩 崎 和 子

砂丘越えのほりつめれば日本海

足跡が喘ぐ砂丘について来る

地平線遠くて長い北海道（ふるさとへ）

転んでも骨折なしのありがたさ

大家族鰯丸ごとよく食べた

鳥取県 齊 尾 くにこ

DNAわたしはノラと思ってる

ふやけてるテラノザウルス家に居る

ころころと笑い虚しい人と人

母の日が半月遅れやって来た

氣遣ってくれる人あり孤独好き

鳥取県 岡 村 孝 明

流行の水着老いの目楽しませ

森林浴植樹の昔振り返る

ライバルも酒くみ交わすよい仲間

健やかに金婚迎え吉とする

波に乗り風に従い生きている

鳥取県 岡 本 幸 枝

誤字当て字消しゴム笑いころけてる

ゴム紐もメタボ支えて耐えている

幸せで再び会えぬ父母に謝意

鮮明に聞えた頃はもう来ない

リハビリに再起をかける夢を見る

松江市 松 浦 登 志 子

神経を耳に集中いい話

サクラランボ今年も鳥に先こされ

札よりもポイントカード厚くなり

記念品粗品にもらうエコ袋

メガネしてたまには家の掃除する

松江市 山 根 邦 代

木苺の味懐かしい里の道

ゆったりと時が流れる里の日々

雨ほしい空を見上げるナス胡瓜

同じこと領き合って同い年

古里の訛りやさしい詩受ける

雲南市 武島 ちよえ

決断へ向けたは友のアドバイス
強がつてみても所詮は子の荷物
笑わせてくれて痛みが消えていた
シャッターが下りて取り付く島もない
いい事があつた日記は溢れ出る

雲南市 福岡 博利

赤い灯にふらふらとする足のうら
古里に幼なじみが居なくなり
梅雨に入り脱いだり着たり散歩前
郵政が変われどポスト赤のまま
ケンカしたあとも荷物は俺がもつ

雲南市 渡部 好榮

この元氣酒もタバコもある暮し
犬に守りされてるような二人いて
赤い糸もつれながらもしっかりと
つい口がすべり覚悟の針千本
追い風が三途の川もひと跨ぎ

安来市 原 煩惱児

茄子トマト植えてひとまず老いの畑
高いたかい御機嫌孫と好々爺
雨降りをバチンコ日和という独り
嫁さんが僕の真似した出雲弁
孫が来て一つ二つの出雲弁

美作市 小林 妻子

左馬も竹短冊もまだ人氣
老人の仕事お茶摘みサンショ採り
バチンコも野球も食わず嫌いです
時代遅れがまた立ち止まるカタカナ語
縄暖簾一度も覗いたことがない

尾道市 木曾 一徳

植えるだけ植えて親父の田植え歌
ほぼ同じ揃う青さの植田風
草刈つて捜し当てたる岩清水
団塊の田舎の中にアバンチュール
休耕田作らぬ父の坤語る

府中市 岩本 雅代

若いねと言われて迷う無駄を買う
くるくると日傘まわしてシヨッピン
梅雨曇り心は青空曾孫出来
来年は大きな鯉を泳がせる
首長くして待っている新茶

府中市 馬場 利子

精一杯生きた証の遠花火
子等の夏里へ広がる海がある
月あかりゆつくり溶ける森の闇
足を病む背おった夫の身の軽さ
思うこと吐いて夢盛る一行詩

府中市 藤岡 ヒデコ

大洲市 花岡 順子

子の居ない姉が主の骨を抱く
入院を拒んだ義兄の胸の内
人前で気丈な姉の背がかがむ
ご近所の情けにすぎる外はなく
姉さんを頼むと猫のミーチャンに

宇都市 高山 清子

身勝手な言訳男箔を下げ
いい顔で老いたく欲は捨てきれず
人間が恐くて閉める鍵の音
葬列のうしろは今夜飲む話
愚痴るより過去を笑える老い二人

阿波市 三浦 千津子

風呂敷に包み切れない母の愛
幸せの中にも少し抱く内緒
再会へタイムスリップする慕情
双方へ謙虚に言葉濁しとく
たつぷりのオゾン至福の山歩き

今治市 渡邊 伊津志

ボーフラがごつつんこして良く遊ぶ
神様の意に添うままに落椿
気色ばむ社長の顔に器見る
何気ない敬語で育ち教えられ
呼び捨ては平等でない日本語

浮き沈みあるがあなたと生きている
路地トマト日光浴をした甘さ
一粒の種ひまわりは遅しい
輝いて人の集まるところが好き
明るさを差し上げますと嫁が来る

香南市 桑名 孝雄

枯葉マークが僕の車を引き立てる
死の誘い千の風には騙されぬ
大酒も飲んで八十路をまっしぐら
寂しい時はハガキ十枚書き飛ばす
詩的ではないので困る土佐の雨

香南市 近森 功

言い訳をしすぎて尻尾つかまれる
クールビズスリムな父の浴衣がけ
半額と言うから二つ買って来る
爪を切る何の不満もない夕べ
幸不幸総て財布の中味から

高知県 いの 静草

僕と行く時はシンプル妻の服
刷り込めば苦にはならない家事雑事
恥じることあつてその後は誤らず
金ないが欲も少ない果報者
辿り着くなまんだぶつとおおきにと

北九州市 岡田 幸生

言い勝った方が悔いてる老夫婦
黄信号があちこち点りだす老軀
母の日の妻を誘ってフルコース
あの世へは夫婦仲よく遅刻する
丁寧語で埋める断りの手紙

唐津市 岩崎 實

美をはこる花のいのちも萎えていく
全集本棚に積み上げそのまんま
どうじないメタボの布袋笑つてる
一筆が走らないまま明けくれる
後部座席もシートベルトが命綱

山鹿市 阿部 ミツ子

年金苦一度体験して見ては
身がほそる姥捨て山に行く道は
生きる日々花と語らい水をまく
湯の町の井戸端会議ニュースあり
新緑の心地よき風窓開く

メルボルン 藤原 ポン吉

燃える水金のなる木がよく育つ
元も子も石油離れで枯渴する
跳ね上がる石油に燃やす知恵と皮肉
皮肉にも値上げよく効く資源保護
メタボにはガス欠一番効く薬

シドニー 三谷 たん吉

にらんでも駄目と言うのか格闘技
いじけてる横審会をにらみつけ
金くれるタクシーならばすぐに乗る
無関心という病には薬なし
天災は地球の怒りと受けとめる

札幌市 小沢 淳

欲捨てるなどと大法螺吹いている
発酵が過ぎて酸っぱくなった僕
触れ合えば人生の師はたんという
返り血が恐く反論押えてる
傷口を見せて味方につけている

札幌市 三浦 強一

時そばを話題に妻と屋台そば
屋台から月道連れの千鳥足
酒飲んで酒の句詠んでゐる至福
親の夢子の夢いつもすれ違ふ
前期後期は精神年齢だと思ふ

青森県 松山 芳生

柔らかな耳だお世辞を聴いてやる
夫婦とはどんな形がいいのやら
白黒をつけて気まずい風に逢う
ガン告知心の準備聴いてやる
熱弁の青い主張に賭けてみる

取手市 葛西 清

絵文字読む天神様の渋い顔
江戸弁が好きで三尺締めている
ずる休みを充電という人がいる
まあいいか一日遊ぶ梅雨晴れ間
味噌汁の味でつながる母と妻

日立市 加藤 権 悟

今もなお学徒の兄はまだ十九
八月のドームに蟬のレクイエム
八月の焦土脳裏はなれない
今もなお凍土に眠る土饅頭
飽食のグルメよおごりすぎないか

東京都 井上 つよし

身の回り百均物で用が足り
バイキング心貧しいまとめ食い
支持率の谷間に揺れる主義主張
タレントの三段腹に二重顎
鼻に抜ける言葉懐かし土佐訛り

昭島市 野口 忠

長梅雨を砂漠の国へ届けたい
キューンキー待合室で歯が凍る
生きている証しに溜まる領収書
妻がまだオーケー出さぬ主夫の味
定年後妻がときどき虎に見え

横浜市 金森 徳三

坪庭もつい持て余す歳となり
聞かずとも前期後期で知れる歳
会釈して今日の天気ですれ違い
週末のたびに雨降る嫌がらせ
ねじれてる暦どおりにならぬ空

横浜市 川島 良子

仕掛けたのはアナタ乗ったのはワタシ
しつけ糸解いて乙女が蝶になる
他人事と思えないから怖くなる
大脳のチョットお掃除するバズル
千円になれば禁煙するという

横浜市 長島 亜希子

後期高齢者じゃないと不機嫌七十四
歳上に見ていたらしい話しぶり
親指姫乗っていそうなチューリップ(ベネルクス三国旅 3句)
小便小僧着きれないほど衣装持ち
平和の火灯せど紛争止まらない

藤沢市 加藤 スズコ

伊豆の旅山は新緑光る海(伊豆の旅 3句)
じゅうたんの緑まぶしい大室山
波に乗る大島通い白い船
囲まれて米寿うれしい祝膳
祝い席嫁が渡したコンバクト

佐渡市 高野 不二

京都市 藤井 文代

父の日も結局父がたかられる
国債で破産しそうな日本国

あさつての方向見ている病んだ母
冗談に額面通りかわせぬ身

卵産まぬままにわとりを飼っている

図太いのはボケがきてると評価され

一段がだんだん高い喜寿傘寿

噂ばなし花は咲くけど実はならぬ

振り込めサギ人の話は面白い

反対の意見時には知恵にする

岐阜市 平野 あずま

大阪市 江島谷 勝弘

善人の口から洩れる温い嘘

よめはんの鼻歌いつも外れてる

万障を乗り越え集う酒の席

バンダナが似合うお方が羨まし

老木と雖も恋の花咲かす

温暖化歯切れが悪い日本国

夕刊が無くて日曜だと分かる

サユリスト遂にアクオス買ったもた

エコ袋提げスーパードで小さい善

お内では第三ビール飲んでる

静岡市 渡辺 芳子

大阪市 太田 としお

同窓会増えるは笑いじわの数

後期高齢ずばりつかれて腹が立ち

この人生やり直したい事ばかり

後期高齢あなたは燃費悪すぎる

良い年の古い信じ生きてみる

後期高齢介護されても持つ一票

高齢者子孫曾孫で二十人

後期高齢国の罪ではないのです

今の世は愛がどこかにかくれんぼ

後期高齢もうそのへんでいいでしょう

京都市 清水 英旺

大阪市 尾崎 黄紅

かぐやから見る地球の青さ神申し

閉店の本屋お世話になりました

千年を生きて今なお光る君

受けた恩千を数えて米寿くる

光の君千年の恋色あせず

邪と邪とが政界いつも軋む音

ケータイの裏は暗くて深い闇

譲られた席を譲って満ち足りる

神の杜に降る五月雨はピアニシモ

小川さらさらふるさと遠くなりけり

大阪市 尾崎 ゆめ

ノーテンキだから私は嫌われる
今だ今だと七月の背中押す
改札でちよつとすつぱいさようなら
身に合つた予算で落とすオークション
三割を打ちやつと顔覚えられ

大阪市 澤田 定子

美人湯に三度つかつて鏡見る
物価高鈍感力で相手する
鯉幟団地サイズで泳いでる
老舗店昭和が残る周旋屋
スニーカー散歩通院必需品

大阪市 田浦 實

曲がる胡瓜僕が育てた美人です
よつこらしよこれが案外効くんです
一本の路地の桜も春仕切る
毒だみと呼ばれていても凜と咲く
金平糖食べるの惜しい菓子の花

大阪市 寺井 弘子

気紛れに触れたバズルに嵌つてる
御立派な髭剃り落し何かある
古里の柱のキズにあるドラマ
無精髭懷いた姪に嫌われる
振り返り過去見てこの先思いやる

大阪市 萩原 大朔

京にいるそれだけでいい一人旅
汽車の窓開けて別れたよき時代
わけもなく花買つてくる何かある
御曹司世間の風はガラス越し
慰めが心の傷に塩を塗る

大阪市 橋村 容子

新緑に木々が背のびで体操を
五月晴笑つて咲いた花みずき
マイペースゆつくり歩むカタツムリ
整然と田植の田圃目にまぶし
階段も手摺に頼る昨日今日

大阪市 原田 すみ子

人様の庭の手間見て花屋行く
自惚れも私支える一部分
年なりの元気があつて今日の空
お互いに選んだはずの鍋と蓋
日々の愚痴泡と流してしまひ風呂

大阪市 平井 露芳

後期には遠慮はしないジェネリック
親善もバンダ借りるのに一億円
ワンコイン募金で大阪助けたら
ジャコまでも国産ですと騙しとり
憎まれっ子ちやうのにはびこり長寿国

大阪市 山本 加お里

ワンサイズ太めの服を着るメタボ
夢枕生前よりも若返り

お辞儀した花に詫びつつ水を撒く
野良猫に餌はまだかと起こされる
ピチピチの肌を泣かせる甲羅干し

大阪市 吉内 タカ子

対等に話合いたいもどかしさ
トラに燃え夕飯つくるのを忘れ
宇宙にも旅行に行ける日が近し
現役でも後期高齢なんと言う
梅雨晴れ間急ぎ足です墓参り

大阪市 吉川 弘泰

ひと芝居打ったつもりが墓穴掘り
マネキンも水着を着たら夏帽子
ろうそくで涼しく回る走馬燈
男物しぶしぶ混ぜる洗濯機
浮世絵の美人の姿艶めかし

大阪市 吉田 富美

片陰に入り我が影休ませる
芋粥がうまいと戦知らない子
月見草ひらいて思う人のあり
しあわせを育てる如く花咲かす
仕事ない指が考え事して

池田市 上嶋 幸雀

父の日も寡黙に妻と酌み交わす
アジサイの本音を測りかねる雨
ちよいとワルを気取ってみたい梅雨晴れ間
虹消えるまでに握手をしておこう
石榴爆ぜうっかり本音こぼれ出る

茨木市 島田 誠一

あの時のびんたは今も道しるべ
痛い目に遭ってやさしさまた拾う
減反のツケじわじわと効き出した
役人に橋下流の灸を据え
遊び球投げて恋かと確かめる

河内長野市 内海 綾乃

水田が西日に照らされ光ってる
一分毎に鳴らなくてよし駅時計(湯本)
農業で蛙少なく夜静か
路地苺ハウスと違い風味あり
順番に餌待っているツバメの子

河内長野市 針生 和代

わたくしの鬱を紫陽花埋めてくれ
ドアひとつ隔て仲良い嫁姑
玩具店寝転び叫ぶ孫のテロ
鎗が猫に代わって妻元氣
阿と畔で回ってゆける暮らしです

河内長野市 宮 守 正 博

魂が抜けた首浮く露天風呂
客帰りつくり笑顔の仮面脱ぐ
ええ話がつかりさせる落し穴
目に入れた孫も今年是一年生
迷ったら金魚にそつと聞いてみる

岸和田市 米 富 淳 風

見て見ると花は我が身の意志表示
花に艶しつとり出させ雨しとど
老いてゆくプロセス女優見せてくれ
ごめんねで空に散りゆく向かつ腹
毎日が心快晴だといいいね

堺 市 大久保 伸 子

お世辞ではないとお世辞を積み上げる
ラッキーな日は神様に手をあわせ
したたかに酔わせて桜散つてゆく
旅にゆく約束だけはすぐ決まる
紫陽花の花毬おもき夕まぐれ

堺 市 近 藤 治 子

飲み込んだ一言腹であばれだす
バリウムを飲んで遊泳させられる
飲み込みは悪いが真面目母譲り
主婦のわざ野菜の命使い切り
年毎に命華やぐクラス会

堺 市 阪 井 智 之

玉三郎芸で磨いた艶の極
米寿でも艶が冴えます森光子
持ち上げた途端ビシッと腰に釘
絶妙の塩一振りで味に冴え
ラムネ水ごくりと飲んで童心に

堺 市 羽 田 野 洋 介

迷ったら明るい方へ夜の道
戦離れやつと分かった世の広さ
こつそりのままでは済まぬ世の定め
お茶だけで済ませば世の中事もなし
聞かなくても顔に出ているその答え

吹田市 藏 田 光 子

善人の顔どこかやつぱり温い
長年の心がぎざむ顔かたち
ボーカルフエイス横目で見てはカード抜く
私のDNAを子が見せる
句読点どこかで打って息をぬく

吹田市 中 村 十 八 娘

一人旅いつか道連れ初夏の風
自己主張意外に強いかすみ草
諦める母の無言の涙見て
病む母の頬に紅置く合歓明かり
招かざる老いが抜き足忍び足

吹田市 二宮 栄子

子の世話にならぬつもりウォーキング
古希までを支えた足を褒めてやる
亡き夫に思いを馳せる薬指
殊更にわびしく思う雨の夜
独り住む受話器風呂までついてくる

吹田市 早 泉 早 人

衣替えこころも共に替えてみる
言い訳が四角四面になってくる
早足で雑踏抜ける孤独感
雨の日は雨とつき合い逆らわず
気のせいカボクに似ているモンタージュ

高槻市 笠 原 乃りこ

熱すぎた地球に慌てだすヒト科
マニキュアをしたで触れるなさくらんぼ
まん丸い地球を愛でるかぐや姫
叩きに箒雑巾掛けのダイエツト
占いの言う晩成がまだ来ない

高槻市 片 山 かずお

老斑にジャマをされてる若づくり
大方は老人性をつく患者
大声で内緒を話すご老体
次からは椅子席だなどクラス会
あの人記号になつて棲む手帳

高槻市 安 田 忠 子

美人の湯通い続けて二十年
万緑の中でゴルフのできる幸
真つ白な制服に会い夏来る
聖火リレー大国の恥部世に晒す
一億円レンタルパンダ驚いた

豊中市 荒 巻 夢

半畳で台本なしの泣き笑い
みどり風祭囃子がふとよぎる
携帯で微妙と言った孫の春
メタボなどすぐに吹つ飛ぶ自給率
せめてもの簾を代えて夏仕度

豊中市 神 野 宇乃子

夏草の元気と力比べする
掘り出されたみみず慌てて埋めてやる
愛情に飢えた花房堅いまま
水ばかり欲しがる茄子はつやつやと
日の光り充分吸ったトマト採る

豊中市 谷 川 勇 治

私を裏返しても金はない
定年の尺取虫が昼寝する
セールの奥の手に勝つ妻がいる
極楽へ移動手続出している
サクランボ恋の合唱しています

豊中市 松尾 美智代

異次元の世界に遊ぶ旅に出る
この空もはるか日本に続いている
時差ばけで友もやっぱり不眠症
地中海眺めて瀬戸の海思う
太陽はアドリアの海宝石に

羽曳野市 宇都宮 ちづる

足腰を鍛えて対う原油高
喜寿じゃなく後期高齢者と呼ばれ
肩膝と痛みが移動老いの坂
メリハリのない生活を好しとする
浮かぶ顔に名前が付かずあのが付く

羽曳野市 森 下一知

腰痛が母の野良着にまとい付く
病院を選びそこねてヤブに遭い
夕焼けをやんちゃ坊主が使い切る
放課後のない子が急ぐ塾通い
気の弱いDNAが抜け切れず

枚方市 小林 わこ

立つ位置を変えて気まずさすり抜ける
普段着が似合う仲間できつろげる
何色にも染まる自分が腹立たし
子をあやすピエロになっているお顔
やりくりを忘れた顔で美術館

枚方市 坂本 ミヨノ

ほろ酔うて雨と道行きしています
雑草が月日で変る歩く道
雨露は真珠に見せて落ちて行く
外湯回り浴衣に下駄で歩く音
花菖蒲雨で紫濃く映す

藤井寺市 伊藤 アヤ子

一枚の写真が絆強くする
のど元を通してくれた母の愛
自由にと言われそこから動けない
我慢する事が美德の戦中派
同じ事しないと変った人にされ

藤井寺市 津田 シルク

石油高ちよつと送つてと言にくい
古希間近しげしげとみる顔の皺
雨音を聞きつ眠りにつく安堵
日替りで痛いところあり老い二人
無理矢理にサイズを合わす試着室

藤井寺市 吉田 喜代子

新入りは周りの空気読み切れぬ
二十歳若かったらと古稀過ぎて
様々に語り合つてシオマネキ
無農薬二夜でキャベツ穴だらけ
待ち兼ねた睡連の花まず亡夫に

箕面市 寺井柳童

オイルマネー砂漠に築くビルの街
宅配便届く真赤なカーネーション
コーラスの口が合わない趣味の会
ゴール見え不意に魔が差す落し穴
金メダルうれしい誤算期待する

八尾市 赤木妙子

どなたにも心の窓は開けておく
四角四面急に丸にはなり切れぬ
針に糸通る介護はまだ要らぬ
楠若葉姥捨て山は見当らぬ
センセイの時々ばれる裏の顔

八尾市 田邊浩三

値札より賞味期限と生産地
退院日目に見えてきた普通食
美しい日本を穢す外来種
CO₂が売買される温暖化
目標の山がだんだん低くなる

八尾市 寺川肇

沈み際明日を約束する夕日
食欲が今日もメタボと小競り合い
ベテランの極意が冴える遅い球
近い人に限って遅刻する不思議
新道にへそ曲げ通す古いナビ

八尾市 西川義明

温暖化きれいな渚消されゆく
結局は尻切れトンボ毒ギョーザ
一合が二合となった花見酒
もう少し若けりや並ぶ献血車
御仏の慈悲の深さに救われる

八尾市 前田紀雄

高齢化新聞すべてメガ文字に
ねじれてる政治が国民から離れ
法案を出しつつ欠席意味不明
テロ警戒芥箱の善さ良く判り
消費税自分の腹は痛めない

八尾市 松葉君江

飽食の陰でガマンが死語となる
一言の挨拶町の潤滑油
衣食住外国産が幅利かす
決断へ背中を押した師の言葉
花の顔読めてよめない人の顔

大阪府 西藤次男坊

そして朝妻の顔見る照れくささ
そして朝妻はニコニコして御座る
そして朝時間をかけて歯を磨く
そして朝新聞読む振り茶をこぼす
そして朝とうとう俺も所帯主

大阪府 高木 道子

刺しにくる藪蚊は針を変えもせず

螢飛ぶ里は暫しのルミナリエ

濃き淡き色集め吹く青い風

声高な訛り飛び交うローカル線

万緑の真っ只中で山椒摘む

大阪府 畑 中 節 子

蝶の来て仕事ふえたりキャベツ畑

オートバイ田の見回りもすいすいと

笑う事ときどきあつて生きる欲

頼らるる事を励みに捻子を巻き

薫風にさそわれ一寸お洒落して

大阪府 若 月 裕 作

基仇に一つ勝ち越し眠れそう

故里のわさびで酒をうまくのみ

メダカの学校水ぬるむ頃始業式

鴨川に白鷺淋しげにひとり

一生をドラマに生きる森光子

神戸市 木 村 忠 義

再手術には弱音吐く強がり屋

仮面要る禁酒禁酒の日が続き

入院でからだいたわること学ぶ

傷あとを氣にして痛みひどくなる

モーツァルト聴くと忘れている痛み

尼崎市 加 川 靖 鬼

男結び出来ぬ男が多過ぎる

体重計覗いて父さん叱られる

サシセソ妻の講師は愛の鞭

内視鏡腹の黒さが丸わかり

虫偏に紛れ込んで蛇がいる

尼崎市 小 池 幸 子

年金を知恵で補う不足分

梅雨に入る田に水満ちて苗を待つ

知恵と技磨き余生に夢描く

慣れぬ杖足と調和がとりにくい

今日無事に明日も何とかなるだろう

尼崎市 藤 岡 り こ

目立ちたがり少し遅れてやって来る

見晴し台海と見紛う澄んだ空

味つけは下手でも味に舌合わせ

好奇心の固まりとなり這い這いし

水琴窟澄んだ響きを一人聞く

加西市 金 川 宣 子

リパウンドぐんぐん上る棒グラフ

風に乗り祭り太鼓へ誘われる

婿殿も酒が目当ての祭り好き

ヘソクリが迷子になって届けられ

競泳の水着に頼る世界新

加東市 岩 本 美緒子

宝塚市 丸 山 孔 一

湯布院和紙忘れ土産の漣三尺
一筆画き茶を入れ八十路急がない
彩があり余白の画帖とみなぎる気
日進月歩枯れても走る筆うれし
田舎町深夜バイクのはっぱ音

篠山市 谷 田 多美子

阪神が負けそうおかしきかみしめる
ホームラン老眼鏡をかけなおす
カーネーション孫が送ってくれました
まだ介護してほしくない万歩計
会いにゆく紫陽花寺の阿弥陀さま

三田市 阪 本 藤 朗

梅雨晴れにさて一仕事蟻の列
西ノ京二菩薩の留守知りながら
ゆるキャラが静かな古都を騒がせる
御仏の腰のひねりが気にかかり
立て膝で観音さまの苦笑い

三田市 福 田 好 文

周到な男戒名既に持ち
天辺を知らぬ男の背が温い
OB会役職順に並ぶ席
補聴器を付けた男の聞かぬ耳
正直に言えば許すと妻迫る

あの人やあああの人や名が出ない
雨ぼつり先の思案を妨げる
浴衣着て一風受ける旅の宿
反対と言うなら出せよ具体策
お返事は明日にしますと言う否定

西宮市 石 野 照 代

孫の笑顔落ち込んだ日の特効薬
気まぐれな大地の動きに無力です
ラムネ玉遠い記憶の夏の音
最後まで意地を通せし唐辛子
バラ漢字何度書いても覚えない

西宮市 藤 本 直

父の日も特に変った事もなく
運命にまた責任を転嫁した
正直と恥ずかしいとは裏表
熱い日だ山がゆれてるはやけてる
この人生仮縫いのまますぎてゆき

三木市 広 瀬 房 江

もやもやと五臓六腑も梅雨の入り
美味いのは嫁手作りの太い寿司
節約にあきあきしてる無駄遣い
半額に釣られて買って着られない
幸せは今年の新茶五月晴

三木市 山口 久子

曾孫とお手々つないで森林浴

梅雨入り蛙も忙し田植時季

一日中タンスの整理衣替え

いきいきと傘寿迎えて亡母しのぶ

我が人生汗と涙の宝もの

兵庫県 永井 かほる

朝の五時しつかり食べて菜園だ

よもぎ摘み一人で行くなど娘に言われ

恒例のよもぎ団子をくばる幸

綿入れをきたそら豆の旬の味

そら豆と淡竹の煮物これぞ旬

奈良市 阿部 茶々

柔らかい声で後から突きささる

あの人の葬儀こっそり手を合わす

急いでも急がなくても日は昇る

出たいより出したい人を選びたい

闘病の友へ祈願の札送る

奈良市 乾 春雄

散歩道人の情けに出会う朝

ちらちらと散りたい時もある造花

夕焼けに押されて帰るカクレンボ

再生の出来る若さがうらやまし

明日もまた生きるつもりの爪を切る

奈良市 岩本 浩二

選手より水着で決まる表彰台

新弟子がチャホヤされる相撲部屋

ダーツの矢的は部長の顔写真

子の進路親の希望で決めさせる

耳掃除しても難聴変らない

奈良市 尾畑 なを江

人間は正直者で嘘つきで

淋しさの裏返しかなしやべりすぎ

愛のムチなら甘んじて受けましょう

この子等の芯の強さもDNA

つれ合いとバランスとれば時にもめ

奈良市 辻内 げんえい

試しにと入った迷路出られない

みっちりと教えあつさり辞められた

眠れぬと秒針の音冴えわたる

針をさす看護師の顔睨み見る

耳にタコ言われてもなお小言言う

生駒市 小西 稔

原油高頭の痛い事ばかり

痛い腹さぐられぬよう目をそらす

痛いところ母がやさしく手をかざす

年毎に艶の出てきた古典芸

ガラス張り裏金までは見えなんだ

大阪市 安藤 なつこ

特大のてるてるぼうず身を縮め

被災地にテントはあるかつゆとなり

中華屋のレジ横大きな募金箱

天然のクーラー初夏の夜時止め

泉大津市 助川 和美

風鈴の心とらぐ夕餉時

食糧難バイオ燃料物価高

おばちゃんにおばちゃん言うて睨まれる

長生きは国に迷惑かけるのか

泉佐野市 稲葉 洋

田に水を引いて蛙のカブリツチオ

無医の里無住寺寂れハイウエー

諦観も達観も居る診療所

もう燃えぬでも幽かだが老いの燠

池田市 多田 契子

輝いた若葉の未来雨続き

運ばれた母の遺伝子皮下脂肪

講演は裏の話に拍手わく

検算をすればするたび違う数

門真市 矢阪 英雄

麺を打つ気力がファン集めてる

塩加減麺に伝えて手を重ね

麺だしの最初の勝負理屈抜き

喜びの客の笑顔がもうけです

河内長野市 木太久 正一

どくだみの花散るまではそのままだ

母べえの吉永小百合似合います

琴欧州優勝品格大丈夫

神戸から義姉たずねくる梅雨晴間

河内長野市 黒岩 靖博

難病と闘い続け古希の春

さすが妻押し売りうまく追い返す

噂のねた良くも悪くも誇張され

スーパーが商店街を駆逐した

堺市 荻野 象山

吉兆と同じことをしてる家

急ぐとも霊柩車には先ゆずる

たしなみが過ぎて欠かせぬ酒となり

正確を期してる振りをする監査

豊中市 源田 啓生

衣替え緑風匂う少女たち

リハビリの汗は効果の他にある

歎異抄未だ悪人になり切れぬ

このまんま大欠伸して終りたい

寝屋川市 小嶋 みさと

ホコ天が一瞬にして地獄絵に

紫陽花は恥じらう如く夢誘う

梅雨晴れ間前途に希望垣間見え

清流に可憐な花が時季告げる

羽曳野市 仲谷 真一

八尾市 脇 俊子

世界新水着で左右されるとは
ペアバンダ一億円は高すぎる
解散の後に来るのは増税か
キムタクが総理大臣夢を見る

羽曳野市 松本 静子

大阪府 小栢 こずえ

紫陽花が雨に叩かれ元気なり
夏やなあそうめん流してみよう
蛙にも意地があるよで鳴きとおす
都会には蛍がいるというホテル

枚方市 二宮 紫鳳

リハビリの夫の横顔梅雨しぐれ
紫陽花が咲いて我が家も梅雨に入る
リハビリの病む手に優し初夏の風
梅雨空へ散歩をしぶる万歩計

藤井寺市 俣野 登志子

義理の仲棘ある言葉逃さない
席譲られ気持ち複雑背な伸ばす
同い年同じヘマ見てはつとする
添うてみて悪いところや悪いところ

八尾市 中島 春江

派手な傘梅雨を明るく老いてなお
夏帽子大きくゆれて二歳の子
ほどほどの暮しの夕餉初鯉
目覚めては無料の空気感謝して

強がりを言って淋しさ隅に置く

波風があつて夫婦も温暖化

悔いはせぬ精一杯の日の重ね

高齢者括弧の中にある席次

頼まれもせん事しては疲れはて

愚痴捨て場所が無くなる姉が逝く

初取りは感激多取うとまれる

人のふり自分のふりも確かめる

大阪府 坂口 公子

羞ずかしくてどうにも止らない笑い

忙しくて梅雨を越させた櫃の米

負けん気でなくて何でもしたい性

年金が余ってしまう侘びしいね

大阪府 西川 冷子

手に汗しバレー観戦山椒焦げ

のらに餌隠れて運ぶ輩居る

ひたすらに泳いだ証し力瘤

七十坂大事故越えてなお元気

神戸市 武田 恵美子

今日の日は仲よしさんも明日しれず

乳児ぬけカメラむけたらポーズ取る

九十歳七十の娘と喧嘩する

メタボ入り歩き走ってケーキやめ

神戸市 山崎 武彦

加東市 黒崎 美紗子

年金を軽く見たつけ大敗し
一段と格差広げている政治
手を繋ぎ孫が主役の散歩道
老木も力のかぎり花咲かす

明石市 糺谷 和郎

メタボから追いかけてられてベタル漕ぐ
ボケットに入れて忘れたままの夢
言い訳を半分残しタバコ吸う

過ぎ去りし日々をセピアに染める駅

尼崎市 河津 正治

新緑を夢見木枯し耐えた日々
期待背に健気に泳ぐ鯉のぼり
音階を求めて忙しサキソフォン
大人びて直すしぐさの乱れ髪

尼崎市 桑原 東園

女傘くるくる回る誰を待つ
声援も空し敗戦菌囓みする
ど忘れが増えて味わうやるせなさ
切り抜きをしても読まずにゴミとなる

加東市 安達 厚

人が減りベットが増える経済国
どこでもいいさすってくれと言った亡母
姉逝きとおふくろの味一つ消え
兄弟の不幸故郷遠くする

雨毎に伸びる草との勝負です
老人会ボランティアです宮掃除
朝の散歩緑いっぱい深呼吸吸
ひとり居へ配慮の催し有難い

三田市 辻 開子

記念日に孫から届く愛の文

メタボ腹もみじの手下でなりたいこ
りハビリの進歩が見えて一歩出る
あのそのと娘と孫の名でてこない

奈良市 田中 賢治

政治家へ文句だけ言う縄のれん
禁煙でソフトクリーム孫と舐め
懐かしい故人総出で時代劇
サミットも軍事大国意のままに

橋本市 石田 隆彦

達筆が過ぎて読めない石碑文字
平凡な記事で埋めたい新聞紙
国民の味方育てる重い票
無人駅ぼんやり客を待っている

鳥取市 谷岡 清子

青い鳥見とうて眼鏡さらにする
平凡に暮せる日々に感謝する
欲三つ思案ばかりでさだまらず
百歳を夢見る老いの薄化粧

鳥取市 津村 律子

春野菜今日も賑わう道の駅
男泣きバレー北京へ繋がった
魔法の水着北京の記録期待する
寝苦しい布団が足に絡みつく

境港市 遠藤 那珂子

世渡りが下手で転んでばかりいる
歌聴けばつらい気持も癒される
特売日なぜか財布がさわざだす
小魚と泳いだ川が戻らない

境港市 中井 虎尾

癌よ聞け俺が死んだら君も死ぬ
生きるため見ざる聞かざる口チャック
にらみ合う自民 民主は民を無視
青空の彼方は無限大宇宙

米子市 小塩 智加恵

日よけにとゴーヤ三本よくのびる
メタボでも強い肝臓 飲んでいる
このところぐっすり眠り夢楽し
曾孫を抱くまで生きる意地を持つ

米子市 田村 周子

成人式の孫に囲まれ祝酒
庭さきの草花いじり癒される
母の日はいつの間にやらババの日に
八十路前同期生会なお元気

米子市 見山 温子

娘の帰省母はうれしい農休日
目の泳ぐ嘘も見ぬ振り妻の意地
雨の中歩幅を合わせ相合傘
山菜の話題がつきぬ立話

鳥取県 飯野 菖子

だんだんと化石になっていく弱さ
針の穴ずばり通らぬ糸通し
杉花粉戸も開けられず春の風
心の戸開けて世界を見てみよう

鳥取県 田口 清帆

まだ恋もしたいに後期高齢者
後期医療三途の川に案内か
賞味期限切れた話で笑い合う
美容院正直なのは鏡だけ

鳥取県 橋谷 静江

愛犬に元気を貰う散歩道
雨上がり新鮮野菜の出来上がり
朝寝坊したくて雨を待っている
思春期がもつともらしい事を言う

松江市 相見 柳歩

半分を過ぎて仏に巡り逢う
本物の君子は敵を作らない
夢ひとつ愛を与えることだけで
守護霊に褒められるよう生きてみる

松江市 柏井 日出子

ブランドの話聞き役する気楽
孤独にはさせてもらえぬ誰か来る
今が旬肌出しルック許す夏
善行はいわずもわれがいやされる

雲南市 菅田 かつ子

粽巻くあちらこちらに上げたくて
ベテランの笑顔はいつも温かい
マンネリの中の夫は空気です
ライバルよさっさと先に逝くでない

福岡県 林 さだき

汚れ役私もこなしてみたいもの
新米の添乗員と能登の旅
家出した猫には猫の訳がある
旧友を訪ねて嬉し花の家

唐津市 北村 松風

ばってんが付き九州の顔になる
九州弁喧嘩じゃないよ荒い語気
マンションの段々畑プランター
肥後守昔筆箱必需品

栃木市 岡野 すみれ

縁談がまとまり詩集焼き捨てる
やさしさを愛と思うはまだ早い
ふるさとの山河出世を待っている
早々と立ち去る場所とよみにけり

一万で買った土地の値百倍に
親が決め貰った妻と五十年
細ほそと暮らした甲斐が老いて幸
感動の本に頭を刺激され

草加市 飯土井 健翁

第18回「太平記の里」 全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市川柳協会他
後援 市教育委員会・社全日本川柳協会他
日時 11月16日(日)9時30分 締切11時30分
会場 太田市福祉会館(太田市浜町2-7)

第一部(当日参加の部)

課題と選者(各題2句)

「祝」今川 乱魚・「北」木崎 栄昇・「関わる」

荻原 柳絮・「東」西潟賢一郎・「横」田中寿々夢

「断わる」川俣 秀夫・「開く」竹本瓢太郎

特別課題(1句) 「しっかり」遠藤しげる

第二部(郵送での参加者)

宿題 「執着」 選者 大野 風柳・西来 みわ
河内 天笑・磯野いさむ・本田 智彦
小松原爽介・吉岡 龍城

応募方法 2句詠、参加費1000円と郵送

締切 9月26日(金) 消印有効 前夜祭あり

投句・連絡先 〒373-0817 太田市飯塚町1549-2

「太平記の里」川柳大会係 TEL 0276-48-6280

路郎語録

川柳の畑にはまだまだ未墾の地がのこされてゐます。
お互ひに一鍬を肩にして出掛けませう。

川柳雑誌第五号(大正13年6月発行)

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

人生の雑音

陳情に代表一人腰をかけ

世も末か神様さへも左り前

巻脚絆巻いて貰った顔もせず

私達と複数で云う愛しよう

草の根よ僕も聞う草の根よ

玉碎す逸話なんどはなかりしが

良心があつて本日休業し

ラジオまた英語で何か云うてはる

あの博士今度は民主主義を売り

買出しと知ってか牛は尻を向け

聖徳太子之像

一ト握りああ人生は和に如かず

搾取されてゐた若き日をなつかしむ

三合になれば胃病をかこつらん

人柄が焼け出されてても足袋を履き

古くとも僕には仁義禮智信

門出の日牛へも言葉かけてやり

還暦

六十一まだ情熱は燃えに燃え

芳紀まさに六十一をほほえまむ

ワイシヤツもよれよれ左派の左派に居て

無力な男みみずのやうにちぢかんだ

失禮々々君の奥さんだったのか

くすぐつたいよ紙入れなんかあづけられ

嫁ですとひきあはされる松の内

ハガキすらよこさなくなり寒いこと

愛染帖

新家 完司 選

弘前市 高瀬 霜石
お月さまどうやらわたし迷子です

(評) 私たちはどこから来たのか。何をするためにここにいるのか。そして、どこへ行くのか。分かっている人など、一人もない。

海南市 小谷 小雪
ほどの美人になれる夏帽子

(評) とびきりの別嬪になるのは無理だが、ちよっと振り向いてもらえる程度の存在感なら演出できる、若々しく爽やかな夏帽子。

唐津市 樋口 輝夫
お開きと聞いて注ぎ合う残り酒

(評) 怪気炎に水を注す「宴もたけなわではございますが……」という幹事の挨拶。酒を残して席を立てば、酒神パッカスに叱られる。

香南市 桑名 孝雄
後期でも末期でもよいまだ飲める

(評) 気の利かない役人が考えた無礼な呼称など、「フン」と鼻先であしらって盃を傾ける。酒が飲める間は「元氣高齢者」である。

八尾市 高杉 千歩
薄味になって欠かせぬ土生妻

(評) 「塩分控え目の薄味」は大切だが、食べる楽しみまで薄れがち。生姜は味付けのみならず、身体に良い成分をいっぱい持っている。

松江市 津川 紫晃
人間をいやいや乗せている地球

(評) 一三百年ほど前までは、やさしい生き物であった人間。だが、近代の発明品すべて、地球を痛めつけ、動植物を追いつめている。

和歌山県 森下よりこ
クラス会休めばあちこちから電話

(評) ありがたいことである。旧友はかけがえのない財産。クラス会が続いているのは、面倒な仕事を厭わない世話係のおかげ。

高槻市 傍島 克治
気になるほど誰もあなたを見ていない

(評) そう、平凡な私やあなたに注意を払う人などいない。だから、肩の力を抜いて、もっとと気楽に、もっとと自由に生きて行こう。

弘前市 今 愁女
「だれでもよい」流行り言葉になりそうだ

(評) 「誰でもよかった。人を殺したかった」という言葉の恐ろしさ。底知れぬ憎しみと虚無感は、何が原因で、どこから生じたのか？

篠山市 円増 純子
突然の孫の死かわる術もなく
星の王子に会えたでしょうか孫の星

池田市 上嶋 幸雀
まだ前期国に頼らぬジム通い

後期へと青汁ちゃんと飲まされる
自給率対策庭のナス胡瓜

島取市 有沢せつ子
すべらない音の静かな靴を買う
昼のバスはばおばさんとおばあちゃん

三田市 堀 正和
天国へ行けるつもりの人ばかり
招待券最優先のスケジュール

枚方市 海老池 洋
白内障治し若葉が目にしみる
伸びてない爪まで切って雨の午後

西予市 黒田 茂代
濁水が続いて句帳埋まらない
子思いの母のころにまだ遠し

和歌山市 喜田 准一
金のない時はぶらぶら散歩する
片手間で作った仕事の出来がよい

藤井寺市 鴨谷瑞美子
生真面目な影に休みを取らせよう
呼び捨てにされると今もときめきぬ

大阪市 西藤次男坊
生き様を引き締めさせるガン一つ
二つ目のガンが本気になれると言ふ

鳥取市 山宮 愛恵
税金の恩恵いつも忘れられ
旅先の写真いなくなってきた

弘前市 高橋 岳水
冷めてから分かる銘柄米の味

鳥取県 石谷美恵子
趣味趣味と少しあなたは遊び過ぎ

大阪市 岩崎 公誠
素の自分曖昧模糊で芯がない

堺市 志田 千代
ゆとりある暮らしボタンはとれたまま

鳥取市 吉田 弘子
お互いにイエローカード付きの杖

高知市 松尾 憲子
来客がたまにはないと片付かぬ

京都市 高島 啓子
恋しいと思えば恋し元夫

京都市 高島 啓子
気の強い人長生きと医者が言う

大阪府 小谷 集一
一個買いつける玉ネギもジャガイモも

百葉の長と信じてワンカップ
薬飲む狭間で三度飯を食う

八王子市 播本 充子
殿中でござるぞケータイはオフに

奈良市 矢野 良一
広辞苑愛用してる力瘤

今至福母妻子孫皆元氣
銀座通り今は名ばかり過疎の町

寝屋川市 籠島 恵子
本物になってしまったなまけ病

吹田市 早泉 早人
別々に同じ番組見る夫婦

豊中市 松尾美智代
三角の底辺にいる安堵感

宇都市 平田 実男
だんだんと皺の一つになるエクボ

鳥取市 西川 和子
関節の痛みも癒す美人の湯

奈良市 尾畑なを江
良薬と思う一つに誉め言葉

西宮市 片山 忠
医者と聞くだけで金持だと思ふ

和歌山市 木本 朱夏
運のいい人に買われた宝くじ

国籍を問われうつむく茄子カボチャ
くだおれ太郎が旅に出るという

堺市 羽田野洋介
笑顔しか持ち合わせない思返し

育てる気なくてよそから引っこ抜く
藤井寺市 高田美代子

いろんなものにぶつかりながら生きている
素麺のつゆに少々凝ってます

海南市 三宅 保州
三丁目だけの夕陽でないけれど

実印を一度も捺したことがない
神戸市 田中 章子

おとなりの仕事は知らぬおつき合
川柳は朝に作ると決めている

鳥取市 岸本 宏章
しゃぼん玉のような地球が壊れそう

篠山市 二階 幸子
血管をいろんな薬旅をする

豊中市 谷川 勇治
少年の計画にない赤信号

米子市 林 瑞枝
カムフラージュ肌の疲れに赤を着て

京都市 都倉 求芽
亡母さんはいまでも返事してくれる

加東市 中上千代子
ありがとうよりおおきにが言いやすい

十葉の花雨の日も嫌がらず
神戸市 山崎 武彦

勝手口そつと開いてお裾分け
卓袱台の疵を撫でると亡父の貌

和歌山市 古久保和子
絵はがきに丸いポストがよく似合う

裾直し脚はたしかに長くない
鈴木いさお

KYと言われその意味解らない
願わくはポックリ逝かん喜寿の頃

鳥取市 福西 茶子
まだ六十路茶髪ジーパン翻す

逆転のチャンスは息を止めて待つ
弘前市 福士 慕情

雨降ればふつたで騒ぐ川がある
酒タバコ止めて保障のない命

櫻原市 居谷真理子
荒れはてた顔だがこれしかない今は
千年の書より私の物語

大阪市 谷口 義

無駄だとは思いたくない昼の月
父の顔忘れてしまいそうになる

堺市 村上 玄也

道路だけ立派になって国滅ぶ
俺らうわとしらうとレジの前

鳥取市 倉益 一瑠

鶴亀よあんたも後期高齢か
年金日だけは右肩上げている

高槻市 左右田泰雄

ちぎれ雲眺めのんびり露天風呂
近道と思つた路地が行き止まり

堺市 山本 半銭

しみの手を庇うて夏と向かい合う
御自分の頑固お気付きにはならず

尼崎市 春城 年代

熱砂の誓いなど思い出は遠すぎる
寝る前の開放感ほ格別だ

岸和田市 井伊 東吉

冬眠の水虫野郎目を覚ます
十葉の繁殖力にギブアップ

豊中市 吉田あずさ

料理より皿で値打ちを知らされる
せめてもの救い補欠に選ばれる

高槻市 佐甲 昭一

藤井寺市 太田扶美代
ぶつけても蹴つても癒されぬ孤独
痛いところをよく知つているチラン

米子市 政岡日枝子

加齢ですどの医者からも言われたす
村の道ここまでできたか下水道

寝屋川市 太田とし子

右左前も後も杖ばかり

安米市 原 煩悩児

パチンコの美女が煙草を吸い過ぎる
もういいかいまだだよつて生きている

大阪市 古今堂蕉子

その昔下宿屋という擬似家族

鳥取県 山下 節子

おしゃべりを止めさせてたくて飽くばる
自分史のファイルはいまだ整理中

河内長野市 黒岩 靖博

頂上にたどり着いたらワンカップ
人生のしんどい時は飲んで寝る

河内長野市 坂上 淳司

望郷の心を集め古稀の酒
一献をこよなく愛す指の先

高槻市 黒田 能子

松江市 安食 友子

岩出市 村中 悦男

大和郡山市 坊農 柳弘
建前も本音も混せてうまい酒
前途有望いわれるほどに若くない

尼崎市 長浜 美籠

ワイン風呂ほんとにワインなのかしら
花づくりのように行かない人づくり

堺市 加島 由一

若い娘の拍手で走る痛む膝
鍋みがき夫の特技になつて

大阪市 板東 倫子

乱獲と美食地球を狭くする
目も耳も嗅覚までも草臥れる

鳥取県 竹信 照彦

平凡に生きて肩が凝つてくる
納得のいくまで鳴いている蛙

西宮市 牧測富喜子

死後はみな捨てられるのか本の山
欲の皮突つ張つてるが増える数

鳥取県 小池 幸子

老人用の献立ちちゃんと大家族
ふる里にたしなめられる急ぎ足

和歌山市 横山 捷也

福岡県 林 さだき

和歌山市 福本 英子

美作市 小林 妻子

八王子市 川名 洋子

吹田市 大谷 篤子
 治癒力のあるときめきを抱いている
 樺原市 安土 理恵
 外国へ行く前に行く歯医者さん
 豊中市 水野 黒兎
 おでん匂うそうか明日から妻は旅
 泉佐野市 備後三代子
 今更にピリツと母の木の芽和え
 高知県 いの 静草
 妻にまだ言わずにおこう軋み音
 唐津市 市丸 晴翠
 一つ屋根前期後期の共白髪
 鳥取市 岸本 孝子
 後期高齢怒る元気がまだあった
 高槻市 片山かずお
 ありがたく欠伸噛みしめ聞く法話
 八尾市 生嶋ますみ
 悪いとこばかり継いでる子供達
 高槻市 乙倉 武史
 吠える犬飼主までも憎くなる
 加西市 金川 宣子
 パスポート最後さいごと使われる
 吹田市 太田 昭
 冥土まで何歩あるかや歩数計
 豊中市 安藤寿美子
 東山魁夷は画集見るばかり
 松江市 三島 湊丘
 残高と余命くらべる預金帳

鳥取県 細田 裕花
 再生紙どのあたりまで古紙ですか
 長岡京市 山田 葉子
 千年紀雅の世界しのばれる
 亀岡市 井上 森生
 王朝の絵巻に牛車よく似合う
 大阪府 吉内タカ子
 老いの恋おもい切れずに投句する
 和泉市 西岡 洛辭
 肩書きのとれた窓際空気澄み
 豊中市 櫻谷 郁子
 廃校の影長くして老いを知る
 鳥取市 中宇地秀四
 八十路坂おにぎり三つ平らげる
 大阪府 小栢こずえ
 呼び止めてくれる人あるありがたさ
 大洲市 中居 善信
 穀物高騰休耕田が笑ってる
 東かがわ市 木村あきら
 転作田グラジオラスが真つ盛り
 大阪府 米澤 俣子
 近頃とみに老化地球もワタクシも
 羽曳野市 永田 章司
 支出度に今日も待たせる古女房
 紀の川市 宇野 幹子
 反対の旗は死角で振っている
 黒石市 相馬 一花
 人だけは陳列しない見本市

岸和田市 土橋 房枝
 嫁守る息子との距離感じとる
 鳥取市 田村 邦昭
 年金の支給日孫が知っている
 米子市 青戸 田鶴
 嫁ぐ孫へ代理の母で気がもめる
 三田市 福田 好文
 ハイハイの二度目のハイは嫌のハイ
 松江市 松浦登志子
 初めての年金遣ういや貯める
 大阪府 澤田 和重
 ご予算はと売り子手の内ききにくる
 大洲市 花岡 順子
 嫁に來た家が私の終の宿
 堺市 近藤 治子
 分譲地人待ち顔で旗なびく
 八尾市 田邊 浩三
 着もしない紺の背広が捨てられぬ
 大阪府 大川 桃花
 結局は肉まん買って家で食べ
 篠山市 遠山 可住
 一枚の表彰状を本棚に
 唐津市 井上 勝視
 限りなく嘘に近づくマニフェスト
 鳥取市 永原 昌鼓
 人間の英知地球を睨くする
 和歌山市 松尾 和香
 終章の森へそろそろ影法師

誹風柳多留一篇研究 36

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清博美

259 代みやくが来たていまさか引こませ

山口 いまさか【今坂】は、「いまさか」は

「みまさか（美作）」の転。餡餅の名。今坂餅の略。長円形の紅白の餡餅。（『角川古語』）

『俚言集覧』によれば、「食物。楕円形の餡餅。紅白黄緑の色あり」とある。だいまやく【代

脈】は、代診。多く見習生が師に代わって診察するにいう。（『江戸語の辞典』）

医者の往診があると当然茶菓の用意をする
が、何かの都合でまだ半人前の代脈が来るこ
とがある。患者の家も代脈では多寡をくくつ
て、「お茶だけでいい」などと用意したいま
さか餅を引つ込めるのである。

代脈へさもむだらしく舌を見せ 六六九

全員 賛。

代脈がちと見直した晩に死二

拾三六

260 大雛のおもてゝ小雛しやこをうり

小栗 「大雛」「小雛」の意味するところが
分からず全くの不明句。ご教授をお願いしま
す。

山田 何かの見立てであろうが皆目不明。

増田 わかりません。雛市の景を考えてみま
した。大雛は雛店、おもては通り、そこで漁
村の少女が茹でシヤコのアルバイトをしてい
る。シヤコはおやつがわりに食べます。いま
ひとつ、大雛は、正規の雛店、小雛は通りに
出来る飯説の小店、しかし雛魚を売りがすつ
きりしない。

山口 わかりません。もし前説のように十軒
店雛市の景とれば、シヤコまたは雛魚を売
っているのは夫婦ものではないでしょうか。
本物の雛に見立ててのことです。『絵本江戸
風俗往来』などによれば、雛の市に雛飾り以
外の露天も出ていたようすが。

261 めしづかつしやいとかけかね湯番懸

小栗 主付くは、湯屋用語。めいめいが自分
の持ち物を持つ。（『江』）湯番は、湯屋男の
汎称。湯の加減をし、浴客のために上り湯を
汲み、またはその垢掻きなどをした（『辞集』）。

湯屋で、脱衣所荒しが発生したので、湯番
が入湯客に「めいめい自分の持ち物を持つて
下さい」と声をかけて、出入口の掛金を掛け
ている。これから、犯人捜しをするのである。
それぞれの持ち主がはつきりすると、他人の
着物を着て帰った奴の着物が残ったりして、
手掛かりになることがあるのだらう。

主シつかつしやいと湯番ハ戸をメル

安元松6

みんな主づかせて見れハぼろ斗り

安六五会

みんな主シつくとはんでんあまるなり

安七梅3

みんなぬしつくとわらぞうりがあまり

天六和3

全員 賛。

262 一トわらい笑ッてめしをかりて行

小栗 何か予定外のことがあつて、飯が足りなくなつたので隣へ借りに来たときの光景。「それがさあ、亭主が友達を二人も連れて来たもんだから、足りなくなつちまつて。困つた宿六さあね」などと女房同士がひとしきり大笑いした後、飯を借りていく。長屋の日常生活を詠んだものだろう。

あいにくと言イ〜飯を借りに来ル

明元信4

いくたてをいひ〜めしをかりてくる

三三〇

いなか、ら今来ましたとめしをかり

天五満2

全員 賛。

263 三ツふとん親父ハかわぬ様子なり

小栗 三蒲団は、妓楼における三枚重ねの蒲団のこと。皆花魁が、馴染みの大尽から贈られた(実は無心した)ものであった(「辞集」)。

よく分らない。「親父」とあるから「息子」との対比とすると、道楽息子は豪勢に遊んで三蒲団を買つてやつたりするが、息子より金の有り難みの分かつている親父の方は、同じ遊ぶのでも一分女郎くらいで、三蒲団を買つてやるようなことにはならないといふことか。

二〇一

全員 賛。

265 江戸へあいばんかとつばなうりにいひ

小栗 茅花売りは、江戸郊外の子供達が、野掛けに出てきた人達などに、自らが摘んだ茅花を小遣い銭稼ぎに売るのが、これを茅花売りといった。

つばなうりよく〜見れハ女の子

明元礼2

生酔来るよとにげるつばなうり 明八智5

「あいばんか」は、『川柳年中行事』に

「歩ばぬか、行かぬかの意」と頭注あるを頂戴する。田舎言葉の表現であらう(小生の岐阜の田舎では、今でも「あよばんか」と言う)。

野掛けに行つたとき、つばな売りの子に

「どうだい、江戸へ一緒にあいばんかい」と

田舎言葉をなぞつて言つて、からかつている様子であらう。

こわ色でつばなをねぎする野掛道 四六3

近カ道を聞イてつばなを買て遣り

明元礼2

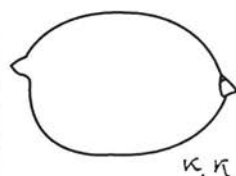
全員 賛。

拾七28

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「粒」 鈴木公弘選

番付は豆粒出世待つ故郷
一粒種の欠伸みんなで覗き込み
ひと粒の種からドラマ走り出す
小粒だがびりりと利かす人の味
六人の保護者一粒種に賭け
一粒のロマンが生きる大賀ハス
身上はフットワークという小粒
まだ灯る米粒ほどの恋心
一粒の意見は握りつぶされる
粒よりのアメリカ産のさくらんぼ
粒だけは揃えているが核がない
粒ぞろい否とんぐりが並ぶだけ
粒選って他人にあげるおばあちゃん
哀しいねめし粒こぼす母重子
フライパンゴマ粒跳ねる意地を見せ
恋をして顔のつぶつぶ消えました

可見市	板山まみ子
東京都	井上つよし
大阪府	榎本日の出
雲南市	毛利 幸
神戸市	伊勢田 毅
和歌山市	堀 富美子
松山市	宮尾みのり
鳥取市	福西 茶子
府中市	藤岡ヒデコ
堺市	加島 由一
札幌市	小沢 淳
大阪市	坂 裕之
寝屋川市	平松かすみ
羽曳野市	吉川 寿美
東かがわ市	木村あきら
奈良県	渡辺 富子

「粒」 西口いわゑ選

粒選りのヒト科が暮らす宇宙基地
さり気なく小粒な善を積んでいる
番付は豆粒出世待つ故郷
一粒も残さず食べた良き時代
生き残るため一粒の嘘をのむ
大粒の涙多くを嘆かない
粒よりの使い回しが気に入らぬ
物語の始まり粒の中にあり
政治家が小粒になった世襲制
種一粒まるで手品師紅い花
面倒な小粒を捨ててからの乱
泡粒が夢に膨らむシャボン玉
砂どうしみんな仲間でみな他人
リハビリの箸逃げ回る豆の粒
一粒をこぼすと母を思い出す
若者は光の粒となつて夏

八王子市	播本 充子
和歌山市	福井 菜摘
可見市	板山まみ子
三田市	久保田千代
福岡県	林 さたき
大和高田市	鍛原 千里
西宮市	牧瀬富喜子
京都市	榎本 宏子
羽曳野市	永田 章司
尼崎市	藤岡 りこ
米子市	白根 ふみ
姫路市	古川 奮水
鳥取市	岸本 宏章
尼崎市	軸丸 勝巳
大阪市	田浦 實
豊中市	水野 黒兎

一粒の米に先祖の恵みあり
 粒よりの頭脳が揃うエンデバー
 北京行き切符はみんな粒揃い
 昔より小粒に見える金バッジ
 粒揃いばかりで漏れるエネルギー
 粒よりの品を集めて売れ残る
 粒ほどの石が気になる靴の中
 粒揃いなのに出来ますトッピリ
 大夕日豆粒ほどの苦を笑う
 雨粒が葉っぱの上を駆け回る
 大切が染みついているごはん粒
 砂どうしみんな仲間でみな他人
 一粒の命を守るため間引く
 一粒の芥子の種から起こる乱
 ひと粒の鮎玉しゃぶり恋語る
 砂にまみれて童にかえる土踏ます
 ひと粒の葉と話すいのち
 更年期米粒ほどが許せない
 一粒の慈雨一粒の米になる

秀句

軸吟

団塊の一粒ずつが消えてゆく

生駒市	小西	稔
豊中市	山門	タミ
鳥取市	吉田	弘子
唐津市	井上	勝視
西宮市	片山	忠
富田林市	中井	アキ
河内長野市	坂上	淳司
大阪市	古今堂蕉子	
松江市	三島	淞丘
尼崎市	小池	幸子
大阪市	神夏磯典子	
鳥取市	岸本	宏章
海田市	三宅	保州
寝屋川市	森	茜
青森県	松山	芳生
鳥取県	石合美恵子	
枚方市	海老池	洋
米子市	白根	ふみ
弘前市	斉藤	苅
和歌山市	福井	菜摘
神戸市	田中	章子
美作市	小林	妻子

大夕日豆粒ほどの苦を笑う
 ITの世にそろばんの珠見直され
 花嫁の涙の粒は輝いて
 ゴマ粒のような棘でも眠らせぬ
 孫たちはみな粒ぞろい青葉風
 ありふれた顔で苺の粒ぞろい
 一粒ずつ思い出のあるサクランボ
 粒よりのゴマはつきりと白と黒
 掌の中一粒種も反抗期
 一粒の真珠女の吐息聞く
 粒選りの頭脳常識には欠ける
 雨粒のメロデー妙に身に沁みる
 ひと粒の葉と話すいのち
 大粒になれば山椒の気が抜ける
 粒揃いに椅子取りゲーム待つている
 粒選りの中で私は背伸びする
 政治家に山椒送る夢の中
 粒揃いみな哲学を持っている
 大粒の涙が似合う頑固者

秀句

軸吟

松江市	三島	淞丘
堺市	源田	八千代
豊中市	神野	宇乃子
大阪市	森田	明子
京都市	都倉	求芽
大阪府	高木	道子
豊中市	谷川	勇治
橿原市	安土	理恵
三田市	北野	哲男
西宮市	亀岡	哲子
大洲市	花岡	順子
海田市	小谷	小雪
枚方市	海老池	洋
松山市	宮尾	みのり
神戸市	山口	光久
吹田市	太田	昭
八王子市	川名	洋子
松原市	玉置	重人
豊中市	藤井	則彦
橿原市	居谷	真理子
大阪市	谷口	義
海田市	三宅	保州

カラフル

齊藤 功選



アジサイ寺をカラフルにしている梅雨
ふるさとの園カラフルな少年期
娘の帰る日はカラフルになるサラダ
食べるのが惜しい多彩な京料理
七色の吐息に揺れるイヤリング
絵手紙がいろんな色で話しかけ
百歳へカラフルな夢夫婦箸
迷います水着売場は花ざかり
カラフルな海水帽の水しぶき
カラフルな夢を見ていた少年期
彩とりどりわたしを癒す花の庭
カラフルに自己主張する花畑
絵日傘で田圃の水見おばあさん
捨てるには惜しくツル折る包装紙
カラフルに夏遊ばせるサラダ鉢
カラフルな爪で抹茶を飲みにくる
特殊技能だろかカラフルな人脈
カラフルな言葉でつづるマニフェスト
カラフルにはなりすぎ日本色消える
カラフルは避ける八月十五日
五感全開さくらの鼓動吸いつくす
カラフルな紙風船のひとり旅

善信 弥生 茂代 幸雀 宣子 花匠 洋子 幸子 勇治 徑子 倫子 妻子 百合 典子 茶子 のり子 和郎 シマ子 扶美代 芳生 愛論

カラフルな意見出てくる子供会
カラフルな若さ街から梅雨が明け
カラフルな傘が奏でる登下校
問うたとて過去は明かさぬ万華鏡
カラフルなメイクで消してゆく個性
万国旗目は日の丸を追っている
カラフルな言葉で誘うベレー帽
花時計ときの経つのを忘れさせ
花エプロンもう一品を追加する
カラフルにトマト仕上げる陽の処方
カラフルに米寿のデビュー致します
カラフルな浴衣で市長盆踊り
カラフルになった子の絵にホッとする
カラフルなドレスで踊るフラメンコ
カラフルな錠剤どれが効いたやら
佳
七回の裏風船が舞い上がる
カラフルが黒いドレスに負けました
カラフルな人生でした泣き笑い
恋絵巻千年前も華麗なる
天寿全う柩の上の赤い薔薇
人
ホスピスのロビーに続くモネの庭
地
はなやかな源氏の恋に酔い痴れる
天
締め括るピエロは舞台飾り切る
軸
青年Uターン案山子もカラフルに

日枝子 可住 絹子 愁女 あやめ 古拙 遠野 雅明 ヒサ子 道子 順風 四郎 一風 一花 岳水 次根 みつこ 慕情 修 霜石 充子 富子 相馬銀波

折る

竹治ちかし選



ほとけ様我が家に咲いた牡丹です
三世代折り合っている知恵と愛
一枝の花がご縁のお付き合ひ
萎えた手で折る不揃いの千羽鶴
産声に頑固な父も折れている
折り入ってお願ひがある酒を注ぐ
八十の指が小さな鶴を折る
折角のスキー骨折して帰り
折り合ひがつかず酔えない酒になり
ぶきつちよな手で折鶴が一つ出来
千羽目の鶴が折れずに少女逝く
そこからの折り合ひつける年の功
折り合ひは夫に合わせるだけのこと
カフト折る愚かな戦せぬように
新聞を折って今日の主婦終る
雲囲気を見定め折れて出る憎さ
千羽鶴自分のために折っておく
どう折って見ても見本と違う出来
元通り折りて目の合わせ包み紙
チョコレート食べて銀紙船になる
助手席で右折左折の指示をする
咲く花の明日へ不用の枝を折る

茶子 キヨミ 婦美子 正和 正雄 千歩 重人 直 邁行 高明 准一 章子 充子 康吉 末野 遠二 和一 徳子 洛醉

鉛筆が何度も折れる焦ってる

挫折したことがプラスになっている

見通しが良すぎて折れてみたくなる

折半という掌を打って朝が明け

山折り谷折り私の家が建つ

折れ合えば案外うまくゆく世間

長い脚ちよつとたんで下さいな

列島に四季折々の詩がある

家庭円満男がいつも折れている

お願いをする日の腰は深く折る

折れそう心に支柱添えておく

駅前を折れると昭和の風に会う

子育てへ折り目正しい二十四時

折り返し地点を過ぎて迷う道

我を折ると一気に海が凪いでくる

佳

父さんが折れるとみんな読んでいる

折り合って一つの屋根に三世代

兄ちゃん兄ちゃんに折れてくれ

世渡りへ鬼一匹を折り畳む

指折って折って一つの返事まつ

人

悔しさを二つに折ってバネにする

地

家計簿の中に一日を折りたたむ

天

鉛筆が折れて答えが遠くなる

軸

折れ線のグラフが知っている涙

玄也

扶美代

明子

可住

ゆめ

幹子

みつこ

絹子

茂代

岳水

ヒサ子

武庫坊

あずま

陽子

次根

修

としお

敏子

朝子

みね

霜石

日枝子

須磨活恵

場所

松本よしえ選



雨さんざんざん初めて逢った場所

五分前私語さわざわと指定席

会長の横が空いてる罰ゲーム

左遷地で転勤祝い部下二人

掃る場所忘れた午後の雨蛙

末席でいつも気楽にしています

病院とスパーあれば良い居場所

どこまでも平ら匿う場所がない

ポナス日父の居場所があけてある

場所を踏む努力の果てに夢がある

メルにはいつもの場所で待つとだけ

出る所へ出ればいつでもしゃんとする

溶け込んでゆきたい場所に席がない

思い出の場所は誰にも話さない

どの場所に居てもあなたが光ってる

嫁った娘がお客の顔で座る居間

そこは駄目彼女のためにあけている

場所柄はわきまてます座れます

同居して姑さんここが居場所です

上席を空けて待ちます天下り

参観日場所知る人と知らぬ人

再会の涙場所柄考えず

(花)順子

徑子

重人

(奥)五月

英子

(川)洋子

幸子

ふみ

満子

圭一郎

あづま

洋介

菜摘

郁子

絹子

ばっは

秀四

章久

(矢)五月

章司

勝視

典子

難民へ安住の場はないものか

いい場所を見付け居るボヘミアン

母の在所ペンペン草が咲いていた

屋根裏が宇宙へ続くほくの場所

老いの灯が揺れる二人の子は異国

指切りの場所に佇む影法師

廃屋の実家に残す本籍地

ライバルにうつかり居場所告げたミス

老いの身に安らぎの場所無い都会

戦場の跡に勿忘草が咲く

この場所はあなたの星がよく見える

あたたかい場所へ孤独を捨てにゆく

少年が秘密の場所に宝物

初めての場所でぐらぐらする自信

スピードの出易い場所でネズミ捕り

佳

里帰り父の居場所に兄がいる

あの人の場所やと誰も座らない

捨てられた場所に根を張る草である

誰でもよいナイフが場所を選ばない

神様の死角で賞も罰もない

人

にんげんは地球以外に場所はない

地

翔びなさいあなたの椅子は空けておく

天

コンパスの支点に眠る鶴彬

軸

後期医療どころ安まる場所がない

のり子

妻代

黒兔

蜂朗

一知

遠野

公誠

倫子

幸雀

(若)玲子

朝子

愁女

裕花

淳司

泰子

千歩

岳水

弥生

浜丘

一粋

充子

高瀬霜石

原 父の形見袋の中身は眼鏡だけ
 添 父の形見の眼鏡が私だけに合う
 原 老眼をかけても糸が通らない
 添 老眼鏡掛けてチャレンジ糸通し
 原 いい話無いものですね虫メガネ
 添 いい話探しています虫メガネ
 原 札束に正義の眼鏡狂い出す
 大 上段に振りかぶりすぎるくらい。
 添 札束を積まれて眼鏡くもり出す
 原 赤門は眼鏡が無いと潜れない
 そうとも言い切れぬので許容範囲の句に。
 添 赤門の前で眼鏡屋よく流行り
 原 百均の眼鏡要所に置いてある
 添 百均の眼鏡も捨てたものでない
 原 近かすぎて時に忘れる我が眼鏡
 添 また掛けたことを忘れている眼鏡
 原 遠ざけて抵抗しても老眼鏡
 添 もう我慢できず老眼鏡を買う
 原 嫁さんも眼鏡が似合ふ年になり
 添 もう嫁も老眼鏡を掛ける歳
 原 眼鏡かけ鏡の中で歳自覚
 添 眼鏡見えすぎて年齢出る鏡
 原 ワンバクがみんな眼鏡の同窓会
 添 わんぱくも老眼鏡のクラス会
 原 授業より恩師黒ぶち思い出す
 添 黒縁の眼鏡を思い出す恩師

雅代 千代子 徑子 幹子 昇 洋子 稔 ちづる 久子 文代 としお ポン吉

原 コンタクト眼鏡さんと棲み分けて
 添 TPOで分ける眼鏡とコンタクト
 原 陽だまりにうとうと眼鏡鼻へずる
 添 日溜りにうとうと眼鏡すり落ちる
 原 似なくてもよいのに眼鏡親子共メガネ
 添 似なくてもよいのに親子共メガネ
 原 老眼鏡かけて明日のスケジュール
 添 老眼鏡掛けて明日の予定立て
 『少し工夫すれば佳くなる句』
 原 これからも眼鏡と一緒にしろくね
 添 これからも世話になりますメガネさん
 原 惚れ直す君が眼鏡をかけた時
 添 眼鏡貰い換えたあなたに惚れ直す
 原 その顔で俺の先祖かメガネザル
 添 ひょっとして俺の先祖かメガネザル
 原 眼の手術おかげで眼鏡との別れ
 添 手術したお陰で眼鏡との別れ
 原 うたた寝に眼鏡いつでも添い寝する
 添 うたた寝にいつでも添い寝する
 次 六句は傍線の部分が添削した箇所です。
 世間から半分ずれてる鼻眼鏡
 呆けたかな眼鏡のまんま顔洗う
 選りに選り前と良く似た眼鏡貰う
 ヨン様と同じめがねをかけてみる
 スーパーへ偽装見破る眼鏡かけ
 先生の眼鏡の奥にガイダンス

賢治 律子 綾乃 イセ 清 柳歩 直 美紗子 那珂子 すみ子 浩二 堅坊 乃りこ 宣子 治子

原 ぬるま湯にくもる眼鏡は思考力
 添 ぬるま湯にくもる眼鏡も私も
 原 明日の虹さがす目鏡を買いに出る
 添 明日の虹見える眼鏡はないですか
 原 眼鏡かけ見たくないもので見える
 添 見たくないもので見えてくる眼鏡
 『佳句』
 流行の眼鏡しばらく掛けそびれ
 遠眼鏡買って近所に疎まれる
 安物の眼鏡家中置いてある
 百均の老眼鏡が性に合い
 鼻眼鏡独りの時間持てあます
 肩書さはない父の眼鏡拭く
 『今月の推せん句』
 度が合つて急に食欲増す眼鏡
 他 ない発想で、納得させられる句です。
 読めない字眼鏡のせいに済ます
 三浦みち代
 嘘も方便。茶目つ気もつかえまます。
 七色のメガネ下さいトンボさん 小林わこ
 感性が良くてメルヘンティック。
 『私の句』
 それにしても老眼鏡が安すぎる
 タレントと間違えられたサングラス
 「注」眼鏡の字の間違いが多かったです。
 (登載洩れの方は役員が添削して返送します)

起世子 利子 亜希子 光子 勝久 かずみ 房江 俊子 ミヨノ 吉村 幸

秀句鑑賞

同人吟 波多野 五楽庵

一七月号から

俳風柳多留から発足した川柳は時代と共に新興川柳と名を変え、あるものは川柳の三要素を主軸として伝統川柳を継承し、またあるものは文学性を主張して詩性川柳と姿を変えて、心象川柳と呼ばれる事になる。

まだ依然として伝統川柳に固執している柳社が多いと思うが、抒情川柳が読者の心を打つようになり、時代は移りつつあると考えてもよい。想像力によって心の中に描かれる心象川柳は、時代とともに川柳界を凌駕してゆくのではないだろうか。

その原因は短文詩の持つ詩的感動にあると言ってもよい。

矢車草久しく母の夢を見ぬ

太田 扶美代

亡母と書いて「はは」と読ませる句が多いが、この句にはしつかり「母」と書いてある。母と書いたが故に母への思いが一層強めら

れ、矢車草に名を借りた擬人法が見事に効果を見せている。

酌み交わす言葉に落ちる花雫

小寺 花峯

花雫と一緒に酌み交わしている人への思いやり。その思いやりを酌み取れる人だからこそ、とことんまで心を開いて酌み交わせる。「花雫」素敵な言葉を見つけた小寺さんの心は温い。

菊芽挿すもう待つ人はいないけれど

八田 敏

軟らかい畝の中に菊の芽を挿すのは、六月頃の季節なのだろうか。やがて青い芽が伸びて秋を彩ってくれる菊の芽、しかし、その秋を待つてくれる人はもう居ない。いないけれど菊の芽を植えるシナリオが隠されている。

淡き青日暮れの空は淋しげで

平嶋 美智子

川柳発想の一つにリリシズム(抒情と内省

があります。これは明治以後の川柳が採り入れた新しい発想で、路郎先生の句に

雨の色黄昏の色悲しい日

路郎

がありますが、美智子さんとの相違点に路郎先生の句の中に悲しさの表白がありますが、美智子さんは日暮れを淋しい色と表現しました。淋しさの内面に青い色があつた感性がこの差になったのでしょうか。路郎先生の句は多分、お子様を亡くされた時の悲しさであつたろうと拝察しています。

貧しさは耐えて淋しさ耐えられず

川端 一步

一句の中で拮抗し合う二つの比喩。このような対比を見付け出す事は私には困難で、二つの淋しさに立ちすくんでいる。この作者の発表された五句とも見事で、このような方が居た川柳の奥深さに打ちのめされている。

延命装置外れ優しい顔になる

坂上 淳司

法医学語に死後硬直という言葉があります。いくら苦しんで亡くなつても硬直が解けますと、まことに安らかなお顔になります。いくらさついお姑様でも苦しみが解けますと、極楽に召される安らかなお顔になるので

す。職業柄私はそういう現場にたびたび遭遇してきました。

もう里も他人ばかりに淋しなり

植村喜代

故里、過疎も原因だろうがだんだん知って
いる人も少なくなつてしまつた。少子化も、
核家族も故里を淋しくさせ、郭公の声も聞く
事がなくなつた昨今、この句下五の「淋しな
り」、ひしひしと押し寄せる淋しさです。

三枚目また買つて出ていて孤独

岩佐ダン吉

ダン吉さんの優しさが表現されて、いただ
いてしまいました。三枚目の裏に見える人柄
の良さがいかにもダン吉さんらしく、小さな
酒場で一緒に呑みなくなる心の交流を感じて
しまいます。

しなやかに反らせて苦言やりすこす

宮本かりん

このような身の処し方もあるのですね。苦
言に逆らつてもどうしようもない。それより
もしなやかに、さりげなく身を躲して他人の
ような顔をしてしまう。そこには苦言のやり
場のない空しさだけが操り人形のように残る
だけ。本気にならない身の処し方も必要だっ

たのです。

目を閉じてわたしの好きな色さがす

大谷篤子

青森県出身作家の句に

目を閉じて灰色もよき色のうち 蝶五郎
という句があります。

蝶五郎さんは目を閉じて私の好きな色は灰
色だった、と人生の内の色を表現しましたが、
篤子さんはこれから好きな色を探すのです。
後悔しない色を見つけて下さい。そして、
その色を愛する事が必要なのです。

至らない私帽子を深くする

山本希久子

帽子を深くかぶつて心の中を見せまいとす
る。至らないのは至るの反語で、常に気にし
てなさるのかもしれない。

帽子を深くしただけで隠せるのでしたら苦
労もいらなideししょう。むしろ堂々と御自分
の御意見を発表して、むしろ堂々とお顔を見
せて歩いて下さい。現代では謙虚は美德では
ないのです。

夢だけを抱いて別れる臈月

大橋鐘造

久しくおめにかからない大橋さんのお顔が

目に浮かびます。さすがに上手な表現で、見
事な絵の中を歩いていらつしやる。

十七文字で描かれた無限の絵。川柳も絵で
ある事を知りました。色紙に書いたら立派な
句です。

するとひとり芝居の幕が開く

伊達郁夫

黙つて見ていると、面白くなさそうに演じ
ている伊達さんの姿が目についてくる。舞台
が派手なほど地味になつてゆく伊達さん。そ
して無言の内に舞台から去つて行く。でもそ
れがなぜかひとり芝居なのです。

胸の庭小さな花が今咲いた

居谷真理子

どうやらこの秀句鑑賞も終りに近くなつ
た。私が愛染帖を見ていた時からくらべると、
川柳塔の句は総体的にまともりは上手になつ
たが、川柳が小さくなつた気がする。それが
一番最初に書いた心象から離れて、無理にま
とめようとしている気がしてならないという
ことです。

真理子さんの胸に咲いた花が立派に育つて
ゆくように祈っています。「小さな花が今咲
いた」とてもきれいな言葉です。

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

宮崎 シマ子

年齢的なものと逃げるのは卑怯とわかっていても、眼もかすみ根も無くなり川柳の句集を読むことからついつい遠ざかっておりました。久しぶりで一九二名。九二八句を丁寧に読ませて頂き、脳が少し活性化したように思います。ありがとうございます。

断れば語調の変る電話口

広瀬 房江

恐いですね。私は関係ないと思うとすぐに断り、その時こそ苦勞様と言添えます。

孫とあう薄く口紅引いてゆく

谷田 多美子

お祖母ちゃんきれいなね。と言われたくて：女性はいつまでも若くいたいものです。

心地良い話になって身構える

尾畑 なを江

持ちあげておいて叔母さんお金貸してとかあの洋服欲しいとか、くわばら、くわばら。

借る方も断る方も嘘つくめ

乾 春雄

嘘も方弁、いい関係が続けてゆくには美しい言葉は必要だと思っています。

バランスとして鬼も一匹いれておく

田中 すず

強い弱い、重い軽い、表裏、仏と鬼、これは人間の定義であると思います。ただ鬼さんは鬼でいて下さい。同化しないで下さい。途中からどなたですかと言えませう

先方はしつかり覚えていて下さるのに……

菅田 かつ子

当方は失礼のないよう話を合わしてはいるが冷汗ものです。別れてから思い出したりして自分史は五七五で花を添え

私に四半世紀川柳をやっています。上手では

福岡 博利

ありませんが、長い記録として何かを子や孫に残せるかなと考えます。まして上手な方は大きい誇りとして花が咲いているでしょう。

乱雑な机は僕の小宇宙

平野 あずま

その机で大きい宇宙へ行く設計図を書いたり、なつかしい人にお便りを書いたり、川柳を考えたり、凭れて昼寝をしたり、マンガを読んだり唯我独尊の境地ですね。

それならばとことん後期続けたる

稲葉 洋

負けずにお互い百二十歳まで生きましよう。あつさりと謝る事も護身術

前田 紀雄

自分が正しくても謝っておきましょう。近頃恐い世の中になっているので、ブスツとやられたらおしまいです。

知らなかつた事ばかりの八十歳

渡辺 芳子

人は死ぬまで勉強とよく母が言っておりました。私も傘寿を越え知らない事はかりです。近所の方川柳の友達などと井戸端会議などやっていますと何か得る事がありその代りすぐ忘れてしまします。

次の句なども楽しくいいな思いました。

重ね塗りしたのに過去が浮いてくる

福井 菜摘

ヨン様もお元気ですかおぼろ月

小谷 小雪

面の皮厚くなっても気付かない

飯野 菖子

朝ごはん目刺があれば最高や

江島谷 勝弘

嫁く春一步一步が新しい

坂本 智子

■句集紹介

川柳句集

『たまゆら』

三宅 保州著

新家 完 司

本誌「初歩教室」の講師としておなじみの三宅保州さんが句集を上梓された。

保州さんとは「川柳塔まつり」などでお会いしたときにご挨拶する程度で、詳しいことは存じ上げない。が、「初歩教室」における指導ぶりや、平成十七年に塔社から発刊された著書「川柳しませんか」などの内容から、氏の川柳に対する造詣の深さは並々ならぬものがあると拝察している。その、たゆまぬ努力、伝統川柳の基本をしっかりと歩んでこれた成果の一つが本句集であろう。さて、どのような句に出会えるかと、楽しみながら頁を開かせていただいた。

たまゆらの命をせめて光らせる

句集の表題となった句。「たまゆら」を漢字で表記すれば「玉響」。玉が触れ合うかす

かな音から、「ほんのしばらくの間」のこと。ほんのしばらくの間の命であるからこそ、精いっぱい光らせたいという、何ごとに対しても前向きに取り組もうとする姿勢が清々しい。

生きるとやカードばかりが増えていく

今日生きた褒美のように明日がある

さて何が出るやら明日という韆

優れた句には、作者の性格や考え方が如実に表れる。右三句、いずれも保州さんの「考えていること」が表明されている。すなわち、にんげんとにんげんの触れ合いが「カード」に取り代わって行く不条理。そして、「明日を見ているところ」が明確に分かる。

熱帯魚お前も俺も人見知り

もしも今死ぬともつたいない貯金

非常袋に入れたいものが多すぎる

私にもある使用上の注意

現代川柳は「自分を詠う」のが主流になっているが、丸裸の自分を曝け出すのは至難であり、ともすればキレイゴトで済ませがちである。しかしながら、右、いずれも正直に自分を述べて共感させるものがある。

無駄な日は一日もないカレンダー

訓練のときは笑っているけれど

ほんとうに川で洗濯したのだよ

他人には靴の重さがわからない

飛ぶように去って行く一日の大切さ。訓練と現実との落差。忘れられてゆく昔。そして、他者と分かち合うことが出来ない重荷。など等、何気なく見過ごしている日常風景や心情から、大切なものを掬い出す手腕は見事。

非常口などはごいませぬ地球

百人の村に戦争などはない

朝食を抜く子ありつけない子ども

真ん中に日本を置くと見誤る

地球サイズのままでは呆然とするばかりのこと、等身大に圧縮して見詰めると、自らがなすべきことも見えてくる。

このような句は、決して思いつきでは生まれない。何ごとに対しても、他者からの押し付けや受け売りではなく、自分の頭で考えて咀嚼する習慣から生まれ出るものである。

愛という字の真ん中にある心

空き缶がレジです無人販売所

少し膨らませて売っている財布

先ほどとは趣の異なる「見つけの面白さ」が味わたる三句。いずれも、川柳作家ならではの鋭い観察力が発見した事実。

同じバターンの句を並べる構成によって、

互いの力を弱めている箇所もあるが、奇を衒わぬ正統な句の良さを満喫できる素晴らしい句集に仕上がっている。

大衆を

見捨ててよいか

早川清生

五月号の本欄に、詩歌の世界について思いつくまま随感のようなものを書かせて頂きましたら、いくつかのご意見、ご質問を頂戴しました。それらを繋ぎ合わせて、紙数の許す限りで私見を述べさせて頂きます。

まず文中に出てくる詩壇とか柳壇はどこにあるのかというお尋ねです。そんなものはありません。もし統轄のあるいは規制的な組織があれば、何よりも自由を愛する作家たちが、真先に反発するでしょう。詩誌にも詩壇などという表現を見ますが、ここでは詩人の仲間とか仲よしクラブというほどの意味に過ぎません。使い勝手がよいので、慣用的に用いしましたが、誤解を招いたようです。

として、その詩人たちですが、詩人にも系譜があり、鮎川信夫は「詩の機能について」(国文社「詩と詩論1」)の中で綿密な論考を行っています。詳しくは原文をお読み頂きた

いのですが、ごく大まかに紹介しますと、彼らはわが国の詩人たちに多くの影響を与えた西欧の詩人を四つの群に分けています。

1 リルケの群 静観的、謙虚で、現代に対する働きかけは少く、自己の内的世界にとどまるが、詩の愛好者の心は強く捉える。

2 ボードレー、ランボウの群 彼らが詩に求めたのは一種の美の絶対境であって、完璧の観念。詩は夢の避難所であった。

3 エリオットの群 サンボリズムの影響を受け、思想上は伝統的な意識をもつ。文明の総合的な批判者といえる。

4 アラゴン、エリュアールの群 コミュニスト抵抗派、詩の用途を政治的的目的とする。詩人は行動者となり、尖鋭に表面へ出る。この四群相互間には絶対的な断層があり、わが国固有の詩の伝統を加えると、ひと口に現代詩と言っても非常に多くの面があり、詩の社会的機能もはなはしく異なっています。

「詩が民衆のものであるという言葉は、ずいぶん言い古されているが、またいつも新しい意味をもっている」(黒田三郎「民衆と詩人」思潮社「戦後六〇年(詩と批判)総展覧会」より)という論はわかりやすいのですが、現代詩がより高い芸術性を追求し、たとえば暗喩とか言語の自律性を重んじるとき、大衆は

決して根気がよいものでないから、どうしても現代詩離れが発生します。嶋岡展も「詩人たちの試み、危険な前衛的な試みを、歴史的にしっかりと把握していない限り、詩の発展・未知の領域への展開はないだろう。その場合、大衆との接点、理解共鳴のじつさいの有無は、じつは第二、第三の問題である」と述べ(新潮選書「詩とは何か」大衆との乖離をやむなしとしています。前衛は孤独です。

川柳の場合、その発生を一応万句合せとするならば、会所や取次ぎを通じて一万とか二万もの応募句を集めた熱狂ぶりは、大衆と川柳の本源的なつながりを示しています。余談ですが私はサラ川の盛況ぶりに万句合せの雰囲気を重ね合わせ、彼らを川柳の世界に戻す方策はないのだろうかと思っています。

川柳の社会化は路郎畢生の願いだったから大衆との乖離は許されません。ただ川柳作家にも真剣に暗喩など取りくんでいる人たちが多いのも事実です。大衆性と芸術性の相克についてどう決断するか大きな課題です。路郎語録へ戻れば、川柳における詩性の探求と発展も彼生涯の念願だった筈です。両者の相克は川柳の問題です。私には詩歌が大衆と訣別し、大衆に歌謡曲の歌詞しか残らないと思えば、たいへん不幸なことと思えます。

没後70年 鶴 彬

顕彰碑建立川柳大会

日時 9月14日(日) 1時開場 2時半締切
会場 大阪市立 中央青年センター
〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35
J.R. 地下鉄 森之宮下車歩10分
TEL 06-6943-5021

お話し 「鶴彬と今」

木津川 計(「上方芸能」誌発行人)
兼題と選者 (各題2句)

「伸びる」 木本 朱夏選(和歌山三幸川柳会)

「にややか」 赤松ますみ選(川柳季コロキユム)

「夢」 佐藤 岳俊選(川柳人社・岩手県)

「自由」 田中 新一選(番傘川柳本社)

「鶴」 西出 楓楽選(川柳塔社)

特別投句 「生む」川端一步謝選 8月20日迄

専用葉書

欠席投句 B5判用紙、各題2句、特別投句の葉書と10000円同封

8月20日(日)までに郵送

参加費 2000円

(大会誌、記念品、鶴彬大賞)

懇親会費 6000円

(希望者は特別投句の葉書に記入、定員60人)

主催 鶴彬顕彰碑建立実行委員会

共催 あかつき川柳会

番傘川柳本社創立100年記念全国川柳大会

— 番傘川柳百年史発刊 —

日時 10月12日(日) 10時開場

場所 なら100年会館(丁R奈良駅西側)

祝辞 今川 乱魚氏(全日本川柳協会会長)

上野 道善師(華厳宗管長・東大寺別当)

事前投句 時代(番傘川柳本社 森中恵美子 謝選)

宿題 祝う(ふあすと川柳社 赤井 花城 選)

あれから(柳都川柳社 大野 風柳 選)

仏(川柳塔社 河内 天笑 選)

ページ(下野川柳会 川俣 秀夫 選)

未来(札幌川柳社 岡崎 守 選)

眺める(川柳きやり吟社 竹本飄太郎 選)

進む(川柳研究社 西来 みわ 選)

◎ 出句締切 12時 席題なし

◎ 事前投句、宿題共各題1句。欠席投句拝辞

◎ 事前投句は所定の用紙に記入、8月31日必着

会費 5千円(軽食・番傘川柳百年史・記念品)

懇親宴 1万円(ホテル日航奈良(要予約) 17時~19時

問合わせ・申込み

番傘川柳本社 TEL 06-6361-2455

主催 番傘川柳本社 後援 (社)全日本川柳協会

第58回 富田林川柳大会

とき 9月20日(土) 12時30分開場

ところ 富田林市中央公民館

TEL 0721-24-3333

(近鉄南大阪線富田林駅下車南200

メートル)

会費 1500円(作品集・お茶)

宿題 「安」 中井 アキ 選

「直」 小林すみえ 選

「間」 田中 節子 選

「続」 梶原サナエ 選

「効」 松本初太郎 選

「ゆとり」 池 森子 選

締切り 午後1時30分(各題2句)

賞 特選賞

懇親会 4000円(希望者のみ当日受付)

問合わせ 池 森子 電話(ファックス)

0721-25-0603

主催 富柳会(川柳とんだばやし)

後援 富田林川柳協会

本社 七月句会

七月七日(月) 午後五時半
アウイーナ大阪

蒸し暑い日のつづく中、友好各柳社の多数の参加をいただき、七月七日路郎忌本社句会には16名を以て賑やかに開催された。

お話は常任理事本末朱夏さん。

「路郎の遺したものと題して師の生い立ちに始まり葭乃さんとの出会い、結婚、36歳で『川柳雑誌』を立ち上げ、創刊号発行から終刊号を出すまで、軍国主義の世の中を背景にその流れに身を置きながら、如何に川柳を大切に守ってきたかが、懇切丁寧なお話から生き生きと伝わってくる。

二階の句、子煩悩の句、哲学者の句、はたまた破調の句等々、七項目に大別した句の紹介も、膨大な作品からビックアップしたものでばかりで大変に聞き応えがあった。

因みに、路郎師の一番のお気に入りの句は、寝転べば畳一帖ふさぐのみ、だったそう。一句を遺せ、いのちある句を創れる師の教えを心に刻んで川柳と向きあいたい。と熱く結んで30分のあたたかいお話は終った。

(扶美代記)

初出席は大阪市の正信寺尚邦・辻部さんと子さん

月間賞は番傘川柳本社の森中恵美子さん(摂津市)に輝く。

(司会)美籠・昭(脇取り)賢子・月子
(受付)舞夢・ふりこ(清記)富美子

席題 占う

久保田元紀選

バラ一本占う人の目に残る
星占い浮世を叱る癖がある
銀河宇宙の未来占うタリクマター
北極の熊が占う近未来
ガソリンの行方は誰も占えぬ
占い師の嘘に人生励まされ
占いで迷いがさらに深くなる
女難の相と言われ女に縁がない
スピリチュアルに女心を掴まれる
易の灯に女心が揺れている
土壇場に立つて占い信じてる
占い師黄色い物を持ってという
一枚のカードで明日が見えてくる
信号が赤ばかりなり不吉なり
占いのせいで着替えて行く下着
真夜中にカード占いする独り
茶柱に今日のすべてを賭けてみる
占いに頼り自分を見失う
大凶は信じないけど気にかかる
将来を占えという九十歳
占いで儲けた家を売りに出す
占いで別れたほうがいららしい
トランプに無理な恋だと笑われる

みつ子 智彦 慶一 正 天笑 洋 光久 寿美 修 更紗 いわゑ 瑠美子 湖風 完次 柳伸 朋月 光久 玄也 堅坊 蕉子 准一 寿子 修

ついふらり頼りたくなる易者の灯
相性は悪くなかったはずの妻
占いを信じて生きるお人好し
占いに凝った女のゆき遅れ
ペンギンのポーズで占うてもらう
占いへかざすその手は泣いている
エンピツの転がる方に賭けてみる
占うてもうえは思い当ること
占いは好きだが汗はかきません
佳
言葉には注意と出てる今日の運
占いを信じガラスの靴探す
夜のマントに隠れて泣いた占い師
花占いの痛みも知らないで
当らない占いじっと手を見つめ
人
大吉に心当たりが何もない
地
象は行き先を占ったりしない
天
私より貧しい人に掌を見せる
軸
七夕の辻に占う星がある
兼題「ひそひそ」 山岡富美子選

美籠 由一 朝子 恵美子 千里 郁夫 希久子 ダン吉 由一 集一 朱夏 俣子 房子 尚士 シマ子 たもつ 哲男 螢 昌紀 緑

佳

なぎと 善 純 瑠美子 洋子 月子 美 籠 ルイ子 倅子 義子 和子 たもつ 一 志 加お里 一 風 遠 野 智 彦 一 歩 希久子 朱 夏 富美子 多恵子 弘 風 たもつ 太 郎

兼題「ルーズ」

三宅 保州選

暑いのが嫌いで三時まで昼寝
 だらしない身なりが闊歩する平和
 借りたまま埃かぶっている蔵書
 だぶだぶのソックスすらし自己主張
 汚れでは死ぬことはない寝ておこう
 ルーズとは思っていないから困る
 几帳面が思わぬルーズ併せ持つ
 少しだけルーズぐらいが生き易い
 少しルーズになってまあるくなりまし
 婿さんがルーズで救われる時も
 スイッチオン女ルーズになりました
 ちよい悪の男ルーズでもっている
 うたた寝のままを朝までそのまんま
 ばくのちよ金どうちゃん使いかえさへん
 ぐうたらと気楽とんぼの鍋と蓋
 一族のルーズ法事が始まらぬ
 ダイエット効いてルーズなスラックス
 散らかした部屋はオアシス心地よい
 中元の札を賀状に書いてくる
 冷蔵庫の中にルーズがつまってる
 ルーズではないと言ひ張る無精ひげ
 彼すばらわたしもすばらこれからも
 ルーズリーフに書いてはちぎる片想い
 砂時計少しルーズになれないか
 彦星がルーズで逢えぬ天の川
 二日に一度位は顔を洗います
 ルーズでもお釣はいつも確かめる

哲男 加お里 朋月 朋月 千子 天久 天笑 寿美 郁夫 光枝 ばつは 准一 義 天笑 光久 玄也 義 昌紀 ばつは 朱夏 郁夫 准一 岳人

いつ見てもカバンの口が開いている
 ねばならぬ会則もない仲間の輪
 引き潮に海はルーズになっている
 目も口も柵の蓋も開けたまま
 噴水もルーズ待ち人も来ないまま
 佳
 そく聞けないで私のルーズ分かるから
 ルーズだがこまめに使い回しする
 足の向くまま来ただけと言うルーズ
 膨らむと少しルーズになる財布
 ひらがなの友のルーズに耐えている
 人
 暖衣飽食ルーズになってゆくモラル
 地
 サミットの様子を寝ころがってみる
 天
 風向きはしつかり読んでいるルーズ
 軸
 お隣のタマは我が家のミケらしい
 兼題「照れる」 田中 新一選
 よく聞けば照れてはおれぬ褒め殺し
 君なしで生きていけないなんて言う
 はあちゃんも照れる美男の娘婿
 好きな子のことは言わない少年期
 握手でも好きな人だと照れくさい
 照れている表彰台のいい素顔
 素人離れと誉められ照れる専門家
 人気出て照れるポーズも様になり
 朱夏 光枝 元紀 則彦 美和子 里江 由一 智彦 緑 楓楽 惠美子 ダン吉 庸佑 賢子 耕治 光枝 ふりこ 太郎 和夫

照れながら自慢話をたらたらと
 再婚の手に花束がてれている
 しあわせに粗食の膳が照れている
 目が覚めて思わずよだれ拭く車内
 父の日の父は無口な祝い箸
 古稀すぎて照れたりできる人は好き
 妻と手をそつと繋いだフルムーン
 痛いより転んだことが照れくさい
 ぴかぴかにされた林檎の照れ笑い
 オグシオも照れる短いワンピース
 デュエットで照れる二人は隙だらけ
 照れながら歌うマイクは波にのり
 冗談に男の方が赤くなり
 照れることみんななくなり添いとける
 照れ笑い浮かべ古果の戸を叩く
 照れながらまだ人間をやってます
 照れているきつと幸せなんだろう
 照れ屋かなほのかな笑みの道祖神
 不器用にメガネ拭いてる照れかくし
 はめすぎの吊辞に仏照れている
 照れながら彦星ですと連れてくる
 苦虫を噛んで照れるでるフルムーン
 照れくさそうに空でも回る観覧車
 預金帳照れくさそうに付く金利
 佳
 以下同文の席に連なる面映ゆさ
 照れながらゴミ分別の特訓中
 照れ笑い鏡は嫌な顔をせず
 なに照れてはるのと吊革のおへそ
 照れながら指鉄砲の的にする

光久 日の出 日の出 五月 一志 見清 集一 幸雀 弘風 和夫 一風 遠野 清生 湖風 たつお 恵子 完次 理恵 恭昌 いわゑ 朱夏 洋 洋 朱夏 美義 登 朱夏 天笑 和子

人
失敗を明るく返す照れ笑い

忠子

地

父の絵の母が照れてる耳飾り

岳人

天

照れながら紙ヒコキがとんでくる

惠美子

軸

花束を抱いて男の目が泳ぐ

兼題「予感」

河内 天笑選

荒れそうな予感ベツトがそつと逃げ

珠子

子のごとは虫の知らせでわかる母

哲男

グーラ読んで大きく予感膨れだす

新一

また逢える予感で海に來てしまふ

保和子

バラ色の予感ポストへそつと入れ

一風

深入りをしそうなぬくい手を握る

たつお

恋の予感した瞬間に蹴躓き

由一

長生き税天引きされる予感する

更紗

ふつと思ひ出すと不思議にくる電話

惠子

さよならの予感一人に俄か雨

恭昌

運命の出逢い信じてまだひとり

遠野

目が泳ぐ悪い予感が背を走る

公誠

金本が打つてくれると思つてた

昌紀

四十歳トリオが美酒に酔う予感

則彦

水仙の茎の長さにある予感

雅文

八つ当たりしている上司左遷だな

光久

大丈夫と思へばきつと大丈夫

みつ子

目を伏せたけれどとつぱり当てられる

玄也

ピンチの時母さんヒョイと顔を出す

舞夢

今日あたりやつて来そうなお義母さま

和子

猫が露地走ると姑の来る予感

シマ子

いいことの予感美人に足踏まれ

希久子

来る予感してたしてたと握手せめ

(矢)五月

予感的中仲間のおハギ姿消す

柳伸

あの人に会える気がして遠まわり

加お里

バラ色の風が予感をふくらます

鐘造

予感から実感係の重いこと

月清

やつぱりだ朝のちらしが夕食に

見清

銀シャリへ並ぶ予感の自給率

一志

暴発は近いぞ妻が無言劇

淳司

スパアキー喧嘩別れをする予感

多惠子

うどんなげがきれいに咲いている不気味

緑

妻より先に認知症になりそうだ

元紀

静電気のように妻からくる予感

惠美子

サミットも四股だけふんで終るかも

順子

予感なくいつとも突然くる珍事

かりん

無印のやさしさ恋になる予感

理惠

いい予感しつかり飯を食べて出る

洋

悪い予感はずれて心地よく眠る

かりん

大阪に住みつく予感ありました

(志)千代

友達になれそう語尾があたたかい

惠子

地

地球のはかなさを予感する蜚

森中惠美子

軸

脳天から尾骶骨まで来た予感

残暑お見舞

申し上げます

川柳塔

わかやま吟社

同人一同

事務局

〒641-0012

和歌山市紀三井寺

一一一—二

牛尾 緑良

電話〇七三一四四六一二八五五

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ロース川柳会

山崎

君子報

ふらふらの足ふんばつて老い紡ぐ
カーテンと遊ぶそよ風若葉風
今日の糧糧しを乗せる丸木盆
バラ園にバラの風吹くバステル画
野が萌える歩きなさいと呼んでいる
木のぼりの上手な子です娘です
いつまでも仰いでいたい木のみどり
地を這って明るく生きる芝桜
老い松は旧家の重みのせてゆく

哲子
トミエ
貴代子
いわゑ
義子
君子

藍

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

年金をスライスにして生き延びる
年金へ怒りの声はフォルテシモ
年金の証書撫でたり叩いたり
当てにした年金ふいに舌を出す
舂添氏から便らないまま桜散る
年金がサポート僕の帆がはらむ

登美代
町子
章子
碧

みね

柳昌

竹原川柳会

古田

太虚報

五百羅漢のひとつと通じ合っている
蘭幸

松露川柳会

小西 雄々報

油断して体重計がまた悲鳴

澄枝

起世子
一歩
孝義
美花
八重子
孝子
絹子
次根
イセ

起世子
一歩
孝義
美花
八重子
孝子
絹子
次根
イセ

警沢な願いピンピンコロリです
満願の達成いつか子よ孫よ
ルノワールのあのふくよかさを願う
結願の胸に真つ赤な灯が点る
日本晴れさてさて何を願おうか
ライバルの電話だまされておくか
嬉しい事悲しいことも聞く電話
ご近所で電話を借りた時代ある
長電話さて要点は何だった
携帯は通院用と決めている
母の日のお浄土電話なりつづく
一本の電話ドラマが始まった
眼裏の愛猫いまだタマをとる
世渡りが上手な猫が寄ってくる
ずーと見つめると猫の目の神秘
オホホホ猫撫声にご用心
ガソリンが前よりあがる招き猫
招き猫あんたも後期高齢か
アメーバーになったネコの日向ぼこ
こんなにも幸せがある日記帖
心静かに観音経を書いてます
新緑も若葉も背伸びする朝だ
大きな手小さな私包み込む
ゾウさんもキリンも穏やかな顔だ

輝恵
汎美
笑子
厚子
一路
敬子
房子
年子
栄恵
半徳
淑子
比呂子
慶子
現代
千代美
幸子
白狐
力

あゆみ
栄香
太虚
節夫
千枝
史子

順調なときは見えない落し穴

針ほどの穴へ油断の水は漏れ

油断した怪我へ気持の分かる歳

身だしなみ厳しく言つた亡母を恋う

言いつた会合の席身が痛い

蕎麦の花身の上話したくなる

身の丈に合つた暮しで悔いはない

身にあまるほめ言葉からまた学ぶ

芽吹く時わが身は少しづつ縮む

月欠ける激しいものを身のうちに

歳感じ身構えている暮しぶり

ブランドを身によそゆきの顔となる

音もなく過ぎる樞の身を思う

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

北へ行く春野仏と眺めてる

暫くは眺めて遊ぶ京料理

笑う山眺めてもらうエネルギー

絶好のチャンス先立つ物が無い

燃え盛るチャンスを狙う男の火

阪神のチャンスの時間に電話鳴る

花束が届いて知つた誕生日

手の届く幸せ捨てて夢を追う

留守番に届く嬉しい握りすし

大変さ知事の涙を見てしまふ

大変な思いで産んだ子が背さ

ちえ

美明

裕

信雄

公美枝

鈴枝

久子

弘子

豊枝

智恵子

静江

和代

雄々

救急車受け入れ先が見つからぬ

一族の絆見守る背の家紋

提灯の紋に老舗の自負がある

奥床し仕ぐさで動く一ツ紋

川柳らくだの会

岸本

父のあと継いだ息子も不器用に

東の間のデートに雨のプレゼント

烏合の衆輪ゴムで十把一からげ

再会のライバル名刺見せたがり

人間の都合で雨が嫌われる

ゴムまりのようにはずんでランドセル

来世も逢おうなことはきれいなこと

雨による中止幹事を悩ませる

浮気する夫にゴム紐付けておく

郵便のバイク寄らずに走り去る

岸和田川柳会

土橋

宮島へあなご丼食べに行く

置き手紙井もんのメニューだけ

どんぶりではばい食べる妊産婦

過労死へ井飯で突っ走る

演歌好き今日も泣いてる笑ってる

基地キャンブジャズで鍛えて演歌歌手

思いきり派手な衣装で怨み節

黒人の演歌海雪出雲崎

高尚

美子

湖風

愛論

宏章報

大鯰

紀子

玲子

清帆

邦昭

富貴子

孝子

宏章

仁子

せつ子

房枝報

寿海

ダン吉

香代

蛙城

力子

笑司

昭

ゆい

佳句地十選

(7月号から)

持田多輝子

見上げれば父に似ている雲がある

一冊の本が転機をくれました

大阪を気付けさせるギョルミコし

生きていて良かった桜見ましたよ

きついことさりと云つた京言葉

古希過ぎてからの月日が早すぎる

父さんはやっぱリピンチには強い

澄んでいて嘘はつけない青い空

ヒーローはうっかり出来ぬ追われる身

言い訳は決してしないプロの道

銚子二本小節をさかし唄う父

生きざまが重なる演歌なる父

後期高齢喫いて歌う枯すき

七転び八起きのダルマ一句です

早起きをしてるが得は何もない

停年後早寝早起き趣味となり

何が起きてても頭を下げぬ議員さん

湧きに湧く起死回生のホームラン

賢さを表に出さぬ妻見事

賢いとはめてくれたはガキの頃

賢い嫁演じ続けて板に付く

賢いとおだてて孫の背を押す

絹子

比呂子

涼風

亜弥

萬的

千代子

笑風

和子

よしえ

音成

醉粋

房枝

仁緑

浅子

俊昭

泰弘

和美

東吉

ふみよ

権代

弘子

淳風

学業と違ふ賢と儲け術

東大出社会の風に乗り切れず

向い風賢い蟻は二番手に

子供らの夜更し許すキャンブの火

天と地の神に抱かれて寝るキャンブ

川柳花の輪

妻谷

重風報

梅干漬け誰にも負けぬ意欲満ち

食進み生きる意欲が沸く病後

だだこねて泣いて脅して子の意欲

若先生ベテランナースそつと呼び

ベテランの過信にひそむ落し穴

ご馳走はうちで作った茹すきゅうり

母作る食べ放題の祭り寿し

整形の予定ないのに見るチラシ

川柳クラブわたの花

西川

義明報

一言のごめんなさいが距離ちぢめ

四川思い穏やかな日日感謝する

肝心な話を忘れた電話

もう一度光ってみたい辞書を繰る

退院は間近嬉しく普通食

宝くじ買わずにおれぬ運だめし

妻に直ぐ些細なことも悟られる

自信作採られ呼名ひびかせる

親のこと少しは悟る年になる

岩夫

珠子

守

幸子

集一

ミヨノ

隆子

泰子

重風

薫

善栄

一幸

音成

君江

博子

愛子

ミツ子

宏至

幸枝

莊司

美はる

克美

老老の介護も笑顔ある救い

軽い芸人気が出てはすぐに消え

米寿だが母は我が家の知恵袋

無駄使い不況知らずのお偉がた

傷心の子に開けてある母の窓

広い野で四つ葉に会えた幸もある

白黒をはっきりさせる石を打つ

僕の前いつも希望が光つて

空気に黄砂にもなるわが女房

賢いと期待した子が職探し

腰据えて年金の元取つてやる

戦中の話になると止まらない

ハワイ人日本のメタボ比ではなく

遊んでも文句は言われないひとり

外人用宿のおかみが威勢良い

動物もストレス溜まり心不全

この人と決めて良かった添い遂げる

普通の暮らしの中に小さな夢を見る

女旅弾む話に夜がふける

遠い日の想い指笛吹き続け

幸せの尺度を変えて八十路踏む

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

脇役の演技に主役舌を巻き

最強の援軍となるにぎりめし

うとましい死んだふりでもしてみよか

いつふみ

義明

宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじむ

たえこ

美代子

耀一

知佐子

民

一風

義援金こわい財布の口あける

郵便受けふる里の風ころげ出る

王手飛車教えた弟子にかけられる

援軍は諭吉一番ありがたい

先生の身持ちはこわいほうが良い

山里の暮らしに馴染む不精ひげ

一枚の落ち葉と流れ行く奈落

子の援軍になれる間が花だらう

仲間だな事ある時はねきに

援軍のいらぬ平和を皆願う

喋るのは苦手だ妻を連れて行く

ああ言えばこうと手こわい妻であり

援軍は来ない白旗用意する

こわい飯こわいと言えぬ失業者

同棲がうとましいなら別れたら

目減りする年金だけをかじりつく

タジタジとするな地球はまわってる

さびた脳援軍たのむ電子辞書

援軍は算盤弾きやつてくる

寄つて来たあいつなんだかうとましい

新米教師キツイ保護者にタジタジだ

援軍を信じて逝つた沖縄戦

援軍の裏切り知らぬお人好し

援軍はいらぬと民をはって置く

恋人房いとしくもありうとましい

思つていない事まで喋るから怖い

ドングリの独楽がよろけている老後

善夫

一瑤

義徳

無限

あしび

志げ緒

孝男

美雪

菊香

末佳

秀四

一京

妻子

かをる

圭一郎

茂登子

稔

喜美子

行男

虎尾

由美子

喜子

昌鼓

金祥

春名

清帆

一粋

川柳塔唐津

仁部 四郎報

老母背負い軽さに泣かずまだ囁る
ひっそりと昔義賊が死に絶えた
モノリザの微笑謎を秘めしまま
物語妻が矛盾を突いてくる
辛抱から愛に脱皮の角隠し
立ちどまり両の手合わす地藏尊
昨日の噂手が出る足も出る

勝 視
四 郎
高 明
輝 夫
晴 翠
蜂 實
朗

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

梅雨近しレンゲ畑が田に変わる
五七五と短く詠んで大きな詩
弾の雨くぐった父にある自信
赤信号ここらでちよつと一休み
苦い薬命惜しいかのんでいる
長寿への道程けわし法の網
強い乱視とつき合つてゆく旅の果て
老いの知恵菜けぬうちに遺書を書く
青い山脈歌いたくなる空の映え
一本の庭木に毛虫容赦なく
晩学へ春の薄日が背なさを
曲り角バックミラーの日が登る

幸 子
道 子
純
ゆき子
和 子
守 弘
年 代
東 園
武 庫 坊
昭 三
宏 一
寛 之

高知川柳社

小川てるみ報

国政の危機へダルマが打つて出る (新)千恵子

出塁で郷土を揺らす甲子園
グーばかり出して男のまだひとり
出稼ぎの父を見送る子の涙
出るとこへ出ると言えない脛の疵
世の中に出る杭になる役もある
悲しみを乗り越え一歩出る勇氣
ふる里を出てから思ふ父母の恩
前向きに一歩踏み出す空の青
茜雲未練ひとつを染め直す
嫁と子に染まって細る床柱
ひざ枕あの日へ戻る橋がない
手枕で野高々おらが春
寝つかれぬ枕ときどき裏返し
もみからの枕の音は子守歌
古きよき時代もあつた蕎麦枕
枕には涙の訳がよくわかる
激務から解放されて高枕

正 躬
典 雄
松 風
まさ子
京 子
和 江
美 々
てるみ
健

西宮北口川柳会

黒田 能子報

土砂降りに四川の罹災思いやる
雨上がるぼたりぼたりと樋の音
雨降つて地固まるも程度もの
勝手ながらとまたシャッターが下りている
母の日を勝手に妻の日と思う
好き勝手言うて皺寄せ身に及ぶ
でも私勝手に生んだ訳じゃない

嘉代子
いたる
昭 三
富喜子
り こ
光 子
忠

わたる川柳同好会

水野 黒兎報

わが遺言に裏打ち額装などいらぬ

肋骨

立ち飲みで翼休める管理職
働いてこそその休みが有り難い
気休めと思ふと優し友の言
楽しみも休み休みにする余生
気休めの言葉に足りぬ思いやり
一休み風がささやく無理するな
オバチャンの口は夜しか休まない
ピンチでも人には見せず瘦せ我慢
ほんとうのピンチは声になど出さぬ
高貴孝礼笑つてしずめる腹の虫
ピンチとは気付かぬ愛の隠し味
口ぐせでピンチピンチと言っている
生きるとは頑張る事と今思ふ
似顔絵の中に私が若く居る
この青葉母に見せたい語りたい
2メートル下つて待っている電車
私だけにこのひとときを下さいね
母の日の華や少し父の日へ
子守唄聞いている頃は皆良い子
おしゃれ着の下にびつたり湿布薬
いい人を演じすぎたかくたびれる
まどろみの神降りてくる午後の椅子
根の深い運命線が待っていた

宏 一
キヨミ
美代子
松 煙
折 杭
直

葉の山巖にはまった血糖値

掛けたはず逆に嵌った妻の罨

首かしげ見上げるボチのつぶらな目

熱烈歓迎微笑の奥にある仕掛け

お前もかメタバに悩む同級生

孫という罨にはまつている至福

異感じ気付かぬ振りにスリルあり

好きな人に私は裏になった亀

殺人鬼裏も優しい顔してる

首縦に振らぬ男の自尊心

独りでもこんなに溜まる梅雨晴れ間

臆病で落ち着きのない亀の首

古狸曰内障で罨に落ち

金婚にはじめて渡すネックレス

裏側がちらちら見える消費税

裏方があつて主役の晴れ舞台

長電話独り住いの友がふえ

柳柳ささやま

遠山

可住報

石橋を叩きぐずぐずしてしまい

梃摺った草も灰とすきゅうりなす

古希すぎてまだ道草の好奇心

草伸びるいきおい負けず勝負する

年金を比べ合いつつ花遍路

昭和の子わらぶき屋根にある平和

年重ねぐずぐずでなくマイペース

契子

幹治

昭子

祥風

柳童

桂子

雪子

見清

宇乃子

美智代

春代

久子

信男

勇治

禮子

黒兎

勝

成績を比べた頃がなつかしい

ぐずぐずとしてるが要の釘は刺す

親の目はもう比べてるランドセル

毒餃子パンダの陰に逃げている

野の花は人に諂うことがない

よく出来た姉ちゃんが居て分が悪い

川柳塔おっぱひ

川崎ひかり報

自己主張出来ずにそっと吐く紫煙

排煙で地球を壊す温暖化

正論もいつか煙りに巻かれてる

世界地図あちこち煙り立つ気配

家中に煙たなびくサンマ焼く

輪を描いたキセルの煙り空を撃つ

親の顔煙たくなった反抗期

山幾つ越えても続く余命表

育兒日記代代続く女文字

紫煙の輪言いたい事は言い尽きた

京都塔の会

都會

求芽報

朝の風 血流洗うスニーカー

雑念を吸い取るみどり京の庭

ほの暗く千本鳥居は恋路めき

羅漢さま汗をふきふき会えました

修行僧の気持になって坂登る

若冲と心通わす羅漢様

かほる

幸子

富美

美智子

哲男

可住

賢

あきら

放任

はつ恵

いさむ

弘

八重子

よしみ

貞月

ひかり

ふりこ

美義

求芽

義子

希久子

宏子

ゆつたりのバジャマで想う今日の幸

池の鯉ゆつたり事件ないらしい

家計簿をやめてゆつたりしています

スローライフせかせか歩くこともない

ネクタイもケータイも置く日向ぼこ

鈴鳴らし氏神さんに久しぶり

タンバリン鳴らして夏がやってくる

手の鳴る方へ来たがいい事もない

胸の奥でまだ鳴りやまぬオルゴール

胸の鼓動聞こえた彼のプロポーズ

苦節越え温い拍手が鳴りひびく

風鈴が撫でて欲しいと風を待つ

妻と女のはざま目覚まし鳴っている

ばあちゃんの手は直角に豆腐切る

直角の岐路で男は明日を見る

直角に考えすぎて味がでない

背すじは真っ直ぐ凛となる法話

直角に後期高齢者の中に

直角に切り込む若さもて余し

砂糖水に溶かす直角の知性

四角四面の男の骨は抜きにくい

折り紙の角から鶴の飛ぶ気配

90度わたしを変えたる風に会う

望郷に直角に飛ぶ竹とんぼ

川柳塔わかやま

川上

大輪報

哲子

とし子

則彦

能子

知栄

寿美子

啓子

シマ子

葉子

満子

保子

かずお

わこ

典子

孝一

五月

昌乃

篤子

萬的

ろっぱ

佐代子

公子

義

美龍

喜怒哀楽分け合う友のいる安堵

富美子

千手観音わたしの欲は罪深い
 時どきは喧嘩もします夫婦岩
 立ち直る友へ拍手のありつたけ
 草の根は岩を砕いて生きてゆく
 欲のない面に時々つけ替える
 友情へ波風立てる第三者
 親切の裏へ欲望透けて見え
 岩となり女が守り抜く家族
 座つてゐる岩は岩だと気付かない
 岩かげで昼寝してます暇な人
 ネットいじめに友情の文字はない
 竹馬の友と卒寿の初夏を謳歌する
 友情の核は今でも燃えている
 わたくしのレベルがいつもわからない
 岩までも砕く地震を無防備で
 固い友情優しく撫でている背中
 岩陰という人生の安息地
 先走る欲をどうしよう制御する
 岩のような心溶かしたぬくい私語
 差別せぬ友情こそはほんまもん
 友情を守りましようねトホホのホ
 離れそうで続く他人が居てくれる
 ほどほどの欲なら生きていく力
 友情という偽装にも肩が凝る
 オンリーワンめざし呪文をかけている
 命は一つ人にレベルのないものを

輝子 大輪 登美代 順子 小雪 紀子 紀久子 泰女 裕美 三喜夫 俣子 三男 精子 あきこ 英子 緑良 謙 寿子 美子 克子 豊太 よりこ 准一 徑子 めぐみ

人並みのレベルへ合やす足の音
 招き猫欲の数だけある吐息
 十指みな欲望があり困らせる
 いずも川柳会 佐藤 治代報
 試されてはらはらしてる心電図
 雷が落ちてすっきりした悩み
 稲光り亡母は空から叱咤する
 愚痴を言う壁を何度も塗り替える
 はらはらが笑顔になつてさくら咲く
 避雷針立てて魔物を寄せつけぬ
 バランスの崩れた胸を持ち上げる
 切り替えたはずの気持がまた揺れる
 ばあちゃんバランス取つて風なこむ
 雷とヘソ閑人の爪楊子
 病む窓辺バラ一本を取り替える
 粗食でもバランスのいい愛を盛る
 あなたにはいつもはらはらさせられる
 平仮名の中ではらはら恋をする
 バランスはどうあれ好きになつた仲
 ちよつと待て今脳みそを入れ替える
 大切に使う残つた歯を磨く
 淋しさと気配が揺れるやじろべい
 肝臓にまた落雷を受けている
 雷を納める壺をもっている
 築地松風のバランスとつては

利治 泰 翠子 美江子 しげる 桂子 久枝 房緒 治代 たえこ 桂子 敬子 ちえ 祐次 昌枝 圭詩朗 すみこ 房子 多喜 祐 寿美 放舟 玲子 喜子

十指みな使つて告げる愛の手話
 使いなれうっかり怪我し身にしみる
 雷も平和が好きで昼寝する
 平静な水はバランス知つてはいる
 雷が鳴つてトーフが不味になる
 張り替えた障子に過去が消えてゆく
 花替える仏のみちを模索する
 命がけいいバランスで群れている
 都合良い時だけ使えう神仏
 川柳若葉の会 宮嶋シマ子報
 開き直り一生懸命生きてます
 鍵全部かけたが窓は開けたまま
 アルバムを開いて若い日を貰う
 ブラジルに荒地開いて時百年
 怒つた妻口の開かぬ貝になる
 逃げ道を一ヶ所開けて子を叱り
 移転先も告げず突然去つた友
 政権が移行するのに賭けている
 歳月に互いの彩が移り合う
 移り行く世へ追いつけぬ老いた脳
 川柳塔なら 坊農 柳弘報
 地平線見ずに育つた井の蛙
 気まぐれな会話わたしを狂わせる
 真つ直ぐな視線嬉しい赤ん坊

浜丘 左余 蘭水 歌子 文子 茂美 きみえ 章峰 ちかし 加津子 喜美子 慶子 香住 弘直 シマ子 ますみ 烈 能子 あずき 博一 満作 美佐女

純粹な耳で聴くから騙される
しがらみを脱いでほうすれ行く絆
老いて行く一生の線謎だらけ
暗黙の線で夫婦の歩が揃う
一肌を脱いで男の灯をとす
びつたりで未練が脱げぬ試着室
残照へ線路まっすぐ伸びている
雑衣箱きれいにふいて脱ぎはじめ
制服を脱いで浮世の波に立つ
純粹で可愛い時もあつた妻
ブランコの風気まぐれに気まぐれに
気まぐれでない体温のある言葉
気まぐれに釣った魚がよう食べる
気まぐれな男の首はよく伸びる
気一本つつみかくしのないまこと
人間のエゴ一線を越えたがる
過去脱げば仏が見えたてのひらに
欲望の船に喫水線がない
一線を越せぬ理性が邪魔をする
しなやかな菩薩の指の曲線美
地平線はるか彼方にある母国
気まぐれな答を雨のポストまで
気まぐれで触れてはならぬ花の芯
鈍行でしがらみを脱ぐひとり旅
九条の視線の果てにある平和
純粹に生きた野良着を子に誇る

茂雄 美はる 章久 ふりこ 恵美子 弘風 のりこ 千梢 孝子 萌子 洋子 道子 理恵 義隆 盛一 風弥 生良 一 朝子 恭昌 和夫 秋雄 寿美 富子 ダン吉 國治

気まぐれな女で今日は細い眉

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

真理子

勧誘員が白アリ連れてやってきた
メゾフォルテくらいのは押しでフロポーズ
太陽にひまわりわたくしに日傘
四川から何を学ぶか地震国
買置ききの切干煮てる雨続き
吹っかれた未練へ酒の味もよし
愛は不滅と信じて男馬鹿を見る
太陽をゆつくり食べる夏帽子
リボン解くごとくお誘いのひと言
太陽の季節に恋人をとられ
後期高齢猫も杓子も騒がしい
夜更しのモカに益々冴えてくる
太陽の裏を見てから不眠症

長柳会

村上

直樹報

比翼塚もう離さない放れない
潜り戸に一寸のぞいた蛇の目傘
覚悟して家は出たけど野辺の道
弁解をすればするほど疑われ
ケータイでまた赤い糸締め直す
弁解に見えかくれる裏の顔
どら息子言い訳もせず朝帰り
老いた身を離島で暮らす母想う

浩三 いさお 扶美代 紀雄 あかり 一風 耀一 秋雄 加央里 瑠美子 柳伸 寿鶴 弥生 直樹 靖博 マサ 武男 正子 もこ 輝子 たけし

紫陽花はあなた色かと目を覚ます
朝帰り友の名借りて弁解し
男なら弁解するなときつい声
意見して叱つた子等に意見され
ライバルを離す焦りでノイローゼ
世に背き親に離反の青年期
恐いもの事故に殺人テロ家内
弁解はよそう沈黙まだ続く
添い遂げる覚悟ぐらつく時もあり
弁解はしないときめた靴の紐
距離少し置いて仲良く暮すコッ
覚悟していても悲しい別れの日
遠距離電話猫を心配してる妻
ブランドで固めた君に近づけぬ
弁解をする位なら舌を噛む
死ぬよりも生き抜く覚悟七十五
噛み合わないはずだあいつが噛んでいた
覚悟して来たなとわかる靴の音
ラガーナイフ弁解できぬ罪背負う
弁解しては支持率下げている
覚悟して人事天命待つ身です

川柳茶ばしら

板山まみ子報

幸せを当然のよう食べて寝て
治つたと勘違いした痛み止め
スピード社の水着世界を塗り替える

たかし 明子 正一 エミ 明信 敬二 光弘 けい子 幸雄 一慧 英美 靖子 和代 和子 淳司 正美 正博 芳野 三和子 富美子 不二雄 秀水 幸子 週行

本当の蚊にからかわれ飛蚊症
言われてもまだ直せない悪い癖

かつ子
まみ子

川柳塔きやらぼく

大塚

恵子報

ちちと言う深い河口に眼が眩む

瑞枝

二人居ていつも違った夢描く

春枝

お互いが選んだはずだ何故だろう

日枝子

日本の五月の慈雨の美しさ

千代

夕ぐれの空へ泣いたり笑ったり

清子

熱帯魚華麗な舞に癒やされる

ゆき

生きていてよかった今日も花満開

なみ

減反の奨励あまた飢える国

晴子

息子の背温もり感じしツォリング

章江

今蕎麦が苔をひらくときめいて

那珂子

久しぶり昔話に花が咲く

玲子

よみがえる心とからだ初夏が好き

初枝

黄砂吸いフーツと吐き出す鯉のぼり

すみえ

ボタンに札幌よりこそたつぷりと

やえ

到来の煮豆筍わらび露

寿々子

ひらめきが降ってくるまで空仰ぐ

恵子

Tシャツは涼しい木綿選びぬく

ふみ

大山がくつきり迎える帰省客

天雀

友とのむ新茶のかおりで柏餅

雪江

人ごとでない地震の恐怖思いだす

田鶴

占いはどうあれ風に乗っている

晶子

雨だれの今日の指揮者はだれですか

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

衣替え緑風を呼ぶ少女たち

啓生

整頓をしたら机が他人めく

重人

父の口もまだ咲きはこるカーネーション

郁子

月呀て相手が欲しい影法師

高栄

電話せよ帰りの遅い娘を叱る

庸佑

共稼ぎ遅い帰りを待つ子たち

タミ

軽率なわたしの中の道化者

早人

吉兆の畳が見開きした手品

寅次郎

相手みずしやにむに挑む縁台碁

岩男

好きですよ君のジョークのずれ加減

美義

影法師私の守りに疲れてる

巴子

手遅れと思うが妻にごまをする

尚士

遅咲きの花に一番世話をやく

求芽

意中の人あつてはじけぬほうせん花

志津子

疲れずにまだ動いてる妻の口

宇乃子

遅遅とした歩みも足跡は深い

幸雀

わが子なら相手致そうどこまでも

葉子

且て彼は俺の心の好敵手

肋骨

四六時中虹追っている夫と居る

十八娘

亡妻の意見聞いておけばと今思う

堅坊

意志の弱さボキッと折れる枯木です

美智代

相手次第でわたしの駒も進めます

満寿巳

隣との垣根を低くする会釈

則彦

お骨上げ母の心は見当たらす

夢

カタカナ語見るだけでも疲れます

(岩)玲子

こだわりを三日も残す深い悔い
遅々として筆が進まぬお詫状

千代
寿美子

衣替え狭き心に風も入れ

佳恵

気前よい相手の財布僕はのむ

都代子

マンネリな暮しそれでも肩がこる

萬的

疲れたら時刻表見るクセがある

扶美代

僕の影いつもばやいてついてくる

勇治

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

好きやねんひとり相撲の片思い

章司

しがらみを脱いで一人の終い風呂

ヨシ枝

母妻おんな一人三役やがて古希

いさお

蔓伸びて庭は真夏の構図なり

獭杓

伸びざかり気持よいほどよく食べる

フジ

睡眠中伸びる音する成長期

ちづる

蒔かぬ種思わぬ場所で伸びてくる

泰子

ぴつたりと娘に虫が付いている

一知

シンクロの息ぴつたりの金メダル

恵子

ぴつたりとふたりでひとりしています

重人

決算がぴつたり合ってほつとする

真一

ぴつたりと合わぬ日もある夫婦にも

一壺

先頭にぴつたりチャンス待つ余裕

庸佑

ううべまでぴつたりだった鍋の蓋

扶美代

老いてなお心はいつもベアラルク

久仁子

ベアリング今日から妻になりました

悦子

核とベア組めば減びる外はない

みつこ

紅白のワインいたたく古希の春

耕策

決めましたラストダンスはこの人と
青春も星も流るるようになり
舞洲に九条好きが八千人

美代子
美喜
敏

川柳塔みちのく

小寺 花菱報

昭和残像下駄が足から遠ざかる
生きてきた証拠を何か残さねば
七五三孫履く下駄の鈴の音
束ね苗振つていのちの音を聴く
玄関で留守番をするちの下駄
押し入れて踵キラキラかくれんば
下駄はけばカラコンコロンと遠き日々
踏み切りの向こうではの下駄の音
早苗唄聞いて昔の貌になる
燈明が瞳に揺れる桜桃忌
少年のつづらな瞳星の精
スーパの防犯カメラが役に立ち
DNA晴れて戸籍に入れられる
シャボン玉無心に追っている瞳
桐下駄は昔の恋を知っている
くもりない未来をになう子の瞳
宵宮の綿あめ持った赤い下駄
朱の下駄におんならしさが甦る
盗み食い証拠に鉛んこが付いてある
髪切つてぱっくりはもう履きませぬ
嘘になる瞳は何故かうつむいて
ふるりの青田恋しい都市砂漠

吞舟
きよし
一路
芳生
柳子
初枝
美鈴
ヒサ子
あすなろ
成柳
一呑
隼人
愁女
順風
銀波
ふさふ
雅城
花匠
井蛙
黙人
花峯
慕情

花好きの子らの瞳に嘘がない
執念で証拠の小骨拾い上げ

川柳ねやがわ

五楽庵
恵子報

選挙戦ドラマチックな泣き笑い
雨だから誘つてほしい映画でも
墓場まで女夢見るメロドラマ
日本沈没ドラマ気になる温暖化
遺された帳面語る秘めた恋
露骨には言えぬ上司に酒を注ぐ
メロドラマそんな夢みた村娘
ストレスに耐えた胃の腑が酒を恋う
真つ新のノートわたしの小宇宙
お見合いの義母が露骨に厭な顔
さりげなくする善行は気持ちいい
妻は一緒に泣いて笑うと信じてる
迷つてる影を一手押してドラマ
ことわって帰つた勇氣褒めてやる
帳面の枠はみ出したあいうえお
我を通し家族の意見寄せ付けず
家計簿繰りわが病歴を拾い出す
やんわりと妻の小言がきいてくる
四捨五入されて帳面から消える
台本にない逆転のタイガース
再会の日からドラマは走り出す
年金の目減りで増えた休肝日
孫が来て家が悲鳴をあげている

秀雄
あさ子
じゅんこ
薫
栄二
とし子
かすみ
柳弘
朝子
賢子
一風
弘一
修
一笑
寿子
ルイ子
さち子
博泉
郁夫
弘風
仁清
寅幸

南大阪川柳会

吉川 寿美報

赤がいるばかりに白黒が微妙
元氣ならいい豚でもおかめでも
年金が牛より豚にせよと言う
大阪には豚饅あつて笑いあう
アダムスミスの富の配分あずからず
ゴミ収集資源とプラとごみに分け
本論に比べ序論の長い君
嵩高い物はいらない形見分け
喜びをみなと分け合う鏡割り
女偏に気紛れと書き僕の妻
気紛れに摘んだら妻の花だった
気紛れが我が家の赤字増やしてる
真夜中にときどき磨く鍋の底
認知症何時も気紛れ二度重子
ニート族に怠けの垢が溜まつてる
入院に手垢のついた辞書ひとつ
垢まみれ老父独学のコンサイス
母さんの手垢の染みた押し車
頭脳の垢を流して無に帰る
マスコミは他国批判でめくらまし
断層の真上に住んでいる私
大地震地球の怒りかも知れぬ
切つ先は僕に向いてた都落ち
何も出来ずに被災地のニュース見る
すべてで転んで味のある顔出来る

恵子
なぎさ
あや子
滋郎
修
弘子
修
弘風
昌紀
清
忠昭
柳伸
章久
太郎
一步
憲太郎
志華子
集一
勝弘
直子
東吉
ばつは
たもつ
楓楽

身の程をうつす鏡を手放せぬ
 気配りは荷物にならず喜ばれ
 深々と下げた頭に騙される
 オリンピック聖火は遂にエベレスト
 夢の中今でも母にしかられる
 時効のない科白を妻が持つている

城北川柳会

小谷 集一報

読みかえすつもりで挟む花葉
 顔色を読んで羊羹厚く切る
 本箱に読んだつもりの本の山
 大臣の内緒はすねの古い傷
 あの世でも夫に言えぬ罪な事
 裏の裏知ってねらっている野心
 内緒だが貧乏神を飼ひ馴らす
 内緒事鸚鵡がじつと聴いている
 所在ない一日辞書を拾ひ読み
 空気よみむすんで開く処世術
 目を閉じて心ひらいて許します
 ワンボタン開けたおんなが色っぽ
 ゆらゆらと妻と女のはさま行く
 ゆらゆらとゆれる火の章水の章
 ゆらゆらと怒りの炎七十五
 西陽でもお入り下さい窓開く
 政治家は芝居のように握手する
 老いの背に少し重たい処方箋
 誰がために人を殺しに秋葉原

栄子 和雄 祥昭 弘泰 更紗 寿美 麗 昭 弘風 倫子 美智子 萬的 郁夫 順三 ルイ子 朝子 とし子 賢子 明子 志華子 正 高栄 あやめ 妻子 桂作

味噌醬油貸し借りしてた隣組
 内緒です美容体操やってます
 物価高人のことなど馬耳東風
 カラフルな涙を銀紙に包む
 娘は嫁ぎ人形少し甘えだす
 マネキンが着ての試着を諦める
 力ある限り自分の花咲かす
 穴のない堪忍袋はちきれる
 墨を摺る心ゆたかになるために
 母さんは何があってもよく笑う
 空振りの次はヒットを期待され

堺川柳会

河内

月子報

トラファン雑音に酔う外野席
 起きられぬ母を咎めた日を悔いる
 何か音聞いていると眠れない
 白旗を振れる勇気はいつも持ち
 戦争に使わないでね日章旗
 ゆつくりと歩く旗でも振りながら
 節節に自責の念を溜めて古稀
 人間のエゴに責められ泣く地球
 何しても三日坊主と責められる
 神様に凶星とされた猿芝居
 懸命の主張雑音なみにされ
 職下りて戦の旗を折りたたむ
 雑音に惑わされずに生きてゆく
 雑音の中にも響く音がある

一幸 容子 宏 恵美子 たもつ 千歩 ひさ乃 修 節子 千里 典子 としお 八千代 つづや りっえ 冬虹 梓 みつこ 好 公誠 鐘造 時雄 恵勇 伸子 玄也

雑音かどうかは補聴器が決める
 ふところに黄色い旗を持つている
 日の丸を背負い自分と勝負する
 耐え抜いて涙で抱く優勝旗
 かつぱれもズンドコ節も酒のあて
 株だけはずつとこれから触らない
 責められて脳もからだも鯨張り
 飯の世を因太く生きる匙加減
 二歳児も描けるシンブル日章旗
 河内弁ずかずかと来て指図する
 かあちゃんのすばらをパパが支える
 騙された馬鹿さかげんが身を責める
 日の丸もメインポールで胸を張り
 雑音に振り回されず突つ走る
 それ以上自分を責めるのはお止し
 戦争はいやと言うてる万国旗

サークル檸檬

吉田あずき報

扶美代 篤子 雅明 日の出 五月 朋月 舞夢 かりん 俣子 千代 像山 潤彦 山彦 唯教 天笑 月子 房子 扶美代 昌紀 美籠 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ

身の程の程がようやくわかり出し
人生ゲームそんなにあまいものじゃない
ゲームでは芸を磨けぬ春団治
快い殺し文句に死んでやり
幕引きの格差吉兆くだおれ

川柳塔打吹

野口

節子報

たもつ
(久)千代
哲夫
遠野
楓楽

漁火か蜩か海がにぎやか
残り火で燃やす三十六度五分
漁り火のひとつひとつが仕事場だ
やさしさにふれて心に灯がともる
胸の火を憶けないうちに消しておく
値上りで漁火消えた夏の海
夜も更けて源氏蜩がやって来た
残り火を心おきなくともしたい
火の中に投じた手紙泣いている
行灯に産まれ変わった盆提灯
火加減のいらぬ暮しに慣らされる
問責決議早期解散火花散る
一人の灯消しにかすかに聞く汽笛
灯は消せぬ幼なじみの客が来る
灯を消して今日の戦をふりかえる
叩き合いスポーツだから美しい
肩叩き敬老の日のプレゼント
減らず口叩く元気な口がある
叩いたら単細胞と鳴る頭
近頃は親が叩かず子が叩く

三津子
石花菜
美美子
芳光
滋

地震などへつちやらビーと雀の子
女先生真つ先机にもぐり込み
予告なし大地ゆるがす大地震
わくわくと出たが私の椅子がない
わくわくと派手目に決めた試着室
ササユリが咲くとわくわくする私
いつ脱ぐかわくわくと待つメロドラマ
女房をわくわくさせる時が華
紫陽花がわくわく梅雨の顔になる
わくわくと毬は国境越えて行く

六甲川柳会

伊勢田

毅報

握手してはつと灯がつかました
梅雨空と握手元気に過ごさんか
限定に弱いケーキがよく売れる
菓子貰えず遠くで見てた紙芝居
甘党も愚痴りたい日は縄のれん
お供えに孫の手のびて目は傍に
手みやげのお菓子の味がこびりつく
菓子折に忍ばせている下心
哀惜を歌う防人いとななし
体張つてわが子を守る大だつて
攻められて守りの極意会得する
猛犬と書いて門口守る家
ふる里を守る母の手時刻む
守りたい人がいるから生きられる
今日は民あすは自分を守りたい

いわゑ
みつ子
能子
めぐみ
武彦
純江
順子
美穂
基輔
茂
政一
美恵子
孝子
和郎
繁義

守るより攻めが大好きへボ将棋
命を守るためにタバコを止めました
議員とは己を守るためのもの
紫陽花が小雨を浴びて艶を増す
艶やかにあじさい雨に濡れている
鮮やかな森林浴で若返る
手のひらに止まった蜩彼かしら
母さんが大事にしてる種袋
信号を守り時流に乗り遅れ
核捨てた後の笑顔を見てみたい
時どきは小石を蹴つて憂さ晴らす
真つ直ぐに歩けば歩くほどひとり

倉吉川柳会

竹信

照彦報

いつどこで風になるやら考える
風貌は怖そう腹のいい男
のぞきもせず心もつげず行つた風
風通り古家に住んでクールビズ
エヤコンの冷氣あてられ風邪をひく
風に乗る花の匂いを嗅ぎ分ける
無限大何で測りよう親の愛
自惚れて月や火星に立ちたがる
孫もつて計り知れない父母の恩
やじろ兵衛愛の重さに揺れている
何事も目分量とは重宝な
料理上手体重計を隠してる
料理する味は毎度の目分量

正己
忠貞
洋一
光久
恵
悦子
千賀子
祥子
寛子
無限
毅
楓楽
玲坊
和枝
克枝
日出子
貞子
京子
喜美子
茶子
康子
よしえ
酔芙蓉
萩江
龍枝

体重計そつとのもつてもびんと跳ね

体の愚痴尻尾ふりふり聞く愛犬

尻尾つけねずみになった学会会

巻き寿司の尻尾を切つてまず試食

沖釣りで鱈のヒレを見て尻尾まく

しぶとくて尻尾を出さぬ大狸

尻尾ふり犬は涙で正座する

いい人だ尻尾ふりふりついて行く

山村の三里四方がわが宇宙

山村の切り裂きジャック高速道

余所様が見れば綺麗な千枚田

合併してから過疎になつてゆく

山村に初声あげた鯉のぼり

山裾に張り付くように灯がともる

山背負い静かな農家煙なし

山村は遙かに見ると楽天地

エコ発電風と太陽神頼み

岬川柳会

八十田洞庵報

傷口を舐め合うほどの仲の良さ

占いも信じる心あれば良い

水やりをしなくとも良い梅雨も好き

化粧するギャルをおじさま目をそらし

競馬にビール親父のようなギャルも居る

句姿にやさしさ匂うお人柄

涙壺空っぽにした子の急死

遠い日の傷口癒やすひとり旅

祐子

由起子

瑞子

けいこ

重忠

風露

賀寿恵

泰輔

石花菜

次男

芳光

螢

玲子

悠子

恭子

和子

照彦

気合入れががんばる後期高齢者

草餅が語る昭和の顔と顔

どちらさん我が娘になずねる老いの母

ギャル曽根の涙がくしたうす笑い

カラフルに着こなすギャルの街闊歩

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

鳥の名は知らずともよいいい声だ

蜘蛛の巣がグリーンと延びて五月晴れ

樺林を抜けても妖気漂って

明日着る服にまだまだ気がまわる

風一杯吸い生きかえる大山寺

往く雲も新緑浴びてフワフワと

葛からむ杉が見て来た今むかし

大木がどつしりかまえたのもやし

富柳会

池

森子報

ねじ花と螺旋階段から空へ

一人ぼっち風がくすぐる足の裏

森の匂いを百貨店で買ってきた

びつたりと合う鍵穴はまほろし

どん底で命をつなぐパンの耳

わだかまり一つ抱いて川になる

母の知恵多様に生きるパンの耳

恵まれた紙風船が跳ねている

五体満足脳もまだまだ五ツ星

夏ばとけ多忙でパンを供えられ

年子

洋子

桜琴

蛙城

洞庵

公一

雪江

ふみ

日枝子

正二

多美子

すみえ

登美枝

よしみ

扶美代

アキ

鐘造

登子

澄子

紅紫朗

和子

晴美

神様の恵みで今朝も目が覚める

故郷の山に登れば亡母が居る

わたくしの声を引き出す期待の瞳

おむすびの中に弱音を包み込む

登り詰めおごりの先に落ち穴

思いやる心が昨日家出した

哲字は僕がごはんで妻がパン

コッペパン育ちが日本築き上げ

大企業頭を下げて事済す

勇ましく被る兜は新聞紙

腹芸で泳いでみせる鯉職

隣国へ行つたり来たりする海図

あんばんのへそのあたりにある安堵

花活けてひとりの春がものたらぬ

急斜面一氣に登る嫉妬心

長寿にも春眠という恵みあり

母となり母に大きなありがとう

春風女一人の屋根に吹く

人間を真一文字に登る坂

春の台詞は春が過ぎると散り急ぐ

川柳さんだ

北野

哲男報

老いた蚊もやんわり弱味刺しに来る

やんわりと紅葉マークで行く旅路

米寿でも貴方は今も若葉さん

一言で天地揺がす川柳子

ヒーローの一言待っている熱気

一慧

けい子

あかり

佳子

七朗

壽峰

ひろし

高鷲

紀

武人

寿之

未知

よりこ

鬼焼

彦次

伸雄

奏子

千恵子

欣之

森子

哲夫

雅司

一泉

見

千代子

一言を飲み込むための縄のれん
 パンにかび防腐剤なし安堵する
 本当の値打ちは心の底にある
 近くまでは分つてもうえない値打ち
 嫁いでも優しすぎるよ吾亦紅
 身の丈に合わすとかが知れたもの
 ゴキブリを退治した日は大ビール
 湿っぽい心の奥に潜むカビ
 なめ合えば傷口さらに深くなる
 ハッピーな頃に撮りたい心電図
 老人のマグマを甘く見た政治

川柳塔まつえ吟社

三島

三島 松丘報

空梅雨を田圃の蛙不安がる
 蛙とび出来た昔に撫でる足
 ふる里へ帰れ帰れと蛙鳴く
 筆持たすやっぱりの子蛙の子
 梅雨どきに蛙合唱耳障り
 梅雨に入り窓に這い付く青蛙
 人柄の違い見事な処世術
 間違いは言わぬ古来の知恵袋
 後期とは違う元氣な高齢者
 役終えて去年と違う花火みる
 違和感に雨の日明るい彩を着る
 昨日とは違う元氣に靴を履く
 信号の点滅私惑わせる
 黄信号一緒に走つてくれますか

正和 子 歳子 キヨミ 朋月 ちあき 二英 好文 婦美子 章子 忠 哲男 知恵子 幸子 政子 英子 和歌子 長吉 きみえ 螢 玲子 多賀子 桂子 幸 紫見

わたくしの中で点滅する信号
 さらさらの信号があり医者者の門
 信号を避けて戻った回り道
 青信号ボチも待ってる助手の席
 さっぱりと水に流したわだかまり
 国政の進路さっぱり解らない
 農作業機械さっぱり稼働せず
 さっぱりとカットの髪に夏の風
 退院へ髭さっぱりと剃っている
 胡瓜もみさっぱり夏の夏を呼ぶ
 短命のはずがびんぶん生かされて
 幸せを取り逃がしてる昼の月
 幸いに夜露をしのぐ屋根がある
 輪の中に居て幸いに気がつかず
 幸いに軽傷でした外科の椅子
 妻の留守これ幸いと昼の酒

川柳塔鹿野みか月

土橋

青い実がおはれた池で会話する
 青い実の後追いかけた若い日々
 傷つかず熱せと願う親心
 青い実の二十世紀も人気もの
 熟すまで待てぬ果実より幼い日
 母の日も姑は畑の草むしり
 影武者の筋を通した死の美学
 使っただけあれば嬉しいお金です
 グランドのゴルフ爽やか朝の風

多喜 蘭 敬三 茂美 静恵 たけし 小生 邦代 房子 治代 日出子 禮子 柳歩 ちえこ 叮紅 崧丘 螢報 菊野 露子 惣子 汲香 満 幸枝 彩子 和彦 武彦

青い実も見栄張っている惚けられぬ
 青い実の山椒ビリッと味きかす
 青い実が混ざり値段も叩かれる
 青い実になりそこなつた花めしべ
 青い実の夢にエールを惜しまない
 たまに出る老人会にくつたくな
 くたくなもやがて大河へ夢のなか
 老いてくたくな腰かけが欲しくなる
 封せず家族はなしはにぎやか
 封印の掟があつて重い封
 くたくなの父を吊した衣紋掛
 くたくなになつても父にある重み
 青い実ま落ちる実梅を叱れない
 青い実のは危い橋に興味もつ
 青い実に夢めぐらしている小鳥
 選ばれて律儀に肥る青い実よ
 青い実の夢を奪っていく戦
 現世であなたに逢えた幸がある
 本望をあきらめないで空を見る
 青い実の孤独を赤い実には知らぬ
 そのときは仏になると決めている

岩美川柳会

石谷美恵子報

招き猫拜んで楽屋入りをする
 神様がおれの楽屋を覗き見る
 楽屋には他人に言えないことばかり
 人間の臭いプンプンする楽屋

睦子 房子 実満 きみ子 公子 保子 富久江 かおる 久枝 みどり ひろこ くに子 諷人 弘子 永子 孔美子 茶子 宣子 はるお 盛桜 螢 蟹郎 孝男 一瑤

楽屋には種も仕掛けも置いてある
 ひたひたと何んにも迷うことはない
 老いふたり本音がひよいと出る楽屋
 青春の楽屋に燃えている闘志
 強がりの楽屋だれにも覗かせぬ
 何に彼にと楽屋雀が喧しい
 楽屋では敵も味方も仲が良い
 這いあがる夢を孕んでいる楽屋
 私の狭い楽屋で化粧する
 すぐそばに迫った敵に気がつかぬ
 ひたひたの岩清水すうおちよは口
 水加減ひたひたと火イギス練る
 ひたひたと涙は洩れぬ亡母の愛
 ひたひたと纏わる足に笑み返す
 肉体美競う楽屋の女衆
 ポンコツ車も脈もとときき止まります
 温暖化地球の四季を止めないで
 喪が明けて止った時間動きだす
 政治不信もとうにも止まらない
 少年の暴走止めた母の愛
 逝く日までこの手の足止められぬ
 鈍行の止まる駅には温い風
 神さまの目に止まるまで鈴を振る

一京 是るお 陸子 公子 完司 かつみ 公乃 一粹 和子 圭一郎 重忠 よしえ 幸子 幸枝 螢 忠良 節子 たぬ 清帆 幸安 菖子 雅女 美恵子

翠洋会 安土 理恵報 満作 春

みみず這う手紙に母の匂いする
 肩書きを取れば優しいお父さん
 飽きるほど生年月日を書きました
 一身上と書いてからが進まない
 青春のロマン求めて古本屋
 古希過ぎてまだ青春の夢捨てず
 ロマン求めて笹舟岸を離れゆく
 カップ麺ロマン捨てろと言っている
 熱くロマンを語りパクパク食べる
 母さんのロマンキッチンで詩をつくる
 男のロマン時には妻や子を泣かす
 百合の花色で惑わし香で酔わす
 百花繚乱あなただけが光っている
 みとれてた百合の花粉に恵まれ
 江戸初期のロマン惚け立ち尽くす
 古き良き時代なつかし武家通り
 黒豆をブランドにして町おこし
 殿様の気分で巡る城下町
 山のみどり崩れることのないように
 篠山の誇りはじける丹波栗

昭 日の出 義 恭昌 捷也 浩二 理恵 富子 蕉子 希久子 楓楽 弘子 すみ子 桃花 舞夢 茶々 げんえい 尚士 みつ子 集一

尼崎尾浜川柳会 田原 宏一報 宏一 雪菜 もも子 よし子 朋月

今年またあなたの新茶ありがたく
 あの時の別れが永久になろうとは
 この前の話と延えん蒸し返し
 夕鶴の話す身の上聞き忘れ
 環境と言う名で稼ぐエコバッグ
 後期とや所詮末期の藐睨み
 咄家は人に笑われ家を建て
 やれやれと背中のはせる仕舞風呂
 ライバルに休まれた日は物たりぬ
 母の年越えて六十路に喝をいれ
 楷書草書恋はだんだんうまくなる
 真相を話すためらいがちに眼に
 悔しくてB4で書く果たし状
 同居して時にうとまし三世代
 脇道へそれる話につり込まれ
 あつさりと果立つていったつばめの子
 時刻む鎖の先に妻がいる
 鯨舌に話す城趾の草いきれ
 夢の中たのし時空を駆けめぐる

昭三 亀与子 全彦 孝一 正治 義芳 野薫 五月 江見 イサミ 靖鬼 紀乃 里江 美代子 耕治 政江 美義 求芽 美籠

うぶみ川柳会 小谷美ツ千報 美ツ千 京子 和子 美知江 龍枝 かつみ

集落をあげてウキウキ嫁迎え

船出するテープが切れてからの海

ウキウキとまた階段を踏み外す

長生きのDNAで案じられ

明日のことは神さままかせ種をまく

カリカリもウキウキもせぬ人形だ

緊張が解かれウキウキ蝶になる

新一年いっぱい抱えている校舎

バージンロードからは見えない前途

妻だけがウキウキしてる誕生日

激辛のカレーが前途遮った

風邪引いたわたし案じて鳴く鳶

お隣の前途見上げる鯉のぼり

ササユリが前途に夢を下さった

ウキウキとクヨクヨその繰り返し

静脈をウキウキ明日を追いかける

寝ていても怠けていても歳をとる

その笑顔十年先もあるように

天人

尚江

芳江

節子

信

幸恵

あづま

雄人

ひろこ

睦子

玲子

きみ子

よしえ

重忠

完司

登

石花菜

宣子

お願い

川柳塔事務所

最近の郵便事情により、川柳塔誌が遅れて届くことがあります。川柳塔誌は必ず発送日を（20年1月号128ページ掲載）厳守していますので、しばらくお待ち下さい。事務所への投函その他原稿も締切日へ余裕を以て投函してください。

川柳塔すみよし

発足記念句会の一日

降りみ降らずみの空模様であったが、「川柳塔すみよし」発足記念句会は6月28日、80名の参加者があり、にぎやかな初句会となった。

満席の会場は今年2月移転オープンしたばかりの住吉区民センターの一室である。

この会場付近は、かつて麻生路郎師の住まいがあり、近くの阿部野神社には、麻生路郎、清水白柳のほか、堀口塊人、金泉萬楽などの川柳句碑が立っており、川柳にゆかりの深い土地柄である。阿部野神社の句碑には

夕桜とんばがへりがしてみたし 路郎

菊活けてひととき欲を忘れたり 白柳

等がある。

うつつうしい梅雨空を吹き飛ばす明るい笑顔と緊張の中、岩崎公誠氏が司会をつとめ句会は始まった。

はじめに天笑主幹からお祝いの言葉があり続いて、会長の鶴田達野氏が挨拶。

二年前地元の人々数名が駅前や、イベント会場で、一般の人に「川柳をはじめませんか」のチラシを配布、広く呼びかけをして会員を募り勉強会として立ち上げ、現在

会員数は24名である。今後とも出席をよろしくと述べた。

次いで生前の路郎師を知る阿萬萬的氏からの一言として、前述の句碑や、路郎師ゆかりの地方の句碑を忘れることなく、時々訪れ、守り、後世にも伝えていただきたいと話した。

次に麻生路郎の孫である理事の西村哲夫氏が祖父との関わり合い、思い出を語る。

小学校三年生の夏、祖父路郎の葬儀の日ことは鮮明に記憶にある。幼い頃は、万代池の近くの祖父の家を訪ねた折、祖母霞乃のあとばかり追っていた。祖父路郎の川柳家としての偉大さ、知名度を知ったのは、ずっと後のことである。ふとしたきっかけから、川柳塔本社句会に出席、薫風先生と会い、川柳塔との縁が再び繋がったと話した。会は披露へと続き、まだ入会間もない新誌友の大隈克博氏も天位に入選を果たした。

句会は五時終了、近くの土佐料理「竜馬」での懇親宴へは33名の出席、談笑と歌声に、しばし時間を忘れて一同、日頃のストレスを解消できたようである。当日の天位

真つ白い紙が時には火花生む 西口いわゑ
お部屋から一歩も出ない万歩計 大隈 克博
警官の欠伸している町が好き 榎本 日の出
人間に生まれたことが大吉だ 矢倉 五月

（希久子記）

2008文化祭吹田市民川柳大会

日 時 9月28日 11時開場
(多忙者9時から受付)
場 所 吹田メイシアター1階集会室
(阪急北千里行き吹田駅西口前)
宿 題 「連想吟」 ○ 湯澤冬扇坊 選
「あんた」 辻 葉 選
「嘘」 谷垣 郁郎 選
「迷う」 島村美津子 選
「笑う」 池 森子 選
「過ぎる」 西 美和子 選
「動く」 長江 時子 選
会 費 1500円(秀吟賞・参加費・軽食)
アトラクション(吹田市マジック連盟による演技)
見 学 一般市民の方の見学可。川柳作品展示。
食事会 会費 2500円(当日申し受け)
希望者 9月15日までに、下記へ申し込み
坂本 晴美 ☎・FAX (06)6384-2466
中川 隆充 ☎・FAX (06)6833-0744
主 催 吹田川柳会
吹田市文化団体協議会他

弓削川柳社創立60周年記念 第6回おかやま県民文化祭協賛 第60回 西日本川柳大会

と き 9月7日(日) 9時~16時
ところ 久米南町文化センター
岡山県久米郡久米南町下弓削
[第1部] 締め切りました
[第2部] 当日11時出句締切り
宿 題 「河 童」(茨城) 太田紀伊子 選
「押 す」(新潟) 大野 風柳 選
「続 く」(秋田) 恒弘 衛山 選
「歴 史」(秋田) 長谷川紫光 選
当日題 「 」(鳥取) 新家 完司 選
[ジュニア]
宿 題 「休 み」(秋田) 河原 千壽 選
「机 」(岡山) 久本にい地 選
参加費 2000円(昼食・発表誌呈)
主 催 弓削川柳社・久米南町
久米南町教育委員会

第22回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月14日(日) 12時30分開場
ところ 堺市立梅文化会館 3階
堺市南区桃山台2丁目2番1号
TEL 072-296-0015
(泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)
おはなし 「句会あれこれ」 中田たつお
宿 題 「奇 数」 板野 美子 選
「渋 る」 岩崎千佐子 選
「すっきり」 河内 天笑 選
「謎」 墨 作二郎 選
「盛り場」 中野 健吾 選
「ダブル」 森中恵美子 選
「ヒント」 山本希久子 選
(50音順)
席 題 なし 各題2句 締切り13時30分
出句料 1000円(作品集、参加記念品呈)
賞 各題秀句に呈賞
主 催 堺市文化団体連絡協議会
連絡先 堺川柳協会 河内天笑 方
TEL 072-278-4706
〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

第26回 井笠川柳会誌上大会 薬 ひこばえ

課 題 「合 図」
中田たつお(堺市) } 共選
正畑 半覚(竹原市) }
西川けんじ(岡山市) }
「違反」
小野真備雄(岡山市) } 共選
長島 敏子(神戸市) }
田辺 進水(松山市) }
応募要領 便箋又は所定の用紙に各題2句(計4句)を列記し、〒番号・住所・氏名・柳名・TEL・所属柳社名を明記し応募料と送付してください。
応募料 1000円(定額小為替)発表誌送付
締 切 8月31日(日) 消印有効
投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会 TEL・FAX 0865-62-6200
賞 品 課題天位のうちから総合成績により句碑贈呈。その他三才入選句に賞呈
主 催 井笠川柳会(日川協加盟)

柳界展望

がある 他4句。
なお受賞式は6月23日に
行われた。

▽御芳志御礼△

○西出楓楽さん（理事長・
大阪市）から文学賞受賞を
記念して金一封拝受。

○三宅保州氏（理事・海南
市）から金一封拝受。

○本田智彦氏（日川協事務
局長）から金一封拝受。

▽出版△

○前たもつ氏（相談役・大
阪市）は7月1日付で川柳
句集「山びこの詩」を発刊
（B6版190頁上製）句集紹
介は次号。

▼計報▲

●斎藤大雄氏（日川協常務
理事・札幌市）6月29日逝
去、葬儀は7月2日。75歳。
偲ぶ会は8月30日。

▽同人動向△

○池森子さん（理事・富田
林市）は川柳マガジンの
「読者柳壇」の選者を20年
8月号から一年間担当する。
○6月8日、第32回全日本
川柳2008年福岡大会に
出席のため西出楓楽理事長
他10名福岡市行。

▽川柳講座受講生募集△
尼崎市総合文化センターで
「川柳はじめてみませんか」

会者定難

すべて約束

ことのち 礎石

第23回襲（ひこばえ）の天
位に入賞した中塚礎石氏
（同人・相生市）の句碑は笠
岡市の川柳公園に建立され、
5月24日除幕式が行われた。

立建碑句



新同人紹介

米^{よね} 富^{とみ} 淳^{じゅん} 風^{ふう}

笑司・ダン吉・東吉推薦

児^こ 玉^{たま} 俊^{とし} 昭^{あき}

笑司・ダン吉・東吉推薦

加^か 川^{がわ} 靖^{せい} 鬼^き

楓楽・美籠・耕治推薦

紹介者 坂 裕之

常任理事会 7月7日(月)出

席18名①第14回川柳塔まつ

り進行順序②高野山合祀祭

の日程③初歩教室選者交替

の件④新年度理事、常任理

事の推薦⑤定例確認事項⑥

各部報告事項⑦その他。次

回常任理事会8月8日(金)1

堺市

紹介者

大隅 克博

門真市

紹介者

八坂 英雄

倉岡 睦雄

陸雄

時30分

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	17日(日)午後1時半締切 忙しい・助ける・利息・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	17日(日)午後2時締切 上品・真ん中・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時50分締切 遅れる・自信・一度・自由吟	豊中市中央公民館 阪急竹根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市竹根西町2-8-4 江見清
川柳 さんだ	19日(火)午後1時から 祈り・配る・ぐるぐる・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前9時半から 予告・砂漠・費用・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	23日(土)午後7時締切 切る・すっきり・素敵・仏	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳塔 すみよし	23日(土)午後1時30分締切 全力・不信・猫	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遼野
岸和田 川柳会	23日(土)午後2時締切 援助・おさえる・かたい 「グッバイ」	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
和歌山 三川柳会	23日(土)午後1時から 葉・旅・まつり	和歌山県民文化会館5階 大会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
八尾市民 川柳会	第55回 八尾市民川柳大会 24日(日)午後1時締切 有・太・鬼・血・世・都・志	八尾文化会館5F レセプションホール 詳細7月号93頁参照 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
はびきの 市川柳 民会	24日(日)午後2時締切 波・拭く・むくむく・オアシス	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	24日(日)午後1時より ガッツ・ぐちゃぐちゃ・過去帳	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
南大阪 川柳会	25日(月)午後6時から あとがき・中年・ひたすら サプライズ	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	25日(月)午後8時から 休む・急ぐ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	25日(月)午後2時締切 こんもり・帰る・執念	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月31日(木)12時半締切 第26回 夜市川柳大会	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
富 柳 会	2日(土)午後2時締切 伸・ひまわり・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 川 柳 会	2日(土)午後1時開場 介護・守る・うれしい・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮駅3番出口1左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	2日(土)午後2時締切 土俵・著しい・～として	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	4日(月)午後1時半から 不意・公園・グラス	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	7日(木)午後1時から 泳ぐ・盆・催促	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 打 吹	9日(土)午後2時締切 港・送る・げらげら	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 みちのく	9日(土)午後5時半締切 溜息・値段・役目	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉宮宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	9日(土)午後2時締切 波・歴史・失う・メール	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳大阪	9日(土)午後1時から 注文・道・削る	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 わかやま 吟 社	10日(日)午後2時締切 築く・空想・ビリオド・「家電」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後1時から 曲る・音・メンバー・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	12日(火)午後2時締切 冷・照・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	12日(火)午後1時半締切 人脈・繁る・眩しい	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール 蜷池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
岬川柳会	17日(日)午後1時半締切 師匠・再会・塗る	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵

一賞選考規定（要約）

川柳塔社各賞選考規定

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 主幹・理事長
北海道・東北 関東 北陸（2）
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ五句ずつ選出した十句中から主幹が決定するものとする。
 - ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成二十年度二賞選考委員

第一次選者（六名）

河内 天笑・西出 楓楽・小島 蘭幸

村上 玄也・山本希久子・木本 朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係（二名） 河内 天笑・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

北海道・東北 関東 北陸ブロック（二）

菊地 政勝・蘭田 猿香

京都・奈良ブロック（一）都倉 求芽

大阪ブロック（六）

穴吹 尚士・桑原 道夫・瀬戸まさよ・高田美代子

寺川 弘一・平松かすみ

兵庫ブロック（三）

北野 哲男・牧渕富喜子・山本 義子

和歌山ブロック（二）牛尾 緑良・古久保和子

鳥取ブロック（四）

岩崎みさ江・倉益 一瑠・武田 帆雀・最上 和枝

島根ブロック（三）

小川 注湖・竹治かし・松本 文子

岡山・広島・山口ブロック（二）

石原 淑子・平田 実男

〔四国・九州（二）〕市丸晴翠・高橋宏臣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いのないようお願いします。

平成二十年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 鈴木 公弘 西口いわゑ

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 遠山 可住 播本 充子

編集後記

待たれます。

第1回甲子園での大会は大

正4年に始まり、戦時下4年間の中断があつて、今年

は第90回を迎えています。

☆「川柳塔」誌の前身「川柳雑誌」の編集は、甲子園球場に近い鳴尾村の麻生路郎の自宅で行われていました。大正13年8月号の編集後記に路郎師はこう書いておられます。

—此の頃の鳴尾は全国中等学校の野球試合で大騒ぎです。甲子園グラウンドとい

うのは同じ鳴尾で、社から西へ三丁ばかりのところですね。臨時停留所ができておます。編集してある頭上を飛行機が十機も入り乱れて飛んでゐます。逆転横転縦横無尽ここともとまるで絵本の空です。—

☆厳しい暑さですが、間もなく夏の高校野球が開幕となります。今年はどうなドラマが展開され、どんなヒーローが登場するのか、甲子園からの爽やかな風が期

ひとこと

サラ川と無責任時代

本人に聞けば「川柳として楽しんでるだけです」と、答えるかもしれませんが、サラ川の傑作集を拝見していると異様にさへかんじる句をみかけます。後は野となれ山となれの無責任時代、根性まで腐ってしまったのではないかと心配します。しかし川柳は、もともと笑いと滑稽の言語遊戯であつたことを考えれば、年寄りの冷や水かもしれません。

選者の一人山藤正二氏は、「日本人はすごい」とほめたたえていますが、サラリーマンのストレス解消には多少とも役立つでしょう。

会社における、家庭における不満をスパイスの効いた川柳で詠めば、楽しいかも知れません。

頭の中で滑稽を絵にしようとする安易な考え方で量産されると、自虐的なとらえというよりも、嫌悪さえ感じると当の選者の一人尾藤氏は雑誌の対談でこぼしてました。

(井上桂作)

○一級河川もいろいろで河川法で、国の管理下にあるとある。それで淀川はもちろ

んの事我家のマンションの横を流れる小川のような川も一級河川になっている。

少しでも雨が降ると水量がまし、梅雨の時期は毎日のように変わる。そのうえ堰

があり水音もかなりのもので夜中に目を覚ますこともしばしば。大阪で水音を聞

くで(車で五、六分)螢が見られるとは・・・三回も見に行つてしまった。

○雨が降らなくて困っている国々があり、水戦争があるとも・・・「水を治めるものは 国を治める」と言

われた事が、今まさにそのとおりになっているのかもしれない。日本の文化は美しい水から聞いたことがある。いつまでもそうであれと願う。

(恵)

姓·雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成19年9月号から平成20年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 120・P 121を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)地名

都府道市
県
姓雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「うろうろ」 (8月15日締切)

10月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

10月号発表(8月15日締切)

川柳塔(8句) 河内天笑選
水煙抄(8句) 小島蘭幸選
愛染帖(3句) 新家完司選
檸檬抄「うろうろ」(2句) 高瀬霜石共選
木本朱夏選

一路集(3句) 「不意」伊藤寿美選
「公園」岸野あやめ選
「グラス」伊勢田毅選
初歩教室 「なげ」(3句) 三宅保州担当

11月号
檸檬抄「許す」
一路集「舌」「ざわざわ」「クイズ」
初歩教室「黒」

本社8月句会

とき 8月8日(金) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切時間にご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし 「カルチャーショック」 新家完司
席題 「なんで」 吉村一風選
兼題 「山」 志田千代選
「仕掛ける」 岩佐ダン吉選
「リゾート」 川上大輪選
「挑戦」 奥田みつ子選
河内天笑選

会費 1000円 投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社9月句会

8日(月) 午後5時半から
兼題「大きい」「幅」「浴びる」「コーナー」「演技」

第27年度 夜市川柳募集

第3回「火」鈴木公弘選
ハガキに3句 8月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇八年(平成二十年)八月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七九一三四九〇番

振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)